

ServerView Suite

ServerView Operations Manager V5.0

Installation under Windows:

Installation ServerView Operations Manager

Installation ServerView Update Manager

Installation ServerView Event Manager

ServerView database (Windows)

製品名称の表記

本書では、本文中の製品名称を、次のように略して表記します。

製品名称	本文中の表記	
Microsoft® Windows Server® 2008 Standard Microsoft® Windows Server® 2008 Enterprise Microsoft® Windows Server® 2008 Datacenter Microsoft® Windows Server® 2008 Foundation Microsoft® Windows® Small Business Server 2008 Standard Microsoft® Windows® Small Business Server 2008 Premium	Windows Server 2008	
Microsoft® Windows Server® 2008 R2 Standard Microsoft® Windows Server® 2008 R2 Enterprise Microsoft® Windows Server® 2008 R2 Datacenter Microsoft® Windows Server® 2008 R2 Foundation Microsoft® Windows® Web Server 2008 R2	Windows Server 2008 R2	
Microsoft® Windows Server® 2003, Standard Edition Microsoft® Windows Server® 2003, Enterprise Edition Microsoft® Windows Server® 2003, Enterprise Edition for Itanium-based Systems Microsoft® Windows® Small Business Server 2003	Windows Server 2003	Windows
Microsoft® Windows Server® 2003, Standard x64 Edition Microsoft® Windows Server® 2003, Enterprise x64 Edition	Windows Server 2003 x64	
Microsoft® Windows Server® 2003 R2 Standard Edition Microsoft® Windows Server® 2003 R2 Enterprise Edition Microsoft® Windows® Small Business Server 2003 R2 Microsoft® Windows® Storage Server 2003 R2, Standard Edition	Windows Server 2003 R2	
Microsoft® Windows Server® 2003 R2 Standard x64 Edition Microsoft® Windows Server® 2003 R2 Enterprise x64 Edition	Windows Server 2003 R2 x64 または Windows Server 2003 R2	

製品名称	本文中の表記	
Red Hat Enterprise Linux 5	Red Hat Linux RHEL5	Linux
Red Hat Enterprise Linux AS (v.4)	RHEL4	
Red Hat Enterprise Linux ES (v.4)		
SUSE Linux Enterprise Server 11	SuSE Linux SuSE Linux SLES11 または SLES11	VMware
SUSE Linux Enterprise Server 10	SuSE Linux SLES10 または SLES10	
VMware ESX 4	ESX4	VMware
VMware ESX 3.5	ESX3.5	

著作権および商標

Copyright © 2010 Fujitsu Technology Solutions GmbH.

All rights reserved

Microsoft、Windows、Windows Server、Hyper-V は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Linux は、Linus Torvalds 氏の米国およびその他の国における登録商標あるいは商標です。

Red Hat および Red Hat をベースとしたすべての商標とロゴは、米国およびその他の国における Red Hat, Inc. の商標または登録商標です。

BrightStor, ARCserve は、CA, Inc の登録商標です。

VMware、VMware ロゴ、VMware ESXi、VMware SMP および VMotion は VMware, Inc の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

その他の各製品名は、各社の商標、または登録商標です。

その他の各製品は、各社の著作物です。

目次

1	まえがき	9
1.1	対象者および目的	10
1.2	技術的要件	11
1.2.1	管理コンソール	11
1.2.2	中央管理用サーバ (CMS)	12
1.2.3	ServerView エージェント	13
1.3	旧版からの変更点	14
1.4	ServerView Suite のマニュアル	15
1.5	本書の表記	16
2	サーバ管理	17
2.1	アーキテクチャ	17
2.2	管理用サーバでのインストール	18
2.3	監視対象サーバへのインストール	19
2.4	Operations Manager の統合オプション	20
3	管理端末へのインストール	21
3.1	ServerView Operations Manager のコンポーネント	22
3.2	JBoss Web サーバ	24
3.2.1	起動および使用ポート	25
3.2.2	ロールベースのユーザ管理	26
3.2.3	認証の管理	26
3.3	Web ブラウザ	26
3.4	準備	27
3.4.1	SNMP サービスのインストール	28
3.4.2	Sun Java Runtime Environment (JRE) のインストール	30
3.5	SQL Server のインストール	31
3.5.1	管理端末のローカルへのインストール	33
3.5.2	別のシステムへのリモートのインストール	35

3.5.3	SQL Server のドメインコントローラへのインストール	36
3.6	SQL Server 2008	38
3.6.1	ソフトウェア要件	38
3.6.2	SQLServer のエディション	38
3.6.3	サービスアカウントのセットアップ	39
3.6.4	SQL Server 2008 Express Edition のインストール	41
3.6.5	SQL Server 2008 Enterprise/Standard/Workgroup Edition のインストール	44
3.6.6	SQL サーバ管理者権限を持つユーザアカウントの追加	46
3.7	SQL Server 2005	47
3.7.1	エディション	48
3.7.2	インストールの準備	49
3.7.3	SQL Server 2005 Express Edition のインストール	49
3.7.4	SQL Server 2005 Enterprise/Standard/Workgroup Edition のインストール	53
3.8	SQL Server 2000 (MSDE 2000)	55
3.8.1	MSDE 2000	55
3.8.2	SQL Server 2000	57
3.8.2.1	エディション	57
3.8.2.2	インストール	58
3.9	リモートの SQL Server の設定	59
3.10	SQL Server のアップグレードインストール	64
3.10.1	新しいバージョンの SQL Server へのアップグレード	64
3.10.1.1	SQL Server インスタンスのアップグレード	65
3.10.1.2	ServerView データベースの移動	72
3.10.2	SQL Server 2008 Express から SQL Server 2008 へのアップグレード	78
3.10.3	SQL Server 2005 Express から SQL Server 2005 へのアップグレード	81
3.10.4	MSDE 2000 から SQL Server 2000 へのアップグレード	85
3.11	Operations Manager の Windows ターミナルサーバへのインストール	89
3.12	Operations Manager ソフトウェアの GUI ダイアログ形式インストール	91
3.13	他の Operations Manager ソフトウェアのインストール	107
3.14	Operations Manager ソフトウェアのアンインストール	108

4	ServerView データベース	111
4.1	構成ファイル ServerViewDB.ini	111
4.2	データベースへの接続中断	113
4.3	ServerView データベースの管理	114
4.3.1	SQL Server 2008/2005	114
4.3.2	SQL Server 2000 および MSDE	116
4.4	ServerView データベースのバックアップ	118
4.4.1	ServerView データベースのバックアップジョブ	118
4.4.2	ジョブの実行要件	120
4.4.3	バックアップジョブの進行確認と編集	121
4.4.4	バックアップファイルがあるかどうかをチェックする	126
4.4.5	バックアップファイルの内容をチェックする	129
4.5	ServerView データベース のリストア	131
4.5.1	SQL Server Management Studio によるリストア	131
4.5.2	Enterprise Manager によるリストア	134
4.5.3	DbaMgr2k によるリストア	138
4.5.4	データベースバックアップのチェック	142
4.6	MSDE/SQL Server Express - データベースの制限	143
4.6.1	Operations Manager での監視方法	143
4.6.2	問題の解決方法	144
4.7	ローカルからリモート SQL Server への ServerView データベースの移動	145
4.7.1	リモートサーバの要件	145
4.7.2	構成手順	146
4.8	負荷分散の変更	149
4.9	エラー診断	151
4.9.1	ログファイル	151
4.9.2	エラーイベントの重要な情報	153
4.9.3	ServerViewDB_log.LDF ファイルの肥大化	154
4.9.4	ServerView データベースのエクスポート	157
5	コマンドラインインターフェイス	159
5.1	コマンドラインによる Operations Manager のインストール	159
5.2	osql によるデータベース管理 (Windows)	162

6	富士通テクノロジー・ソリューションズ エンドユーザーソフトウェア使用許諾契約書	165
索引		173

1 まえがき

ServerView Suite にはサーバ管理ソフトウェアの **ServerView Operations Manager** (以下、**Operations Manager** と呼びます) があり、業界標準のサーバ類を集中管理することができます。

Operations Manager によって、監視対象のサーバに関するデータにインターネットやインターネットを経由してアクセスすることができ、標準的な Web ブラウザを搭載した PC から監視対象サーバのデータを見ることができます。

Operations Manager は、ハードディスク、換気ファン、電源や温度などのサーバの重要な機能を監視します。これらのパラメータの規定値を越えたりエラーが発生した場合は、必要に応じてメッセージを出力し、是正措置を行います。

大規模なネットワークのオペレータにとって、**Operations Manager** によるサーバ管理には以下のようない決定的な利点があります。

- 高信頼のサーバによる生産性の向上
- データプロセッシング設備の自動モニタリングによるコスト削減
- **Operations Manager** としての柔軟なシステムの拡張に対応
- シンプルなエラー解析によるダウンタイムの短縮
- エラー発生時の反応時間の短縮
- ネットワークコンポーネントやリソースの有効活用による総運用コスト（総所有コスト）の削減
- 分かりやすいデータ表示、高機能なユーザインターフェイス、支援的ヘルプシステム

ServerView のコンセプトにおいて重要な側面は、ハードウェア機能と Operations Manager との相互作用です。システムボードに組み込まれた予防保守機能 (PDA: Prefailure Detection and Analysis)、ASR&R (Automatic Server Reconfiguration and Restart) 機能、Operations Manager によって、個々のシステムコンポーネントの動作に関連するデータを交換できます。例えば、エラーが発生した場合は、障害のあるハードウェアモジュールを停止することでサーバは運用状態に戻ります。

サーバの監視において 2 つのパートから構成されています。"Operations Manager" は管理用サーバにインストールされ、もう一方の "ServerView エージェント" は Operations Manager と情報を交換する監視対象サーバ上で使用します。

この情報の交換には、マネージャ (管理用サーバ) とエージェントに共通の情報ベースが提供されている必要があります。この共通の情報ベースは "Management Information Base (MIB)" と呼ばれます。MIB は管理されるエレメントを抽象的なフォームで記述するデータモデルです。

ネットワーク内の各エージェントは MIB を提供し、ネットワーク内のエージェントが提供するすべての MIB 記述ファイルはこのマネージャシステム上で使用可能です。これにより、マネージャとエージェント間で交換される情報が正しく解釈されます。

ServerView は、ネットワークマネジメントプロトコルである SNMP (Simple Network Management Protocol) に基づいた異機種ネットワーク内で動作します。ServerView は、標準的なインターフェイスを採用しているため、簡単に他の管理システム (HP OpenView NNM や Microsoft SMS など) と接続することができます。さらに、ServerView によって、PRIMERGY を Tivoli TME10 のような全社的なネットワーク管理システムにシームレスに統合することができます。

1.1 対象者および目的

本マニュアルは、ハードウェアおよびソフトウェアについての基本的な知識をもつシステム管理者、ネットワーク管理者、およびサービス技術者を対象としています。本マニュアルは、OS ごとの Operations Manager の使用に関する要件や、ServerView Operations Manager、ServerView イベントマネージャ、および ServerView エージェントのインストールについて記載しています。

1.2 技術的要件

SuSE Linux は未サポートです。



技術的要件の最終段階での変更や修正は、ServerView Suite DVD 1 に収録されている **Readme** ファイルに記載されています。このファイルを参照するには、次の 2 つの方法があります。

- DVD 1 で、次のディレクトリに切り替えます。SVSSoftware - Software - ServerView - Windows - ServerView_S2
- DVD 1 を起動し、「Welcome」ダイアログで次の順に選択します。ServerView Software Products - Start; Info under ServerView - Operations Manager

1.2.1 管理コンソール

- http にアクセスできる標準的な PC/LAN
- Internet Explorer V7/V8 がインストールされている Microsoft Windows
- Mozilla Firefox 3.5/3.6 がインストールされている RedHat Linux
- Mozilla Firefox 3.5/3.6 がインストールされている SuSE Linux
- Java Runtime Environment V1.6.0_21

1.2.2 中央管理用サーバ (CMS)

ハードウェア (推奨値)

- PRIMERGY サーバ
- プロセッサのコア数 : 2 以上
- メモリ : 4GB 以上
- 空きディスク容量 : 100 GB 以上
- ディスプレイ : 1280x1024
- LAN : 100MBit-LAN

ソフトウェア

- Windows

- Microsoft Windows® Server™ 2003 の全エディション
- Microsoft Windows® Server™ 2003 R2 の全エディション
- Microsoft Windows® Server™ 2008 の全エディション
- Microsoft Windows® Server™ 2008 R2 の全エディション

- Linux

- Novell SLES 10 (未サポート)
- Novell SLES 11 (未サポート)
- Red Hat RHEL 5

アップデート DOS マネージャ

- Windows

- Windows 下でローカル：
ServerView パッケージに付属：
 - Windows 2003 の場合 : MSDE SP4
 - Windows 2008 の場合 : SQL 2005 Express SP3

その他のサポート対象：

- SQL Server 2000 Standard、Workgroup、Enterprise（それぞれSP4）
- SQL Server 2005 Standard、Workgroup、Enterprise
- SQL Server 2008 Standard、Workgroup、Enterprise
- Windows 下でリモート：
 - SQL Server 2005 Standard、Workgroup、Enterprise
 - SQL Server 2008 Standard、Workgroup、Enterprise
- Linux（ローカルとリモート）
 - PostgreSQL 8.4.3（ServerView パッケージに付属）

Java Runtime Environment

- JRE V1.6.0_18（ただし、最新版を使用することを推奨）

1.2.3 ServerView エージェント

以下に使用できるインストール済み ServerView エージェント

- Windows Server 2003
- Windows Server 2003 x64
- Windows Server 2008
- Windows Server 2008 x64
- Windows Server 2008 R2
- SuSE Linux SLES 10 および 11（未サポート）
- Red Hat Enterprise Linux 5
- V5.0 の Citrix XenServer
- V4 および V4.1 の VMware ESX Server



バージョン 4.0 の VMware ESXi Server を監視できます。詳細は、『VMware ESXi - Monitoring ESXi Systems with ServerView Suite』マニュアルを参照してください。

1.3 旧版からの変更点

本版のマニュアルは **ServerView Operations Manager V5.0 - installation under Windows** に適用されるもので、オンラインマニュアル『**ServerView Operations Manager V4.92 - Installation under Windows**』(2010年3月版)の更新版です。

このマニュアルでは、以下の変更と拡張について主に説明します。

- **Web サーバ Apache** および **IIS** は、このバージョンではサポートされません。使用される Web サーバは **JBoss** で、**Operations Manager** ソフトウェアをインストールすると、自動的にインストールされます。
- 既存の **Operations Manager V4.92** からのアップデートインストールがサポートされています。
- **Operations Manager** インストールウィザードが変更されました。
 - 以下のダイアログボックスは、なくなりました。
「既存の **ServerView** データ」
「Web サーバサービス」
「Web サーバパス」
「Web サーバのプロパティ」
 - 新規のダイアログボックスは以下のとおりです。
「JBoss サービス ログオン情報」
「ディレクトリ サーバの選択」
「ディレクトリサービス設定」
 - 「コンピュータの詳細」ダイアログボックスが展開され、「DNS サフィックス」エントリが表示されます。
 - 「SQL サーババックアップパス」ダイアログボックスで「参照」ボタンを使用して、バックアップファイルを作成するディレクトリを選択できます。
- データベースジョブ **JobServerViewCheckDBSize** および **JobServerViewDBMaintenance** (内部ジョブのみ) は、**ServerView** データベースの監視および管理の「セットアップ」を使用して取得できます。

1.4 ServerView Suite のマニュアル

ServerView Suite のマニュアルは、各サーバシステムに付属の ServerView Suite DVD 2 に収録されています。

マニュアルはインターネットからも無料でダウンロードできます。インターネットのオンラインドキュメントは、<http://manuals.ts.fujitsu.com> の「Industry standard servers」リンクをクリックすると入手できます。

1.5 本書の表記

本マニュアルでは次の表記が使用されます。

	注意	この記号は、人的傷害、データ消失、機材破損の危険性を示しています。
		この記号は、重要な情報やヒントを強調しています。
▶		この記号は、操作を続行するために行わなければならない手順を示しています。
斜体		コマンド、ファイル名、およびパス名は斜体で表記されています。
固定フォント		システム出力は、固定フォントで表記されています。
太字の固定フォント		キーボードから入力する必要のあるコマンドは、太字の固定フォントで表記されています。
<abc>		山カッコは実数値に置き換えられる変数を囲っています。
[Key symbols]		キーは、キーボード上の該当するキーを表しています。また大文字を入力する必要がある場合は、シフトキーも表示されています。 例：大文字 A の場合、 [SHIFT] - [A]
		2つのキーを同時に押す必要がある場合は、それぞれのキー記号の間にハイフンが表示されています。

表 1: 本書の表記

マニュアル内の本文や項を参照する場合は、章や項の見出しを参照先として示し、その章や項が始まるページを記載しています。

画面出力

画面出力は、使用するシステムによってある程度異なります。そのため、お使いのシステムで表示される出力は、本マニュアルの記載と若干異なる可能性があります。また、利用できるメニュー項目もシステムによって異なる場合があります。

2 サーバ管理

2.1 アーキテクチャ

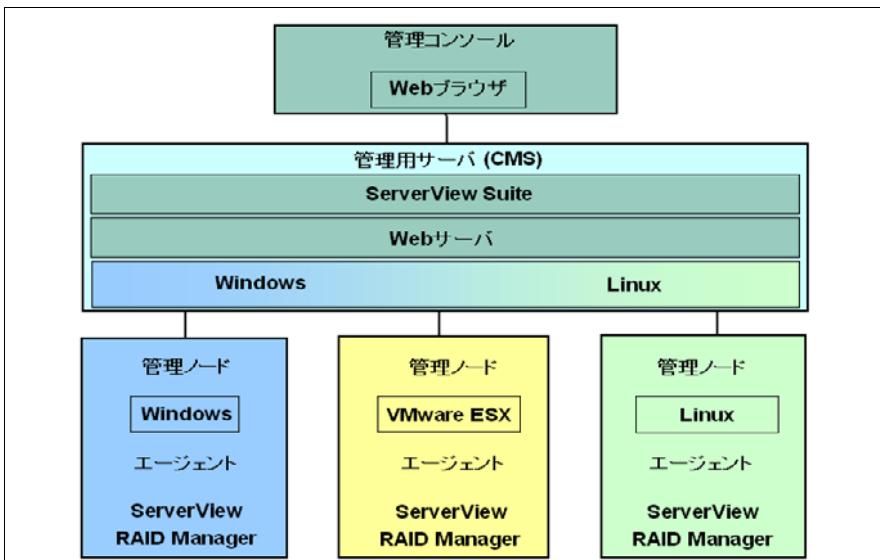


図 1: アーキテクチャの概要

管理コンソール

監視対象サーバの全データは、標準的な PC からインターネットまたはインターネットアクセスおよび Web ブラウザ (Web ベースのコンソール) を使用して見ることができます。

管理用サーバ (CMS)

ServerView Operations Manager は管理用サーバにインストールされています。

管理ノード

監視対象サーバに ServerView エージェントはインストールされており、その情報は管理用サーバに提供されます。ServerView RAID Manager は監視対象サーバにオプションでインストールすることができます。

2.2 管理用サーバでのインストール

Operations Manager (ServerView アップデートマネージャなど) を管理用サーバにインストールできます。これにより、PC またはノート型パソコンで標準的な Web ブラウザを使用してサーバを監視できます。さらに、管理用サーバや別のサーバに、ServerView イベントマネージャ (イベント管理) をインストールすることもできます。

Operations Manager は、Windows、SuSE Linux (未サポート)、および Red Hat Linux の各 OS にインストールすることができます。

Operations Manager は ServerView Suite DVD 1 に格納されています。

- インストールウィザードは Windows 用のインストーラーです。

Operations Manager、アップデートマネージャ、および ServerView イベントマネージャ のインストールも行えます。また、このウィザードを使用すると、別のサーバに Operations Manager をインストールすることができます。

インストールは Windows コマンドラインモードで実行することもできます。

管理用サーバでのインストールに関する説明は、「[3 管理端末へのインストール](#)」の章 (21 ページ) および [159 ページの「コマンドラインによる Operations Manager のインストール」](#) の項に記載されています。

- Linux へのインストールは、スクリプトベースまたは YaST/YUM によるもので、Operations Manager および ServerView イベントマネージャ のインストールを含みます。

インストールに関する説明については、Linux 用の [ServerView Operations Manager インストールガイド](#) を参照してください。

2.3 監視対象サーバへのインストール

監視対象サーバには、ServerView エージェントをインストールする必要があります。これらは OS ごとに異なるプログラムで、管理用サーバに情報を提供します。

各 OS 用のエージェントについては、ServerView Agent Installation Guides for Windows または ServerView Agent Installation Guides for Linux をご覧ください。

追加インストール

- ServerView Online Diagnostics

Windows 用の ServerView エージェントインストール時に、Online Diagnostics もインストールされます。Online Diagnostics を使用して、管理されているサーバに対して離れたワークステーションから一連のハードウェアテストを実行することができます (ServerView エージェントの版数によります)。

- ServerView RAID Manager

ServerView RAID Manager を使用すると、PRIMERGY のハードディスクを管理できます。

ServerView RAID Manager がインストールされていない場合、RAID ドライブおよびそれらのステータスに関する情報は使用できません。

インストールについては、ServerView RAID Manager のマニュアルを参照してください。

- ServerView エージェント (Windows 用) を Expert モードでインストールしている場合は、Asset CLI、Configuration Tools、Prime Collect、ServerView System Monitor などの追加コンポーネントをインストールするかどうかを選択できます。

2.4 Operations Manager の統合オプション

標準化プロトコルおよびインターフェースを使用すると、Operations Manager を他の管理システムと容易に統合できます。Operations Manager 統合モジュールにより、接続された管理システムのコンソールにおける サーバのステータスに関する詳細情報の出力を確認します。このように、センターエンタープライズ管理コンソール（単一管理ポイント）でサーバを管理できます。ネットワーク管理、アプリケーション管理、ソフトウェア分配などの追加の管理機能も、サーバにおいて問題なく使用できます。

統合モジュールは以下のシステムで使用できます。

- IBM Tivoli TME 10™ Framework TE/C
- IBM Tivoli NetView
- HP OpenView Network Node Manager
- HP Operations Manager
- Microsoft MOM および SCOM 2007
- Microsoft SMS および SCCM 2007
- Nagios および BMC Patrol (未サポート)
- PRIMEPOWER ServerView Suite (未サポート)

一部の統合モジュール（Microsoft SMS、MOM）は、ServerView Suite DVD 1 に収録されており、Operations Manager のインストール時に管理用サーバに自動的にインストールされます。これは、関連する管理ソフトウェアがすでにシステムにインストールされている場合のみ有効です。詳細は [91 ページの「Operations Manager ソフトウェアの GUI ダイアログ形式インストール」](#) の項を参照してください。

他の統合モジュール（HP Operations Manager、IBM Tivoli TME NetView など）は、ServerView Integration CD に収録されています。

統合モジュールの詳細情報は、対応する統合マニュアルおよび [ServerView Integration](#) のデータシートを参照してください。

3 管理端末へのインストール

本章では **Operations Manager** (ServerView アップデートマネージャを含む) と **ServerView イベントマネージャ**を管理用サーバにインストールする方法を記載します。

i アップデートマネージャ (バージョン 4.71 以前) がすでに管理用サーバにインストールされている場合、インストール済みのアップデートマネージャをアンインストールしてから **Operations Manager** をインストールしてください。アンインストールしていない場合、インストールが異常終了します。

ServerView エージェントを管理用サーバにインストールする場合、現在の **ServerView エージェント** (V5.00) をインストールしてから **Operations Manager** をインストールする必要があります。

必要なソフトウェアは、**ServerView Suite DVD 1**に格納されています。

ソフトウェア製品は集中管理用サーバにまとめてインストールすることも、別々のコンピュータにそれぞれインストールすることもできます。

i 既存の **Operations Manager** バージョン 4.92.14 からのアップグレードインストールが可能です。

Windows (Windows Server 2003 または Windows Server 2008) へのインストールはメニューから選択する方式になっており、**Microsoft Windows Installer Technology**に基づいています (91 ページの「**Operations Manager** ソフトウェアの GUI ダイアログ形式インストール」の項を参照してください)。

インストールは **Windows** のコマンドラインからもでき、編集可能なインストール用スクリプト (サイレントインストール) が用意されています (159 ページの「コマンドラインによる **Operations Manager** のインストール」の項を参照してください)。

3.1 ServerView Operations Manager のコンポーネント

ServerView Operations Manager

ServerView Operations Manager をインストールすると以下の ServerView コンポーネントも同時にインストールされます。

ServerView Configuration Manager

ServerView Configuration Manager は、システムに応じた環境ファイルを監視対象サーバに作成できます（ServerView エージェントがインストールされているサーバに対してのみサポートしています）。

ServerView アーカイブマネージャ

アーカイブマネージャは、サーバのシステムおよび運用データを記録し、管理コンソールに保管することができます。その後データを確認したり評価することができます。

ServerView インベントリマネージャ

インベントリマネージャは、1つまたは複数の監視対象サーバのデータを取得して画面に表示します。Operations Manager からデータをエクスポートし、様々なフォーマット（CSV、ODBC など）で保存することができます。

ServerView パフォーマンスマネージャ

パフォーマンスマネージャは、特定のサーバのコンポーネントのパフォーマンスを監視することができます。パフォーマンスマネージャはルールに従って実施されます。管理コンソールで作られたルールはどのサーバに対しても実行することができます。

ServerView スレッシュホールド

スレッシュホールドマネージャは、1つ以上の監視対象サーバとそのサーバ上で稼動するあらゆる仮想マシンを、しきい値に基づいて管理コンソールで監視することができます。

ServerView Remote Management Frontend

ServerView Remote Management Frontend は、Web ベースのワーク環境を提供してサーバのリモート管理ができます。

ServerView アップデート マネージャ (オプション)

個別に **ServerView アップデート マネージャ** をインストールすることもできます。このインストールにより以下のコンポーネントが提供されます。

アップデート マネージャ

アップデート マネージャは、管理コンソールを介して、すべてのドメインに対してソフトウェアのインストールおよびアップデートを行うことができます。

レポジトリマネージャ

レポジトリマネージャは、アップデートレポジトリを管理することができます。

設定

設定は、アップデート マネージャのためのグローバルパラメータを設定することができます。

ServerView ダウンロードマネージャ

ダウンロードマネージャは、ご使用のサーバ用のファームウェア、BIOS、ドライバ、および ServerView エージェントの最新のものを適宜入手することができます。

ServerView イベントマネージャ

ServerView イベントマネージャをインストールすると、以下の **ServerView Operations Manager** コンポーネントもインストールされます。

アラームモニタ

アラームモニタは、選択されたサーバおよびサーバグループへの受信アラームをすべて Operations Manager のメインウィンドウに表示します。

アラーム設定

アラーム設定コンポーネントは、アラームの取り扱いを設定できます。アラームのルール、フィルタのルール、一般的なルールを設定できます。

3.2 JBoss Web サーバ

 ServerView Operations Manager V5.0 では、Microsoft Web サーバ (MS Internet Information Server) と ServerView Web サーバ (Apache for Windows ベース) はサポートされません。

ServerView Operations Manager バージョン 5.0 で使用される Web サーバは JBoss です。

JBoss に必要なファイルは、ServerView Operations Manager のインストール時に自動的にインストールされます。JBoss は、スタンダードアロンサービス *ServerView JBoss Application Server 5.1* として設定されます。これは、Windows の「スタート」メニューを使用して開始および停止できます。

– Windows Server 2003 の場合

「スタート」→「コントロールパネル」→「管理ツール」→「サービス」の順に選択します。

– Windows Server 2008 の場合

「スタート」→「管理ツール」→「サービス」の順に選択します。

以下のコマンドを使用して、サービスを開始 / 停止することもできます。

```
%WINDIR%\system32\cmd.exe start "ServerView JBoss Application Server 5.1"
```

```
%WINDIR%\system32\cmd.exe stop "ServerView JBoss Application Server 5.1"
```

3.2.1 起動および使用ポート

Operations Manager の起動アドレスは **https** で始まります。

ポート番号	使用対象
3170	https (ファイアウォールのポートのロックを解除する必要があります)
3172	Remote Connector Service (Server Configuration Manager、パワーモニタなど)
3173	ServerView RAID Manager
1072, 1111, 1149, 1287, 1301, 1302, 1325, 1336, 1338, 1374, 1380, 1383, 1385, 1399, 1400, 1401, 1404, 1441, 1442, 1443, 1445, 1446, 1447	JBoss (内部ソケット接続にのみ使用)
444	OpenDS コントロールポート
1474	OpenDS がディレクトリサービスとして設定されている場合は LDAPS (ファイアウォールのポートのロックを解除する必要があります)

セキュリティについての詳細は、ホワイトペーパー『Secure PRIMERGY Server Management』に記載されています。

3.2.2 ロールベースのユーザ管理

JBoss では、ロールベースのユーザ管理も可能です。デフォルトでは、3 つのユーザロール : *administrator*、*operator*、*monitor* を使用できます。

詳細は、『User management in ServerView - Centralized authentication and role-based authorization』マニュアルを参照してください。

3.2.3 認証の管理

Web ブラウザは、JBoss Web サーバとの通信に常に HTTPS 接続（つまり、セキュア SSL 接続）を使用します。そのため、JBoss Web サーバは、Web ブラウザで自身を認証するための証明書（X.509 証明書）を必要とします。X.509 証明書には、JBoss Web サーバ自体と、JBoss Web サーバの公開鍵の識別に必要な情報がすべて含まれています。

証明書の管理についての詳細は、『User management in ServerView』マニュアルを参照してください。

3.3 Web ブラウザ

データを表示するには Web ブラウザが必要です。そのため、Web ブラウザを持つ他のコンピュータに LAN 経由でデータを送信し、コンピュータで表示させることができます。HTML V3.2 と Javascript V1.1 以上がインストールされているものは、どのブラウザも使用可能です。

Web サーバへのアクセスに問題がある場合は、ブラウザで以下のいずれかの設定を行ってください。

- ブラウザにおけるプロキシを完全に無効にする。
- この Web サーバが稼動するホストに対してプロキシが使用されないように、IP アドレスの除外設定を行う。

3.4 準備

以下の手順が完了していることを確認してから Operations Manager ソフトウェアをインストールしてください。

- ▶ Windows OS (Windows Server 2003 または Windows Server 2008) を管理端末にインストールします。
- ▶ Service Pack を適用します。必要に応じて ServerView の各コンポーネントをインストールするすべてのサーバおよびコンピュータに、Service Pack を適用してください。Windows Server 2008 には Service Pack 1 を、Windows Server 2003 には Service Pack 2 以降を適用することを推奨します。



Service Pack は必ず適用してください。Service Pack が適用されていない場合は、動作の保証はいたしかねます。Service Pack がすでに適用されている場合は、再度適用する必要はありません。SNMP サービスがインストールされていることを必ず確認してから、Service Pack を適用してください。

- ▶ 管理用サーバに SNMP サービスをセットアップします。それに伴い、どのコミュニティおよびサーバ (IP アドレス) から管理用サーバがトラップを受信するかを指定する必要があります。[28 ページの「SNMP サービスのインストール」の項](#) の項を参照してください。
- ▶ 管理用サーバに Sun Java Runtime Environment をインストールします。[30 ページの「Sun Java Runtime Environment \(JRE\) のインストール」](#) の項の項を参照してください。

3.4.1 SNMP サービスのインストール

Windows Server 2003

1. 次の順に選択し、SNMP サービスをサーバにインストールします。
 - ▶ 「スタート」→「設定」→「コントロール パネル」→「プログラムの追加と削除」→「Windows コンポーネントの追加と削除」。
 - ▶ 「管理ツールおよび監視ツール」を有効化します。「詳細」をクリックします。「簡易ネットワーク管理プロトコル (SNMP)」にチェックを入れ、「OK」をクリックして設定を確定します。
 - ▶ 「次へ」をクリックして、インストールを開始します。
2. 次のように、サーバで SNMP サービスの設定を行ないます。



デフォルトのコミュニティ名は「public」です。ほとんどの SNMP サービスで、このデフォルトのエントリが使用されます。セキュリティ上の理由から、このエントリを変更することをお勧めします。

基本的には、サーバまたはサーバグループごとに別々のコミュニティを定義できます。該当の変更をマネージャに対して忘れずに行ってください。

ServerView の全機能を使用したい場合は、読み書き権限をコミュニティに割り当てる必要があります。（読み取り専用）アクセス権を割り当てる、特定の機能へのアクセスを制限できます。

- ▶ 「スタート」→「設定」→「コントロールパネル」→「管理ツール」→「コンポーネントサービス」→「SNMP サービス」の順に選択します。
- ▶ 「トラップ」をクリックします。
 - ▶ 「コミュニティ名」にコミュニティ名（public など）を入力します。
 - ▶ 「一覧に追加」をクリックします。
 - ▶ 「追加」をクリックします。
 - ▶ 選択したコミュニティの管理用サーバの IP アドレスを入力し、「追加」ボタンをクリックします。ここで入力した管理用サーバにのみ、トラップが送信されます。

- ▶ 「セキュリティ」をクリックして、指定したコミュニティの権限を **READ WRITE** などに設定します。「OK」をクリックして、今行った設定を確定します。
- ▶ 該当のオプションを選択して、どのコンピュータから SNMP パケットを受け付けるかを指定します。
- ▶ 「OK」をクリックして設定を終了します。

3. OS をリブートします。

Windows Server 2008

- ▶ 「スタート」→「サーバマネージャ」の順に選択します。
- ▶ 左側のウィンドウで、「機能」をクリックします。
- ▶ 「機能の追加」を選択します。
- ▶ 「SNMP サービス」オプションを選択します。
- ▶ 「次へ (N) >」をクリックしてから、「インストール (I)」をクリックします。

3.4.2 Sun Java Runtime Environment (JRE) のインストール

ServerView Suite DVD 1 を使用して JRE をインストールできます。以下の手順に従います。

- ▶ ServerView Suite DVD 1 を DVD-ROM ドライブに挿入します。DVD が自動的に起動しない場合は、DVD のルートディレクトリにある「start.html」ファイルをクリックします。
- ▶ 「ServerView Software Products」オプションにチェックを入れます。
- ▶ 「実行」をクリックします。
- ▶ 表示されるウィンドウで、目的の言語を選択します。
- ▶ 「Java」を選択します。
- ▶ 適切な *.exe をクリックしてインストールします。

また、Sun Microsystems の Web サイトから最新バージョンの JRE をダウンロードすることもできます。

Operations Manager のコンポーネントの起動後に、「Java が、セキュリティ問題の発生が考えられるアプリケーションコンポーネントを発見しました。」というメッセージが表示されたら、「いいえ」をクリックします。このメッセージが表示されないようにするには、Java のコントロールパネルで以下を設定します。

1. 「スタート」→「設定」→「コントロールパネル」→「Java」の順に選択します。
2. 「Java コントロールパネル」ダイアログボックスで、「詳細」タブに切り替えます。
3. 「セキュリティ」→「混合コード(サンドボックス内実行 vs. 信頼済み)セキュリティ検証」は、「有効 - 警告を表示せずに、保護をかけて実行する」オプションにチェックを入れます。

3.5 SQL Server のインストール

Operations Manager には、SQL データベースの *ServerViewDB* をインストールする SQL Server が必要です。

Operations Manager のインストール中に、ある条件下では SQL Server を自動的にインストールします。しかし、事前に SQL Server をインストールしてから Operations Manager をインストールしなければならない場合もあります。

システムに既存する SQL Server が Operations Manager に適応する場合は、その SQL Server を使用することができます。

インストールに関する要件や制約に従う必要があります。

 Microsoft SQL Server 2008/2005 Express および MSDE 2000 SP4 は、500 台未満のサーバを監視するのに適しています。

500 台以上のサーバを監視するには、Microsoft SQL Server 2008/2005 または Microsoft SQL Server 2000 のインストールをお勧めします。

SQL Server のパラレル (side-by-side) インストール

SQL Server は、それぞれ異なるインスタンス名で同一システムのどのエディションにもパラレルに 16 個までインストールできます。

SQL Server 2008 のインスタンスは SQL Server 2000、SQL Server 2005 と side-by-side にインストールできます。

SQL Server 2005、SQL Server 2000、MSDE 2000、SQL Server 6.5、SQL Server 7.0、および MSDE 1.0 のインスタンスは、side-by-side にインストールできます。

 SQL Server インスタンスの異なる言語版の同一システムへのインストールはサポートしていません。

例

同一システムへの SQL Server 2005 (英語) と SQL Server 2005 (日本語) の同一システムへの side-by-side インストールはサポートしていません。

日本語版以外の SQL Server インスタンスがシステムにインストール済みの場合、Operations Manager は日本語版 SQL Server を並列的に自動でインストールすることはできません。この場合、ダイアログボックスが開き、適切な言語版の SQL Server を手動でインストールするように促します。

既存のインスタンスの表示

以下の手順で **SQL Server** の既存のインスタンスを表示できます。

- ▶ コマンドプロンプトを開きます。
- ▶ 以下のコマンドを入力します。

SQL Server 2008/2005 には `sqlcmd -L | findstr <computer_name>`

SQL Server 2000 には `sosql -L | findstr <computer_name>`

システム上のすべてのインストール済み **SQL Server** インスタンス `<computer_name>` が表示されます。なお、このコマンドの実行には数分かかる場合があります。

システム上にインスタンスが 16 個未満の場合、**Operations Manager** をインストールできます。

SQL Server インスタンス名に関する一般的な事項

インスタンスが 1 個の場合はインスタンス名は必要なく、規定のインスタンスとみなされます。規定のインスタンスは、名前 (*local*) の下、またはリモートサーバの場合はサーバのコンピュータ名の下の選択リストに表示されます。他の 15 個のインスタンスには個別のインスタンス名が必要です。これらのインスタンスは名前付きインスタンスと呼ばれます。**MSDE** や **SQL Server 2005 Express** の場合、`<server_name>\<instance_name>` という名前の下の選択リストに表示されるインスタンス名でインストールされます。

SQL Server の各種言語版と OS の言語

SQL Server には様々な言語版があります。OS の言語と互換性のある言語版の **SQL Server** をインストールする必要があります。

- 英語版の **SQL Server** はサポートするすべての OS にインストールすることができます。英語版の **SQL Server** は欧米の Windows OS にインストールすることをお勧めします。
- OS と同じ言語の **SQL Server** をインストールすることができます。

SQL Server がインストールされるディスクが圧縮されていないことを確認してください。

3.5.1 管理端末のローカルへのインストール

SQL Server は、管理用端末のローカルにインストールするか、Operations Manager によって自動的にインストールすることができます。

Windows Server 2008 上の Operations Manager での SQL Server インスタンス名は、以下のとおりです。

- インスタンス名が「SQLSERVERVIEW」の SQL Server 2008 Express
- インスタンス名が「SQLSERVERVIEW」の SQL Server 2005 Express
(これは ServerView Operations Manager のインストール時に同時にインストールした場合のインスタンス名でもあります)
- 任意のインスタンス名の SQL Server 2008/2005 Enterprise/Standard/Workgroup Edition



Microsoft は Windows Server 2008 上の MSDE 2000 や SQL Server 2000 のサポートを終了しています。

Windows Server 2003 上の Operations Manager での SQL Server インスタンス名は、以下のとおりです。

- インスタンス名が「SQLSERVERVIEW」の SQL Server 2008/2005 Express
- 任意のインスタンス名の SQL Server 2008/2005 Enterprise/Standard/Workgroup Edition
- インスタンス名が「SQLSERVERVIEW」の MSDE 2000 Service Pack 4
(これは ServerView Operations Manager のインストール時に同時にインストールした場合のインスタンス名でもあります)
- 任意のインスタンス名の SQL Server 2000 Service Pack 4 Enterprise/Standard/Workgroup Edition

Operations Manager インストール中の SQL Server インスタンスの認識

データベースサーバは ServerView Suite DVD 1 にあります。SQL Server インスタンスがシステム上にインストールされてないか、またはインストールされていてもインスタンス名が「SQLSERVERVIEW」以外の場合は、Operations Manager のインストール中に SQL Server インスタンスも自動的にインストールすることができます。

自動的にインストールされた SQL Server には「SQLSERVERVIEW」というインスタンス名が付けられます。

Operations Manager に適する SQL Server インスタンスがすでに使用可能な場合は、SQL Server の自動インストールは提供されません。既に SQL Server のインスタンス名が、「SQLSERVERVIEW」として使用されている場合、SQL Server の自動インストールは行われません。

SQL Server 2008、SQL Server 2008 Express のインストールについての詳細は [38 ページの「SQL Server 2008」](#) の項を参照してください。

SQL Server 2005、SQL Server 2005 Express のインストールについての詳細は [47 ページの「SQL Server 2005」](#) の項を参照してください。

MSDE 2000 のインストールについての詳細は [55 ページの「MSDE 2000」](#) の項を参照してください。

SQL Server 2000 のインストールについての詳細は [57 ページの「SQL Server 2000」](#) の項を参照してください。

3.5.2 別のシステムへのリモートのインストール

Operations Manager バージョン 4.7 では、リモートにインストールされた SQL Server インスタンスを使用して ServerView データベースをインストールすることもできます。

-  - このオプションが使用できるのは Operations Manager の新規のインストール時と ServerView バージョン 4.20 以前のアップグレードインストール時です。
- Operations Manager はリモートのサーバ上にローカルから同時にインストールしないでください。
- Operations Manager を複数のローカルの管理端末にインストールしたり、リモートにインストールされた同一の SQL Server インスタンスを各管理端末に使用することはできません。

要件

ローカルの管理端末とリモートのシステムは同じドメインに属している必要があります。Domain Users グループ内では少なくとも 1 つのドメインユーザアカウントが必要です。

適する SQL Server インスタンスは、Standard、Workgroup、Enterprise Edition の SQL Server 2008/2005/2000 です。SQL Server インスタンスは、Operations Manager がインストールされる前にリモートのサーバにインストールし、設定する必要があります。

SQL Server をリモートの SQL Server として使用するための設定についての詳細は、[59 ページの「リモートの SQL Server の設定」](#)の項を参照してください。

-  SQL Server 2008/2005 Express、MSDE 2000 はサポートしていません。

SQL Server 2008、SQL Server 2005 は Windows Server 2008 で使用してください。

3.5.3 SQL Server のドメインコントローラへのインストール

セキュリティ確保のため、SQL Server をドメインコントローラにはインストールしないことを推奨します。

 Windows Server 2008 Read Only Domain Controller (RODC) へのインストールはサポートしていません。

インストールの順序に注意してください。

1. サーバをドメインコントローラに設定します。
2. SQL Server と ServerView Operations Manager をインストールします。

手順は以下のとおりです。

- ▶ 静的 IP アドレスをコンピュータに割り当てます。
- ▶ ローカルの管理者としてログオンします。
- ▶ 「スタート」→「プログラム名を指定して実行」の順に選択します。
- ▶ 「名前」に「dcpromo」と入力し、「OK」をクリックします。Active Directory Installation Wizard を実行します。
- ▶ ドメインの管理者としてサーバにログオンします。
- ▶ Workgroup/Standard/Enterprise Edition などの SQL Server をインストールします。

SQL Server のサービスアカウントは Windows のドメインユーザアカウントとして実行しなければなりません。各 SQL Server サービスは別々の Windows アカウントで実行してください。ドメインコントローラでは SQL Server サービスはローカルサービス やネットワークサービスとして実行することはできません。SQL Server のサービスアカウントをインストールしてローカルシステムとして実行することもできます。このオプションは推奨しません。

- ▶ ServerView Operations Manager をインストールします。

SQL Server Configuration Manager によるインストール後も、サービスアカウントの割り当てを、変更することができます（例えば Express Edition 用など）。



SQL Server のインストール後にそのサーバの役割を変更しないでください。

例えば、SQL Server をメンバーサーバにインストールした場合、**Active Directory Installation Wizard** (*dcpromo.exe*) ツールを使用してそのサーバをドメインコントローラに変更しないでください。

また、SQL Server をドメインコントローラにインストールした場合、**Active Directory Installation Wizard** を使用してそのサーバをメンバーサーバに変更しないでください。

SQL Server のインストール後にサーバの役割を変更すると機能性が損なわれるほか、サポートもされません。

3.6 SQL Server 2008

Operations Manager バージョン 5.00 では、Windows Server 2008 または Windows Server 2003 上の SQL Server 2008 インスタンスに ServerView データベースをインストールすることができます。SQL Server 2008 は Operations Manager をインストールする前にインストールしてください。

3.6.1 ソフトウェア要件

- OS:
 - Windows Server 2008 SP1 以上
 - Windows Server 2003 SP2 以上
- Internet Explorer 6 SP1 以上
- Microsoft .NET Framework 3.5 SP 1 以上
- Windows Installer 4.5 以上
- Windows PowerShell 1.0 以上

3.6.2 SQLServer のエディション

以下のエディションを使用できます。

- Express Edition
 - SQL Server 2005 Express と MSDE 2000 の後継である SQL Server 2008 Express 無償エディションであり、Microsoft ダウンロードセンターから入手できます。
- Workgroup Edition
- Standard Edition
- Enterprise Edition

3.6.3 サービスアカウントのセットアップ

SQL Server 2008 をインストールする場合、「サーバ設定」画面でサービスアカウントを指定する必要があります。インストールの前に 1 つ以上のサービスアカウントをセットアップすることをお勧めします。

サービスアカウントは以下のサービスに必要です。

- SQL Server データベースサービス
- SQL Server エージェント (SQL Server Express ではない)
- SQL Server ブラウザ

SQL Server と Operations Manager を同一のシステムにインストールする場合は以下の点にご注意ください。

- 「Network Service アカウント」を使用しないでください。
「Network Service アカウント」で SQL Server を実行すると Operations Manager のインストールがキャンセルされます。
- SQL Server のインストールのセキュリティを確保するため、ローカルの Windows のユーザアカウントで各サービスを実行する必要があります。
ローカルの Windows のユーザアカウントを管理者のグループに割り当てないでください。

ただし、ローカルの Windows のユーザアカウントの使用に関しては例外があります。

- リモートのプロシージャのコール、レプリケーション、ネットワーク ドライブへのバックアップ、リモートのデータソースを異なる SQL サーバ上で使用する場合、ローカルの Windows のアカウントでは不十分です。
- 以前のバージョンの SQL Server との side-by-side 構成で SQL Server 2008 をインストールする場合、グローバルのドメイングループからのアカウントだけが使用できます。
- フェイルクラスタのインストールにはローカルのシステムやローカルのサービスアカウントは使用できません。

- ローカルのサービスアカウントをセットアップしたくない場合は、システムアカウントを使用することができます。手順は以下のとおりです。
 - 「SQL Server」と「SQL Server Agent」サービスには「Local System」を選択します。
 - 「SQL Server Browser」サービスには「Local Service」を選択します。



ローカルのシステムアカウント（「Local System」）は非常に高い権限を持つ統合アカウントです。システムアカウントを使用する場合は注意が必要です。

SQL Server と Operations Manager を別々のシステムにインストールする場合は、SQL Server サービスは管理者権限を持たないドメインユーザアカウントで実行してください。

SQL Server 2008 のインストール後も、SQL Server 構成マネージャーによりサービスアカウントを割り当てることができます。

サービスアカウントについての詳細は「SQL Server 2008 Books Online」を参照してください。

3.6.4 SQL Server 2008 Express Edition のインストール

SQL Server 2008 Express は SQL Server の無償バージョンです。このエディションは Microsoft ダウンロードセンターからダウンロードできます。SQL Server 2008 Express のインストールについての詳細は、Microsoft ダウンロードセンターを参照してください。

Microsoft ダウンロードセンターでのファイルのダウンロード

- ▶ Microsoft ダウンロードセンター
<http://www.microsoft.com/Japan/download.htm> にアクセスします。
- ▶ 「製品グループ」で「Servers」を選択します。
- ▶ 「次の製品のダウンロードを表示」で「SQL Server」を入力し、「検索」をクリックします。
- ▶ 「次の製品のダウンロードを表示」で「Microsoft SQL Server 2008」を入力し、「検索」をクリックします。
- ▶ 表示されたリストから、リンクの「Microsoft SQL Server 2008 Express with Tools」をクリックします。「公開日」欄をクリックするとリリース日付順にダウンロードをソートすることができます。
- ▶ 「言語の変更」で、該当する言語版を選択します。
- ▶ 「変更」をクリックします。
- ▶ 32 ビットシステムには x86 パッケージをダウンロードし、64 ビットシステムには x64 パッケージをダウンロードします。
- ▶ 「注意事項」の下に、以下のパッケージが表示されます。
Microsoft .NET Framework, Windows Installer and Windows PowerShell

パッケージをダウンロードし、インストールします。Windows PowerShell 1.0 の Windows Server 2008 へのインストール手順は以下のとおりです。

- ▶ 「スタート」→「サーバーマネージャー」の順に選択します。
- ▶ 左側のウィンドウペインで「機能の概要」を選択します。
- ▶ 「機能の追加」を選択します。
- ▶ オプションの「Windows PowerShell」を選択します。
- ▶ 「次へ」、「インストール」の順にクリックします。

インストール

- ▶ 管理者としてシステムにログオンします。
- ▶ 該当する以下の *.exe ファイルを実行します。

SQLEXPRWT_x64_JPN.exe または *SQLEXPRWT_x64_ENU.exe*
SQLEXPRWT_x86_JPN.exe または *SQLEXPRWT_x86_ENU.exe*

インストールは対話式です。Operations Manager に必要な入力項目は以下の通りです。Operations Manager はインスタンス名が「SQLSERVIEW」の SQL Server 2008 Express だけを認識します。

- ▶ 64 ビットの OS をご使用の場合、左側のウィンドウペインで、プロセッサタイプ「x64」が後に続く「オプション」を選択します。
- ▶ 「インストール」を選択します。
- ▶ ウィザードを起動して、「非クラスタ環境に SQL Server 2008 をインストールするか、既存の SQL Server 2008 インスタンスに機能を追加します。」を選択します。
- ▶ 「機能の選択」画面で、オプションの「データベースエンジンサービスと」「管理ツール」→「基本」を選択します。
- ▶ 「インスタンスの構成」画面で、「名前付きインスタンス」を選択し、インスタンス名の「SQLSERVIEW」を入力します。
- ▶ 「サーバの構成」画面で、「すべての SQL Server サービスで同じアカウントを使用する」をクリックします。
- ▶ SQL Server を実行したい Windows ユーザアカウントを指定します。[39](#) ページの「サービスアカウントのセットアップ」の項に記載されている適切なアカウントを選択します。
- ▶ また、「SQL Server Browser service」の「スタートアップの種類」は、「自動」を選択します。
- ▶ 「データベースエンジンの構成画面」画面で、「現在のユーザの追加」をクリックします。



SQL Server 2008 をインストールすると、デフォルトではローカルの管理者グループが自動的に SQL Server へはアクセスできないようになっています。したがって、ここで追加するユーザーアカウントを後で行う **Operations Manager** のインストールに使用する必要があります。さらに、**Operations Manager** のインストールダイアログに入力されるユーザーアカウントはすべて認証済み SQL Server 管理者である必要があります。これは「Download Manager ログイン情報」画面などに適用されます。後で現在のユーザとして他のユーザーアカウントを使用したい場合は、ここで認証済み SQL Server 管理者を他のユーザーアカウントとして追加することができます。

ユーザーアカウントは後で SQL Server Management Studio でも確認および追加することができます。SQL Server Management Studio では、認証済み SQL Server 管理者は「セキュリティ」→「サーバーロール」→「sysadmin」にあります。

デフォルトでは、TCP/IP ネットワークプロトコルは SQL Server Express Edition ではアクティブではありません。しかし TCP/IP ネットワークプロトコルは **Operations Manager** データベースアクセスに必要です。したがって、SQL Server Express をインストールした場合は、TCP/IP ネットワークプロトコルをアクティブにしてから **Operations Manager** のインストールを開始する必要があります。手順は以下のとおりです。

- ▶ SQL Server 構成マネージャを起動します。
- ▶ 「SQL Server ネットワーク構成」で、インストール済みの SQL Server インスタンスの SQL Server インスタンス名を選択します。
- ▶ TCP/IP プロトコルを「有効」に設定します。

この変更を有効にするためには SQL Server サービスを再起動する必要があります。

3.6.5 SQL Server 2008 Enterprise/Standard/Workgroup Edition のインストール

Microsoft .NET Framework、Windows Installer、Windows PowerShell の各パッケージは、SQL Server 2008 Enterprise/Standard/Workgroup Edition のインストール時に自動的にインストールされます。

Windows PowerShell 1.0 の Windows Server 2008 へのインストール手順は以下のとおりです。

- ▶ 「スタート」→「サーバーマネージャー」の順に選択します。
- ▶ 左側のウィンドウペインで「機能の概要」を選択します。
- ▶ 「機能の追加」を選択します。
- ▶ 「Windows PowerShell」を選択します。
- ▶ 「次へ」、「インストール」の順にクリックします。

インストール

- ▶ 管理者としてシステムにログオンします。
- ▶ インストールメディアをセットします。
- ▶ ルートディレクトリの *setup.exe* ファイルを実行します。

インストールは対話式です。Operations Manager に必要な入力項目は以下のとおりです。インスタンス名には、規定のインスタンス名や他のインスタンス名も使用できます。

Microsoft .NET Framework がインストールされていない場合

- ▶ 「ライセンス条項」画面で使用許諾に同意します。
- ▶ 「セットアップ完了」画面で「Exit」をクリックし、アップデートを開始します。

必要なパッケージの自動インストール後、「SQL Server インストールセンター」が起動します。

- ▶ 64 ビットの OS をご使用の場合、左側のウィンドウペインで、プロセッサタイプ「x64」が後に続く「オプション」を選択します。
- ▶ 「インストール」を選択します。

- ▶ ウィザードを起動して、「非クラスタ環境に SQL Server 2008 をインストールするか、既存の SQL Server 2008 インスタンスに機能を追加します。」を選択します。
- ▶ 「機能の選択」画面で、オプションの「データベースエンジンサービス」と「管理ツール」→「基本」、または「管理ツール」→「完全」を選択します。
- ▶ 「インスタンスの構成」画面で、「名前付きインスタンス」を選択し、インスタンス名の **SQLSERVERVIEW** を入力します。
- ▶ 「サーバの構成」画面で、「すべての SQL Server サービスで同じアカウントを使用する」をクリックします。
- ▶ SQL Server 2008 Edition を Operations Manager と同じシステムにインストールしようとしている場合は、管理者権限のないローカルの Windows ユーザアカウントとパスワードを入力します。リモートのデータベースの場合は、管理者権限のないドメインユーザアカウントとパスワードを入力します。[39 ページの「サービスアカウントのセットアップ」の項](#)を参照してください。
- ▶ また、「SQL Server Agent」と「SQL Server Browser サービス」の「スタートアップの種類」は、「自動」を選択します。
- ▶ 「データベースエンジンの構成」画面で、「現在のユーザの追加」をクリックします。



SQL Server 2008 をインストールすると、デフォルトではローカルの管理者グループが自動的に SQL Server へはアクセスできないようになっています。したがって、ここで追加するユーザアカウントを後で行う Operations Manager のインストールに使用する必要があります。さらに、Operations Manager のインストールダイアログに入力されるユーザアカウントはすべて認証済み SQL Server 管理者である必要があります。これは「Download Manager ログイン情報」画面などに適用されます。後で現在のユーザとして他のユーザアカウントを使用したい場合は、ここで認証済み SQL Server 管理者を他のユーザアカウントとして追加することができます。

3.6.6 SQL サーバ管理者権限を持つユーザーアカウントの追加

SQL Server Management Studio でユーザーアカウントを確認し追加することもできます。SQL Server Management Studio の「セキュリティ」 – 「サーバルール」 – 「sysadmin」に承認された SQL Server 管理者が表示されます。

コンテキストメニューで「Properties」を選択し、SQL サーバ管理者権限を持つユーザーアカウントを追加します。

3.7 SQL Server 2005

Operations Manager を使用するには SQL データベースが必要です。SQL Server 2005 がすでにシステムにある場合、Operations Manager ソフトウェアのインストール時に SQL Server 2005 を指定することができます。SQL Server 2005 Express Edition の場合は、Operations Manager 専用のインスタンスが必要であり、SQLSERVIEWERVIEW という名前でなければなりません。常に最新のサービスパックを使用することをお勧めします。

Windows Server 2008 では、SQL Server 2005 または SQL Server 2005 Express を使用しなければなりません。Operations Manager ソフトウェアをインストールすると、SQL Server 2005 Express が自動的にインストールされます。

Microsoft は Windows Server 2008 上の MSDE 2000/SQL Server 2000 のサポートを終了しています。

 ServerView V4.52 は、SQL Server 2000 または MSDE 2000 からの SQL Server 2005 または SQL Server 2005 Express へのアップグレードをサポートします。

データベースを管理するために、SQL Server Management Studio (Express)、osql、または sqlcmd を使用することができます。114 ページの「SQL Server 2008/2005」の項を参照してください。

3.7.1 エディション

以下の SQL Server 2005 のエディションを使用できます。

Express Edition

SQL Server 2005 Express は MSDE 2000 の後継バージョンであり、Microsoft ダウンロードセンターから入手できます。最小で 512 MB の RAM が必要であり、最大で 1 個の CPU と 1 GB の RAM を使用します。

Workgroup Edition

小規模の組織向け。最大 2 個の CPU と 3 GB の RAM を使用します。

Standard Edition

小・中規模の組織向け。

最大 4 個の CPU を使用します。最大使用 RAM は OS がサポートする最大サイズと同じです。フェイルオーバークラスタをサポートします(2 ノードまで)。

Enterprise Edition

4 個を越える CPU をサポートします。最大使用 RAM は OS がサポートする最大サイズと同じです。フェイルオーバークラスタをサポートします。

3.7.2 インストールの準備

SQL Server 2005 のインストール中、ハードウェアとソフトウェアの要件の確認があります。これらの詳細、最新のサービスパック、および SQL Server 2005 Express パッケージのダウンロードは、<http://www.microsoft.com/Japan/download.htm> の Microsoft ダウンロードセンターを参照してください。

ダウンロードセンターには、SQL Server 2005 のインストールについてさらに詳細な *Readme* ファイルと SQL Server 2005 Books Online があります。

SQL Server 2005 をインストールする前に .NET Framework 1.2 とそれ以降の 1.x バージョンをご使用のコンピュータからアンインストールしてください。.NET Framework 1.0 と 1.1 はアンインストールする必要はありません。

SQL Server 2005 のエディションはすべて対話式にインストールすることができます。



SQL Server インスタンスの異なる言語版の同一システムへのインストールはサポートしていません。

例

SQL Server 2005（英語）と SQL Server 2005（日本語）は、同一システムへの並列インストールされたインスタンスとしてはサポートされません。

3.7.3 SQL Server 2005 Express Edition のインストール

ServerView Suite DVD 1 には SQL Server 2005 Express（日本語版）が梱包されている Operations Manager が入っています。Windows Server 2008 では、Operations Manager ソフトウェアのインストール中にこのバージョンを自動的にインストールすることができます。Windows Server 2003 では、このバージョンを Microsoft ダウンロードセンターでダウンロードした後、対話式にインストールすることができます。[50 ページ](#)を参照してください。



SQL Server 2005 Express は、任意のインスタンス名の SQL Server 2005 Workgroup/Standard/Enterprise Edition、もしくは ServerView インスタンス名が「SQLSERVERVIEW」の SQL Server 2005 Express のどちらもインストールされていない場合に、Operations Managerと一緒に自動でインストールされます。

Microsoft ダウンロードセンターからの SQL Server 2005 Express のインストール

以下の項には Microsoft ダウンロードセンターで入手できる SQL Server 2005 Express のインストール方法が記載されています。常に最新のサービスパックを使用するように注意してください。この項では現時点で最新の Service Pack 3 について記載します。

Microsoft ダウンロードセンター

(<http://www.microsoft.com/Japan/download.htm>) から以下のファイルをダウンロードします。

- .NET Framework 2.0 再頒布可能パッケージ (Windows Server 2008 以外の場合)
- SQL Server 2005 Express Edition SP3
- オプション : SQL Server Management Studio Express SP3
- オプション : SQL Server 2005 Books Online

次の順序でソフトウェアをインストールしてください。

1. .NET Framework 2.0 再頒布可能パッケージをインストールします。
2. SQL Server 2005 Express Edition SP3 をインストールします。

SQLExpr.exe を実行し、インストールを開始します。SQL Server 2005 Express のインストールは対話式です。ほとんどのダイアロップボックスではデフォルトの設定のままでいいですが、以下の項目は設定する必要があります。

- ▶ 「登録情報」画面で、「詳細構成オプションを非表示にする」を無効にします。
- ▶ 「インスタンス名」画面で、インスタンス名を「SQLEXPRESS」から「SQLSERVIEW」に変更します。

▶ 「サービスアカウント」画面において

- 「Network Service」アカウントは使用しないでください。
- 「ドメインユーザー アカウントを使用する」をクリックし、ユーザー名、パスワード、ドメイン名を入力します。

ドメインユーザー アカウントには管理者権限は必要ありません。このアカウントは SQL のすべてのサービスに使用することができます。

ここにローカルの Windows のユーザアカウントを入力する場合は、最小の権限と最高のセキュリティ レベルを持つアカウントを使用してください。

ローカルの Windows のユーザアカウントの使用に関しては例外もいくつかあります。

- リモートによる手順の呼び出し、レプリケーション、ネットワーク ドライブへのバックアップ、および異なる形式のデータ ソースをリモートでサーバ上で使用する場合、ローカルの Windows のアカウントでは不十分です。
- 以前のバージョンの SQL Server との side-by-side 構成で SQL Server 2005 をインストールする場合、グローバルのドメイン グループからのアカウントのみ使用できます。
- フェイルクラスタのインストールにはローカルのシステムやローカルのサービスアカウントは使用できません。

さらに詳細な情報は SQL Server 2005 *Readme* ファイルと SQL Server 2005 *Books Online* の "サービスアカウント" に記載されています。

また、「サービスアカウントごとにカスタマイズする」を選択して、サービスごとに別々のサービスアカウント（統合システムアカウントなど）を選択できます。

- ▶ 「ローカルシステム」アカウントを「SQL Server Service」サービスに、「ローカルサービス」アカウントを「SQL Server Browser」サービスに割り当てます。

インストール後に SQL Server Configuration Manager を用いて、サービスアカウントの割り当てを変更することができます。この件についての詳細は、SQL Server 2005 のオンライン ドキュメントの「サービスアカウント」を参照してください。

Windows Server 2008 では、「追加情報」画面のオプション「Launch the User Provisioning Tool」のチェックを外してください。

デフォルトでは、TCP/IP ネットワークプロトコルは SQL Server Express エディションではアクティブではありません。しかし TCP/IP ネットワークプロトコルは Operations Manager のデータベースアクセスに必要です。したがって、SQL Server 2005 Express をインストールしている場合は、Operations Manager のインストールを開始する前に TCP/IP ネットワークプロトコルをアクティブにする必要があります。手順は以下のとおりです。

- ▶ SQL Server 構成マネージャーを起動します。
- ▶ 「SQL Server 2005 ネットワークの構成」で、インストール済みの SQL Server インスタンスの SQL Server インスタンス名を選択します。
- ▶ TCP/IP プロトコルを「有効」に設定します。

この変更を有効にするためには SQL Server サービスを再起動する必要があります。

3. オプション : SQL Server Management Studio Express SP3 をインストールします。

- ▶ ファイル *SQLServer2005_SSMSEE.msi* を実行します。

インストールは対話式です。ほとんどのダイアロップバックスはデフォルトの設定のまま進むことができます。このインストールによってグラフィカルプログラムである SQL Server Management Studio Express がインストールされます。

4. オプション : SQL Server 2005 Books Online をインストールします。

これにより、SQL Server 2005 のオンラインドキュメントがインストールされます。

5. ご使用の SQL Server システムがインターネットにアクセス可能な場合は、Microsoft アップデート Web サイト (<http://www.update.microsoft.com>) を介してアップデートすることができます。インターネットにアクセスできない場合は、Microsoft ダウンロードセンターで追加のアップデートパッケージを確認してください。

3.7.4 SQL Server 2005 Enterprise/Standard/Workgroup Edition のインストール

本項では、Microsoft SQL Server 2005 DVD からインストールする必要のある SQL Server 2005 Enterprise/Standard/Workgroup Edition の初期バージョンのインストール方法を記載します。

SQL Server 2005 のインストールは対話式です。ほとんどのダイアロスピッカスはデフォルトの設定のままでいいですが、以下の項目は設定する必要があります。

- ▶ 「インストールするコンポーネント」画面で、オプションの「SQL Server データベースサービス」を選択し、「詳細設定」をクリックします。
Workgroup Edition では、「インストールするコンポーネント」画面は表示されません。
- ▶ 「機能の選択」画面で、「SQL Server Database Services」を開きます。
- ▶ 「データファイル」で、「ローカルハードドライブにインストール」を項目から選択します。
- ▶ 「共有ツール」で、ローカルハードドライブにインストールを項目から選択します。
- ▶ 「機能の選択」画面で、「クライアントコンポーネント」を開きます。
- ▶ 「管理ツール」で、ローカルハードドライブにインストールを項目から選択します。これによりグラフィカルプログラムである **SQL Server Management Studio** がインストールされます。
- ▶ 「ドキュメント、サンプル、およびサンプルデータベース」で、ローカルハードドライブにインストールを項目から選択することもできます。これにより **SQL Server 2005 オンラインドキュメント** がインストールされます。
- ▶ 「サービスアカウント」画面において
 - 「NetworkService」のアカウントを使用しないでください。.
 - 「ドメインユーザーアカウントを使用する」をクリックしてユーザ名、パスワード、ドメイン名を入力してください。ドメインユーザアカウントには管理者権限は必要ありません。ドメインユーザアカウントは **SQL** のすべてのサービスに使用することができます。ここにローカルの **Windows** のユーザアカウントを入力する場合は、最小の権限と最高のセキュリティレベルを持つアカウントを使用してください。

ただし、ローカルの Windows のユーザアカウントの使用に関しては例外もいくつかあります。

- リモートによる手順の呼び出し、レプリケーション、ネットワークドライブへのバックアップ、および異なる形式のデータソースをリモートでサーバ上で使用する場合、SQL Server Agent メール機能、および SQL Mail を他のアプリケーション用に SQL サーバ上で使用する場合は、ローカルの Windows のアカウントでは不十分です。
- 以前のバージョンの SQL Server との side-by-side 構成で SQL Server 2005 をインストールする場合、グローバルのドメイングループからのアカウントのみ使用できます。
- フェイルクラスタのインストールにはローカルのシステムやローカルのサービスアカウントは使用できません。

さらに詳細な情報は SQL Server 2005 Readme ファイルと SQL Server 2005 Books Online の "サービスアカウント" に記載されています。

また、「サービスアカウントごとにカスタマイズする」を選択して、サービスごとに別々のサービスアカウント（統合システムアカウントなど）を選択できます。

- ▶ 「ローカルシステム」アカウントを「SQL Server サービス」と「SQL Server Agent」サービスに、「ローカルサービス」アカウントを「SQL Server Browser」サービスに割り当てます。

インストール後に SQL Server Configuration Manager を用いて、サービスアカウントの割り当てを変更することができます。この件についての詳細は SQL Server 2005 オンラインドキュメントの "サービスアカウント" 項を参照してください。

- ▶ オプションの「SQL Server Agent」と「SQL Browser」を選択します。

Enterprise/Standard/Workgroup エディションの初期バージョン以外のインストール手順も同様です。

サービスパックのインストール

SQL Server 2005 Express Edition 以外の Enterprise/Standard/Workgroup エディションはサービスパックでアップデートすることができます。

ご使用の SQL Server システムがインターネットにアクセス可能な場合は、Microsoft アップデート Web サイト (<http://www.update.microsoft.com>) を介してアップデートすることができます。「カスタム」ボタンをクリックして利用可能なアップデートを表示してください。

ご使用の SQL Server システムがインターネットにアクセスできない場合は、インターネットにアクセス可能なシステムを使用して、Microsoft ダウンロードセンター SQL Server インスタンス (<http://www.microsoft.com/Japan/download.htm>) でサービスパックをダウンロードしてください。

Windows Server 2008 では、「追加情報」画面のオプション「Launch the User Provisioning Tool」のチェックを外してください。

i アップデートインストールする前にそのサーバインスタンスに関連するアプリケーションやサービスをすべて終了してください。SQL Server Management Studio と「プログラムの追加と削除」画面は閉じてください。

▶ インストールを開始します。

インストールは対話式で、デフォルト値のままで構いません。アップデートされたコンポーネントは「機能の選択」画面に表示されます。

インストール後にシステムが再起動します。

3.8 SQL Server 2000 (MSDE 2000)

3.8.1 MSDE 2000

ServerView Suite DVD 1 に、MSDE 2000 (日本語版) が梱包されている Operations Manager が入っています。Operations Manager のインストール中にこのバージョンを自動的にインストールすることもできます。

i MSDE 2000 は、任意のインスタンス名の SQL Server 2000 Service Pack 4 や SQL Server 2005、もしくは ServerView インスタンス名が「SQLSERVIEWIEW」の MSDE 2000 Service Pack 4 や SQL Server Express のどちらもインストールされていない場合に、Operations Manager と一緒に自動でインストールされます。

MSDE 2000 は、200 台以下のサーバ構成を推奨します。この上限に達した場合、SQL Server 2000 へのアップグレードを推奨します。[149 ページの「負荷分散の変更」の項](#)を参照してください。MSDE 2000 のバージョン 8.00.2039 からのアップグレードのみ可能です。

データベース管理には、Enterprise Manager または DbaMgr2k を使用することができます。Enterprise Manager は、SQL Server 2000 の基本インストールと一緒に直接インストールされます。DbaMgr2k のインストール方法については [128 ページの "DbaMgr2k"](#) を参照してください。

-  Operations Manager バージョン 4.8 以降の場合、MSDE 2000 では SQL Server エージェントによる ServerView データベースのバックアップやメンテナンスの実行はできませんが、SQL Server 2005 Express では、Windows タスクスケジューラが実行します。

Microsoft ダウンロードセンターからの MSDE 2000 (日本語版) のインストール

日本語版 MSDE 2000 のインストールの手順は以下のとおりです。

- ▶ Microsoft ダウンロードセンター
(<http://www.microsoft.com/Japan/download.htm>) からファイル *SQL2000.MSDE-KB884525-SP4-x86-JPN.EXE* をご使用のシステムにダウンロードします。
- ▶ 以下のコマンドをコマンドプロンプトに入力します。

```
cd <Directory of the unpacked data>
cd MSDE
setup.exe SAPWD=<password> INSTANCENAME=SQLSERVERVIEW
DISABLENETWORKPROTOCOLS=0
```
- ▶ システムを再起動します。

3.8.2 SQL Server 2000

Operations Manager には SQL データベースが必要です。SQL Server 2000 Service Pack 4 がご使用のシステムにインストール済みの場合は、Operations Manager ソフトウェアのインストール時に SQL Server 2000 Service Pack 4 を指定することができます。

データベース管理には Enterprise Manager、DbaMgr2k、osql を使用することができます。116 ページの「[SQL Server 2000 および MSDE](#)」の項を参照してください。

3.8.2.1 エディション

以下の SQL Server 2000 のエディションを使用できます。

Workgroup Edition

小規模の組織向け

Standard Edition

小・中規模の組織向け。最大 4 個までの CPU、2 GB までのメモリシステムで使用することができます。

Enterprise Edition

4 個を越える CPU と 2 GB を超えるメモリが必要です。2 ノードのフェイルオーバークラスタをサポートします。

3.8.2.2 インストール

SQL Server 2000 のインストールには、まず SQL Server 2000 の基本インストールを行い、その後 SQL Server 2000 Service Pack 4 をインストールする必要があります。基本インストールでは、Enterprise Manager もインストールされます。これはデータベース管理用のグラフィカルプログラムです。

i SQL Server 2000 Standard Edition Service Pack 4 は SQL Server 2000 Enterprise Edition Service Pack 4 にアップグレードすることができます。

Standard Edition と Enterprise Edition はサーバ OS のみインストール可能です。

基本インストール

基本インストールでは以下を設定します。

- インストール範囲を選択してください。
 - ▶ SQL Server 2000 と Enterprise Manager のインストールには「サーバーとクライアントツール」(デフォルト) を選択します。
- SQL Server インスタンスを指定してください。
 - ▶ SQL Server インスタンスには「規定インストール」を選択します。Operations Manager インストールウィザードの「SQL Server Connection」では、この SQL Server インスタンスが名前(「local」)の下に表示されます。
- 認証モードを指定してください。
 - ▶ 「Windows 認証モード」を指定します。

サービスパックのインストール

アップデートパッケージの SQL Server 2000 Service Pack 4 をインストールしてください。

3.9 リモートの SQL Server の設定

リモートの SQL Server の設定手順は以下のとおりです。

- ローカルの管理者としてログインします。
- SQL Server インスタンス用の以下のサービスをリモートのシステムで起動します。

SQL Server

SQL ServerAgent

SQL Server Browser (SQL Server 2005 のみ)

「SQL Server」と「SQL Server Agent」のサービスはドメインユーザーアカウントで実行してください。セキュリティのため、このアカウントは Windows グループの「Administrators」のメンバーではないものにしてください。

両サービスは、サービスアカウントの「Local System」でも実行することができます。このアカウントは高い権限を持っているため、セキュリティ上推奨されません。「SQL Server Browser」サービスはデフォルトでは、サービスアカウントの「Local Service」で実行します。

データベース管理ツールを使用して SQL Server のスタートアップアカウントを調べるか変更してください。これにより、必要な許可と Windows のユーザー権限をすべて新しいスタートアップアカウントに自動的に割り当てられるようになります。

SQL Server 2005 には SQL Server 構成マネージャーを使用してください。

- ▶ SQL Server 2005 の「サービス」をクリックします。
- ▶ アカウントを変更するには、サービスを停止し、右クリックメニューの「プロパティ」でサービスアカウントを変更します。
- ▶ サービスを開始します。

SQL Server 2000 の場合の手順は以下の通りです。

- ▶ 管理ツールの「サービス」で、「MSSQLSERVER」と「SQLSERVERAGENT」サービスを停止します。
- ▶ Enterprise Manager を起動し「SQL Server」と「SQL Server Agent」のサービスアカウントを変更します。
- ▶ 管理ツールの「サービス」で、サービス「MSSQLSERVER」と「SQLSERVERAGENT」を起動します。

- リモートの **SQL Server** へのアクセスは、**Operations Manager** サービスの **Windows** のドメインユーザーアカウントによって認証されます。

Operations Manager のインストール中には、インストールを行うドメインユーザーアカウントや、サービス用に指定する他のすべてのドメインユーザーアカウントが必要となります。

これらのアカウントに関しては、以下の記述に注意してください。

- ドメインユーザーアカウントは使用するサーバと同じドメインに属している必要があります。
- ドメインユーザーアカウントは、**SQL Server** 管理ツールによって **SQL Server** で「ログイン」として作成する必要があります。
- このログインには特定のサーバ役割を割り当てる必要があります。役割には、インストールやアプリケーションの実行に必要な権限を含みます。

ユーザーアカウントの設定手順は以下のとおりです。

- ▶ リモートのシステムで管理者としてログインします。
- ▶ データベース管理に必要なプログラムを起動します。
 - **SQL Server 2005** の場合、「**SQL Server Management Studio**」
 - **SQL Server 2000** の場合、「**Enterprise Manager**」
- ▶ **SQL Server** インスタンスを選択するか、**SQL Server** インスタンスに接続します。
- ▶ 「セキュリティ」→「ログイン」の順に選択します。
- ▶ 右クリックメニューから、「新規ログイン」を選択します。「新規ログイン」画面が開きます。
- ▶ ドメインユーザーアカウントの名前を、「ログイン名」または「名前」に入力します。他の設定はそのまま構いません。
- ▶ 「サーバーの役割」タブに切り替えます。
- ▶ サーバの役割として「**sysadmin**」または「**System Administrators**」を選択します。
- ▶ 「OK」をクリックします。

- 対応する SQL Server インスタンスへのリモートからのアクセス (TCP/IP による) をアクティブにする必要があります。
 - SQL Server 2000 インスタンスの場合
 - ▶ 「スタート」→「すべてのプログラム」→「Microsoft SQL Server」→「サーバーネットワークユーティリティ」の順に選択して、「SQL Server ネットワークユーティリティ」を開きます。
 - ▶ 「全般」タブで、TCP/IP がこのインスタンスの「有効になっているプロトコル」の下にリストされているかどうか確認します。
 - ▶ 上記で表示されていない場合、このインスタンスの TCP/IP を有効にします。
 - SQL Server 2005 インスタンスの場合
 - ▶ 「スタート」→「すべてのプログラム」→「Microsoft SQL Server 2005」→「構成ツール」→「SQL Server 構成マネージャ」の順に選択して、「SQL Server Configuration Manager」を開きます。
 - ▶ 「SQL Server 2005 ネットワークの構成」を選択します。
 - ▶ 次に「<インスタンス名>」のプロトコルをクリックします。プロトコルとそのステータスのリストが表示されます。
 - ▶ 「Protocol for <instance>」の設定を確認します。
 - ▶ TCP/IP プロトコルのステータスが「有効」に設定されていることを確認してください。
 - ▶ 無効になっている場合、有効にします。
- SQL Server インスタンスへのリモートからのアクセスの場合、静的ポートが必要です。名前のない SQL Server インスタンスを使用するか、または名前付きインスタンスに静的ポートを設定します。

名前付きインスタンスのポートの設定を確認する手順は以下のとおりです。

- ▶ 「レジストリエディタ」を開きます。
- ▶ 以下の項目を検索します。

- SQL Server 2008 インスタンスの場合

HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Microsoft\Microsoft SQL Server\MySQL<n.Instance Name>\MSSQLServer\SuperSocketNetLib\Tcp\IPAll

- SQL Server 2005 インスタンスの場合

HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Microsoft\Microsoft SQL Server\<MSSQL.n>\MSSQLServer\SuperSocketNetLib\Tcp\IPAll

- SQL Server 2000 インスタンスの場合

HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Microsoft\Microsoft SQL Server\<instance_name>\MSSQLServer\SuperSocketNetLib\Tcp

- ▶ 「TCPDynamicPorts」と「TCPPort」の値を確認します。
「TCPDynamicPorts」の値が設定されていない場合、SQL Server は常に静的ポートを使用します。ポート番号は「TCPPort」の下にあります。



以前に静的ポートが設定された場合、SQL Server インスタンスを再起動してポートの変更を有効にする必要があります。

名前付きインスタンスの静的ポートは、以下の設定ツールによって割り当てることができます。

- SQL Server 2000 インスタンスの場合、「SQL Server ネットワークユーティリティ」
- SQL Server 2005 インスタンスの場合、「SQL Server Configuration Manager」。手順は SQL Server 2005 Books Online の "特定の TCP ポートで受信待ちするようにサーバーを構成する方法" に記載されています。
- ファイアウォールの設定によってポートが遮断されないように注意してください。必要であれば、ファイアウォール管理プログラムで以下の SQL Server インスタンス用のポートの設定をしてください。
 - レジストリエディタで、プログラム SQL Server とプロトコル TCP に対してデフォルトのポート番号 1433 か、「TCPPort」の下にあるポート番号を追加します。
 - プログラム SQL Server とプロトコル UDP に対してポート番号 1434 を追加します。

管理端末でのその他の手順

- ▶ ローカルの管理者としてログオンします。
- ▶ Operations Manager のインストールを行うドメインユーザーアカウントと、サービス用にインストール中に指定するすべてのドメインユーザーアカウントを追加します。例えば「リモート DB」画面や「ログオン情報」画面などでは「Administrators」グループに対して追加します。
- ▶ このドメインユーザーアカウントでログオンします。
- ▶ ServerView Operations Manager のインストールを開始し、「SQL Server の選択」画面で「別サーバの SQL Server にリモート接続する」を選択します。[91 ページの「Operations Manager ソフトウェアの GUI ダイアログ形式インストール」](#) の項を参照してください。
- ▶ 「リモート DB」画面で、対応する値を入力します。[92 ページの「Operations Manager インストールウィザード - SQL Server の選択」](#) を参照してください。ローカルのサービスの「ServerView Services」はこのアカウントで実行され、上記で作成した SQL Server Login によってリモートの SQL Server にアクセスすることができます。
- ▶ ログオン情報画面で、同じドメインユーザーアカウントか、SQL Server Login として作成した他のドメインユーザーアカウントを入力します。
- ▶ その他のウィンドウの入力項目は [91 ページの「Operations Manager ソフトウェアの GUI ダイアログ形式インストール」](#) の項に記載されています。

ServerView Operations Manager のインストール後に「SQL Server」と「SQL Server Agent」のサービスアカウントを変更したい場合は、リモートのシステムで、SQL Server のバックアップフォルダ `DbBackupPath` の `%windir%\ServerViewDB.ini` 以下のファイルに書き込み許可を与えます。

アップグレードインストール

ServerView Operations Manager をインストールする際、ServerView サービスのユーザ名とパスワードを「リモート DB」画面で指定します。

パスワードは保存されないため、アップグレードインストールではパスワードを再度入力する必要があります。

3.10 SQL Server のアップグレードインストール

3.10.1 新しいバージョンの SQL Server へのアップグレード

インストール済みの ServerView データベースでは、既存の SQL Server (SQL Server 2005 /SQL Server 2005 Express または SQL Server 2000/MSDE) のインスタンスから新しいバージョンの SQL Server へアップグレードすることができます。

- バージョン 4.52 の ServerView では、SQL Server 2000 または MSDE から SQL Server 2005 または SQL Server 2005 Express へのアップグレードをサポートします。
- バージョン 4.90 の Operations Manager では、SQL Server 2005/SQL Server 2005 Express または SQL Server 2000/MSDE から SQL Server 2008 へのアップグレードをサポートします。

 より新しい SQL Server 2008/2005 のバージョンは、Windows Server 2003 以降で稼動する Operations Manager データのみ使用できます。

アップグレードには以下の 2 種類があります。

- SQL Server 2000 または MSDE のインスタンスを SQL Server 2005 または SQL Server 2005 Express のインスタンスへアップグレードします。[65 ページ](#)の「SQL Server インスタンスのアップグレード」の項を参照してください。
- ServerView データベースを SQL Server 2000 または MSDE のインスタンスから SQL Server 2005 または SQL Server 2005 Express のインスタンスへ移動します。[72 ページ](#)の「ServerView データベースの移動」の項を参照してください。

SQL Server インスタンスをアップグレードするか、または ServerView データベースを移動した後で、内部バックアップのアップデートやセットアップ、さらに Operations Manager の管理ジョブのために、その他のマイグレーション処理が必要です。このような目的のため、バージョン 4.52 のインストールでは、インスタンスをアップグレードしたりデータベースを移動した後で実行するためのバッチファイルが提供されます。

SQL Server がローカルの管理用サーバではなくリモートで他のサーバにインストールされている場合は ([35 ページ](#)の「別のシステムへのリモートのインストール」の項をご覧ください)、次を確認し実行してください。

SQL Server クライアントツールのインストール

リモートの SQL Server 2005/2008 へアクセスする場合、ローカルの管理用サーバ上に SQL Server クライアントツール (Microsoft SQL Server Native Client) が必要です。これらのツールがインストールされているか確認します。

- SQL Server 2005 用 : Microsoft SQL Server Native Client
- SQL Server 2008 用 : Microsoft SQL Server 2008 Native Client

ツールがインストールされていない場合は、SQL Server アップグレードを完了させ、提供されたバッチファイルを実行する前にツールをローカルの管理用サーバにインストールしてください。SQL Server クライアントツールは Microsoft ダウンロードセンターから入手できます。

3.10.1.1 SQL Server インスタンスのアップグレード

このアップグレード方法は「インプレース」アップグレードとも呼ばれ、SQL Server Setup のインストールオプションとして提供されます。このアップグレードは、SQL Server Setup を実行し、そこで提供されるオプションを選択すると実行されます。SQL Server のアップグレード中には、このインスタンスにインストール済みのすべてのデータベース、すなわち ServerView データベースも、自動的にアップグレードされます。

Operations Manager はシステム上にインストールされたままです。アップグレードの実行中は Operations Manager へのアクセスが一時的に停止します。

インプレースアップグレードには以下のことに注意が必要です。

- インストール済みの特定のエディションの SQL Server 2005 または SQL Server 2000 のインスタンスを対応する SQL Server 2008 または 2005 の互換性のあるエディションにアップグレードすることができます。例えば、MSDE インスタンスは、SQL Server 2005 Express または SQL Server 2008 Express のインスタンスへはアップグレードすることができますが、SQL Server 2008/2005 Standard または Enterprise Edition へは直接アップグレードすることはできません。
- インストール済みの SQL Server の 32 ビットエディションをインプレースアップグレードによって SQL Server の 64 ビットエディションにアップグレードすることはできません。

- 言語への依存性も考慮する必要があります。インプレースアップグレードの際、SQL Server 2000 のローカライズ版（例：日本語版）を異なる言語版の SQL Server へアップグレードすることはできません。したがって、インプレースアップグレードでは、アップグレード前のインスタンスと同じ言語の新しい SQL Server インスタンスをインストールする必要があります。SQL Server の英語版だけはローカライズされた異言語版へアップグレードすることができます。

インストールの要件は、SQL Server の Setup プロセス自体によってもチェックされ、必要に応じてメッセージや警告が表示されます。

SQL Server インスタンスが Operations Manager によってインストールされている場合、インストールの言語は日本語です。

インストール済み SQL Server インスタンスの製品バージョン、インストール言語、エディションを以下の手順で事前に確認できます。

- ▶ 設定ファイル *ServerViewDB.ini* の「**Server_Instance**」パラメータの内容を確認します。設定ファイルは <windir> ディレクトリにあります。
- ▶ コマンドプロンプトを開きます。
- ▶ 以下のコマンドを入力します。

```
osql -S <server_instance> -E  
xp_msver  
GO  
select @@version  
GO
```

バージョンや言語についての必要な情報がコマンドのアウトプットの 2
ProductVersion と 3 *Language* の下に表示されます。@@version にはエディションが表示されます。

quit コマンドで終了します。

インストールの準備

- SQL Server インスタンスがアップグレードされている間、Setup がハードウェアとソフトウェアの要件を確認します。この要件は事前に、Microsoft ダウンロードセンターの SQL Server 2008 または SQL Server 2005 (Express) についての Web ページや、インターネットでアクセスする SQL Server のオンラインドキュメントでも確認することができます。
- SQL Server Express Edition をインストールするには、事前に必要なソフトウェアを Microsoft ダウンロードセンターからダウンロードしてインストールしておく必要があります。SQL Server 2008/2005 のその他のエディションは必要なソフトウェアコンポーネントも同梱しており、Setup を開始するとそれらもインストールされます。
- 該当の SQL Server のオンラインドキュメントで、Microsoft が Setup でサポートしているバージョンとエディションも確認することができます。
- インストール済み SQL Server インスタンスのタイプ（既定インスタンスか名前付きインスタンスか）とその名前を確認します。SQL Server Setup が適切な SQL Server インスタンスをアップグレードするように、SQL Server のインストール中にインスタンス名とタイプを指定する必要があります。この情報は、設定ファイル *ServerViewDB.ini* (<windir> ディレクトリ内) の「Server_Instance」と「Instance」パラメータの中にあります。
 - 「Instance」パラメータがない場合、そのインスタンスはデフォルトです。「Server_Instance」の下には、サーバ名（通常は「(local)」だけ）があります。
 - 名前付きインスタンスの場合、そのインスタンス名が「Instance」の下にあります。「Server_Instance」パラメータには <server_name> ¥ <instance_name> の情報が記載されています。

アップグレード前にしておくこと

- ▶ 該当するインスタンスのデータベースをバックアップします。
- ▶ 該当の SQL Server インスタンスにアクセスする、すべてのアプリケーションを終了します。
- ▶ すべての従属するサービス、特に「ServerView Services」と「ServerView Download Service」を終了します。
- ▶ SQL Server 2008/2005 (Express) のインストールに必要なソフトウェアをインストールします。

アップグレードの実行

SQL Server Setup を実行してインスタンスをアップグレードします。すべてのエディションの **SQL Server** に対してもインストールは対話式に行われます。常に最新のサービスパックを使用することをお勧めします。できれば、セットアップ後に **Microsoft** アップデートを行い、**Microsoft** からの **SQL Server** のアップグレード済みバージョンに対する最新のセキュリティのアップデートを入手してください。

SQL Server 2005/2000 エディションから **SQL Server 2008** へのアップグレード

SQL Server 2008 のアップグレード中は以下の点に注意してください。

- インストールの間、**SQL Server Setup** プログラムはサーバ上のすべてのインストール済み **SQL/MSDE Server** インスタンスを検出し、様々な対話のステップで選択や設定のために表示されます。
- 最初に、「インスタンス選択」画面ではインスタンス名を表示されたリストから選択します。インストール済みインスタンスがいくつもある場合、**Setup** は **SQL Server** の標準的なインスタンスがあればそれを事前に選択します。**ServerView** が使用する **SQL Server 2005 Express** または **MSDE** のインスタンスは通常、名前付きインスタンス（インスタンス名は「**SQLSERVERVIEW**」）としてインストールされます。上述のように、**ServerView** が使用するインスタンスの名前とタイプは、設定ファイル **ServerViewDB.ini** で確認することができます。
- 次の「インスタンスの構成」画面では、インスタンス名を再度確認し、標準的インスタンスや名前付きインスタンスをインストールするかどうか指定します。
- インスタンス名以外の残りの設定オプションはデフォルトのままで構いません。

MSDE/SQL Server 2005 から **SQL Server 2008 Express** へのアップグレード

インストール済み **MSDE** インスタンスは **SQL Server 2008 Express** にアップグレードできます。**SQL Server 2005 Express** は、**SQL Server 2008 Express** または各種ツール付きの拡張版（**SQL Server 2008 Express with Tools**）にアップグレードできます。拡張版をインストールしたい場合は、アップグレード後に再度インストールプログラムを実行して他のコンポーネントを追加する必要があります。

SQL Server 2008 Express の必要なエディションは Microsoft ダウンロードセンターで入手できます。Setup を起動後、オプションの「SQL Server 2000 or SQL Server 2005 からのアップデート」を選択します。インストール中、続いているダイアログの中でアップグレードする **SQL Server** インスタンスを指定する必要があります。

他のすべての **SQL Server 2005/2000** エディションから **SQL Server 2008** へのアップグレード

SQL Server 2005/2000 の他のすべてのエディションも **SQL Server 2008** の対応するエディションにアップグレードできます。**SQL Server 2008** のエディションは、お手持ちの **SQL Server 2008** インストールメディア (DVD) からインストールしてください。

SQL Server 2000 の各エディションから **SQL Server 2005** へのアップグレード

MSDE インスタンスの **SQL Server 2005 Express** へのアップグレード

SQL Server 2005 Express については、Microsoft ダウンロードセンターでファイルを入手します。**SQLEXPRESS.EXE** を実行し、インストールします。

インスタンスのアップグレードの手順は、**SQL Server 2005 Express** の新規インストールに必要な手順と基本的に同じです。

アップグレードについては以下の点に注意してください。

- **SQL Server 2005 Express** のインストールプログラムは、デフォルトではインスタンス名「**SQLEXPRESS**」をどのインストールでも使用します。インストール済みの異なる名前のインスタンスをアップグレードに選択できるように、「登録情報」画面で「詳細構成オプションを非表示にする」を無効にします。
- 「インスタンス名」画面では、アップグレードするインストール済みインスタンスを選択することができます。インスタンス名を直接入力するか、「インストール済みのインスタンス」をクリックすると表示されるリストからインスタンス名を選択します。
- 次に、選択された **MSDE** インスタンスのインストール済みコンポーネントが「既存のコンポーネント」画面に表示されます。アップデートできるコンポーネントには関連するオプションがアクティブになります。これらのコンポーネントを選択してインストールを続行します。

SQL Server 2000 の他のすべてのエディションの SQL Server 2005 へのアップグレード

SQL Server 2005 の他のすべてのエディションは SQL Server 2005 DVD からインストールします。

ここでも、アップグレードインストールのプロセスは基本的には新規のインストールと同じですが、以下の例外があります。

- インストール中、「インスタンス名」画面で、アップグレードする既定のインスタンスまたは名前付きインスタンスを選択します。ここで選択されたインスタンスがセットアップ中にアップデートされます。インスタンス名を直接入力するか、「インストール済みのインスタンス」をクリックすると表示されるリストから、インスタンス名を選択します。
- インストール済みコンポーネントが「既存のコンポーネント」画面に現れます。オプションがアクティブであれば、アップグレードにこれらのコンポーネントを選択してインストールを続行します。

アップグレード後にすること

インスタンスのインプレースアップグレード後には、すべてのバージョンの SQL Server について以下の手順を実行する必要があります。

- ▶ 「SQL Server (<インスタンス名>)」サービスが起動したかどうか確認します。
- ▶ **SQL Server 2008/2005 Express** 以外のエディションの場合：
「SQL Server Agent (<インスタンス名>)」サービスが起動したかどうか確認します。



Operations Manager に対してリモートの SQL Server を使用している場合は、管理用サーバで追加の手順を実行してください。実行するには、「Domain」および「Username」項目にある `%windir%\ServerViewDB.ini` ファイルで指定されているユーザーアカウントで管理用サーバにログオンします。

- ▶ **SQL Server 2008/2005 Express** の場合：
Windows のサービス「タスクスケジューラ」が起動したかどうか確認します。
- ▶ **Operations Manager** を再起動する前に、**Operations Manager** の内部バックアップとメンテナンスジョブをここで再度セットアップします。コマンドプロンプトを開きます。
 - ▶ ディレクトリ <インストールパス>\ServerView Services\scripts\ServerView\Tools. に切り替えます。

- ▶ このディレクトリにある以下のバッチファイルを実行します。
 - SQL Server 2008 のエディションへのアップグレード後：
SVCreateJobs_Upgrade2008
 - SQL Server 2005 のエディションへのアップグレード後：
SVCreateJobs_Upgrade2005
- ▶ 実行中、「Renamed SQL Server Instance [Y/N] ?」と問われるので、「N」と入力します。
- ▶ Operations Manager に必要なすべてのアップグレード手順はこのバッチファイルから実行されます。個々のステップはログファイル *<DbApplicationFolder>\\$SVCreateJobs_Upgrade2005.log* にも記録されます。「DbApplicationFolder」パラメータの内容は設定ファイル *ServerViewDB.ini* で確認できます。
- ▶ 正常に実行できたら、「ServerView Services」と「ServerView Download Service」のサービスを開始します。
- ▶ ServerView データベースのバックアップジョブがセットアップされており、実行できるかどうか確認します。

SQL Server Express エディションでは、ジョブは Windows のタスクスケジューラによってセットアップされるため、タスクスケジューラで監視されます。

 - ▶ 「管理ツール」→「タスクスケジューラ」の順に開いて、ジョブとスケジュールのリストを確認します。
- ▶ SQL Server の他のすべてのエディションでは、サービスの「SQL Server Agent」がジョブのセットアップに使用されます。この場合、SQL Server Management Studio によってジョブとスケジュールを確認します。
 - ▶ SQL Server Management Studio を起動します。
 - ▶ SQL Server インスタンスをクリックし、「SQL Server Agent」を選択します。
 - ▶ 「ジョブ」の下にセットアップ済みのジョブが表示されます。各ジョブの最新スケジュールは「右クリック」→「スケジュールの管理」で確認できます。

3.10.1.2 ServerView データベースの移動

SQL Server インスタンス全体のインプレースアップグレードしない、またはできない場合は、ServerView データベースをインストール済みの SQL Server インスタンスから新しい SQL Server インスタンスへ移動させることによってマイグレーションできます。この手順は、SQL Server についての Microsoft オンラインドキュメントでは「*side-by-side*」アップグレードとも呼ばれます。ご使用の SQL Server エディションのインプレースアップグレードを Microsoft がサポートしていない場合はこのタイプを行う必要があります。例えば、32 ビットの SQL Server のエディションを 64 ビットの SQL Server のエディションへアップグレードする場合などがこのケースにあたります。

SQL Server 2005/SQL Server 2005 Express または SQL Server 2000/MSDE から新しい SQL Server のエディションへのアップグレードについて、どのバージョンとエディションのアップグレードを Microsoft がサポートしているかは、SQL Server 2008 と SQL Server 2005 についての Microsoft オンラインドキュメントで確認できます。

このアップグレード方法では、新しい SQL Server インスタンスが既存の SQL Server インスタンスと *side-by-side* にインストールされます。ServerView データベースがインストール済みインスタンスからデタッチされ、新しいインスタンスにアタッチされます。この方法では、Operations Manager はシステムにインストールされたままです。



Operations Manager に対するクライアントの設定が保持されるよう、新しい SQL Server インスタンスはアップデート前のインスタンスと同じシステムにインストールする必要があります。そのため、同じインスタンス名で *side-by-side* にインストールすることはできません。

以下のいずれかを行ってください。

- データベースをデタッチして、SQL Server インスタンスをアンインストールしてから新しいインスタンスをインストールする。
- 新しい SQL Server インスタンスを別のインスタンス名でインストールする。



インスタンスタイプの切り替えは、ServerView データベースのアップグレードではサポートしていません。アップグレードでは、名前付きインスタンスを別の名前でインストールすることはできますが、名前付きインスタンスから既定インスタンス（またはその逆）への切り替えはできません。

インストールの準備

- 新しいインスタンスのインストール中、ハードウェアとソフトウェアの要件が確認されます。この件については、Microsoft ダウンロードセンターの SQL Server 2008 または SQL Server 2005 (Express) の製品ページなどを参照してください。
- SQL Server Express Edition をインストールするには、事前に必要なソフトウェアを Microsoft ダウンロードセンターからダウンロードし、自分でインストールする必要があります。SQL Server のその他のエディションには必要なソフトウェアコンポーネントが同梱されています。
- インストール済み SQL Server インスタンスのタイプ（既定インスタンスか名前付きインスタンスか）とその名前を確認します。この情報は、設定ファイル *ServerViewDB.ini* (<windir> ディレクトリ内) の「*Server_Instance*」と「*Instance*」パラメータの中にはあります。
 - 「*Instance*」パラメータがない場合、そのインスタンスはデフォルトです。「*Server_Instance*」の下には、サーバ名（通常は「(local)」）だけがあります。
 - 名前付きインスタンスの場合、そのインスタンス名が「*Instance*」の下にあります。「*Server_Instance*」パラメータには「<サーバ名>\<インスタンス名>」の情報が記載されています。
- ServerView データベースファイルの現在のパス名を確認します。パス名はデータベースを新しい SQL Server インスタンスに追加するのに必要です。

パス名は、Enterprise Manager/DbaMgr2k または Server Management Studio を使用して、以下の手順で確認することができます。

 - ▶ 対応するツールを起動し、インストール済みの SQL Server 2005/SQL Server 2005 Express または SQL Server 2000/MSDE のインスタンスに接続します。
 - ▶ データベース「*ServerViewDB*」を選択します。
 - ▶ 右クリックメニューから「プロパティ」を選択します。パス名は、「データファイル」または「トランザクションログ」タブの「場所」欄 (Enterprise Manager/DbaMgr2k の場合)、または「ファイル」を選択後、「パス」欄 (SQL Server Management Studio の場合) に表示されます。

パス名は、**osql**（または **sqlcmd**）を使用して以下のように確認することもできます。

- ▶ コマンドプロンプトを開き、以下のコマンドを入力します。

```
osql -S <インスタンス名> -E  
EXEC sp_helpfile  
GO
```

「filename」欄にパスの詳細が表示されています。*quit* コマンドで **osql** を終了します。

アップグレードの前にしておくこと

- ▶ 既存の SQL Server インスタンスにおいて、「ServerViewDB」データベースのバックアップを行い、バックアップデータを最新にします。
- ▶ 該当の SQL Server インスタンスにアクセスするアプリケーションをすべて終了します。
- ▶ すべての従属するサービス、特に「ServerView Services」と「ServerView Download Service」を終了します。
- ▶ SQL Server の新規バージョンのインストールに必要なソフトウェアをインストールします。

アップグレードの実行

- 既存の SQL Server 2005/SQL Server 2005 Express または SQL Server 2000/MSDE のインスタンスから ServerView データベースをデタッチします。

ServerView データベースのデタッチは、SQL サーバ管理ツール（SQL Server Enterprise Manager、DbaMgr2k、または SQL Server Management Studio）を使用するか、または **osql** でコマンドプロンプトから SQL Server のプロシージャを直接呼び出すことにより行えます。

管理ツールを使用する場合、データベースのデタッチ方法は、ご使用のツールのオンラインヘルプを参照してください。

コマンドプロンプトを使用する場合の手順は以下のとおりです。

- ▶ コマンドプロンプトを開き、以下のコマンドを入力します。

```
osql -S <インスタンス名> -E  
EXEC sp_detach_db @dbname='ServerViewDB'  
GO
```

quit コマンドで **osql** を終了します。

- デタッチでは、データベースは **SQL Server** から削除されるのではなく、その保存場所に残ります。ファイルはそのまま残しても、他のディレクトリにコピーしても構いません。データベースをアタッチする際、最新のパス名を新しいインスタンスに指定する必要があります。
- **SQL Server** インスタンスの名前を変えない場合は、ここで既存の **SQL Server** インスタンスをアンインストールしてください。
- 新しい **SQL Server** インスタンス（**SQL Server 2008/2005** または **SQL Server 2008/2005 Express**）をインストールします。
 - ▶ **SQL Server Express Edition** の場合、ダウンロードセンターからダウンロードしたファイルからインストールします。
 - ▶ **SQL Server** の他のエディションの場合、インストールメディア（**SQL Server 2008 DVD**）から直接インストールします。
- インスタンス名を変えない場合、旧の **SQL Server** インスタンスをアンインストールしたら、同じタイプ（既定インスタンスまたは名前付きインスタンス）と同じ名前（名前つきインスタンス）で、例えば **SQL Server Express** エディションには「**SQLSERVERVIEW**」でインストールします。
- **SQL Server 2005 Express** をインストールする場合

SQL Server 2005 Express をインストールする場合は、以下の点に注意してください。

「登録情報」画面で、「詳細構成オプションを非表示にする」を無効にします。無効にしない場合、インストール時にインスタンス名を既定の名前「**SQLEXPRESS**」以外の名前に割り当てることができなくなります。

- データベースを以下の手順でアタッチします。
 - ▶ **SQL Server Management Studio** を開き、新しいインスタンスに接続します。
 - ▶ 「新しいクエリ」を選択し、以下のコマンドを「クエリ」画面に入力します。このウィンドウでは、<data_path> はご使用のシステムの **ServerView** データベースファイルのパス名です。

```
CREATE DATABASE ServerViewDB
ON PRIMARY (FILENAME='<data_path>\ServerViewDB.mdf')
LOG ON (FILENAME='<data_path>\ServerViewDB_log.LDF')
FOR ATTACH
```

- アタッチしたら以下のコマンドを実行し、整合性を確認してアップデートします。
DBCC UPDATEUSAGE('ServerViewDB')
- **Operations Manager** に対するリモートの **SQL Server** として **SQL Server** を使用している場合、[59 ページの「リモートの SQL Server の設定」](#) の項での説明に従ってユーザアカウントをセットアップします。管理用サーバでは、*Domain* および *Username* にある %windir%\ServerViewDB.ini ファイルでユーザアカウントを確認します。
- **SQL Server 2008** を使用している場合、承認された **SQL 管理者** として登録されている *ServerView Services* および *ServerView Download Service* でユーザアカウントをセットアップします。[46 ページの「SQL サーバ管理者権限を持つユーザアカウントの追加」](#) の項をご覧ください。

アップグレード後にすること

インスタンスの **side-by-side** アップグレード後には、すべてのバージョンの **SQL Server** について以下の手順を実行する必要があります。

- i** **Operations Manager** に対するリモートの **SQL Server** として **SQL Server** を使用している場合は、%windir%\ServerViewDB.ini ファイルの *Domain* および *Username* 項目に定義されているユーザでログオンし、管理端末で追加の操作を確認してください。
- ▶ **SQL Server 2005 Express Edition** の場合、アップグレードを続ける前に「タスクスケジューラ」が起動したかどうか確認します。
 - ▶ **SQL Server** の他のエディションの場合、「**SQL Server Agent <instance_name>**」サービスが起動したかどうか確認します。

- ▶ Operations Manager を再起動する前に、Operations Manager の内部バックアップジョブをここで再度セットアップします。
そのためには、コマンドプロンプトを開きます。
 - ▶ ディレクトリ <インストールパス>\\$ServerView Services\\$scripts\\$ServerView\\$Tools に切り替えます。
 - ▶ このディレクトリにある以下のファイルを実行します。
 - For SQL Server 2008: *SVCreateJobs_Upgrade2008*
 - For SQL Server 2005: *SVCreateJobs_Upgrade2005*
 - ▶ Renamed SQL Server Instance [Y/N] ? のメッセージに次のいずれを指定します。
 - 「N」: 新しい SQL Server インスタンスが同じ名前でインストールされた場合。
 - 「Y」: 新しいインスタンスが別の名前でインストールされた場合。
新しい名前を以下のプロンプトに入力します。
Please enter new SQL Server Instance Name
- ▶ Operations Manager のセットアップに必要なアップグレード手順はこのアプリケーションの実行中に実行され、ログファイル <DbApplicationFolder>\\$SVCreateJobs_Upgrade2008.log または <DbApplicationFolder>\\$SVCreateJobs_Upgrade2005.log に記録されます。
「DbApplicationFolder」パラメータの内容は設定ファイル *ServerViewDB.ini* で確認することができます。
- ▶ 正常に実行されたら、「ServerView Services」と「ServerView Download Service」のサービスを開始します。
- ▶ ServerView データベースのバックアップジョブが適切にセットアップされ、ご使用のシステムで実行できるかどうか確認します。
 - SQL Server Express エディションでは、ジョブは Windows のタスクスケジューラによってセットアップされます。ジョブとスケジュールは該当の Windows のユーザインターフェイスで確認することができます。
 - ▶ 「コントロールパネル」→「タスクスケジューラ」の順に開いて、ジョブとスケジュールのリストを確認してください。
 - SQL Server の他のすべてのエディションでは、サービスの SQL Server Agent がジョブのセットアップに使用されます。ジョブとスケジュールは SQL Server Management Studio で確認することができます。

- ▶ SQL Server Management Studio を起動します。
- ▶ SQL Server インスタンスをクリックし、「SQL Server エージェント」を選択します。
- ▶ 「ジョブ」の下にセットアップ済みのジョブが表示されます。各ジョブの最新スケジュールは、右クリックメニューの「スケジュールの管理」で確認できます。

3.10.2 SQL Server 2008 Express から SQL Server 2008 へのアップグレード

SQL Server 2008 Express インスタンスを SQL Server 2008 のフルバージョンにアップグレードインストールすることができます。ServerView データベースが最大容量 (SQL Server 2008 Express では 4 GB) に達した場合や、SQL Server 2008 Express には含まれていない SQL Server 2008 のフルバージョンの追加機能やコンポーネントをご自身の環境で使用する場合は、アップグレードが必要になります。

インストールの準備

アップグレードインストールを行う前に以下の準備を行ってください。

- SQL Server 2008 のインストール中、ハードウェアとソフトウェアの要件が確認されます。この件については、Microsoft の Web サイトを参照してください。
- SQL Server 2008 のどのエディションのアップデートを Microsoft がサポートしているかについて、SQL Server 2008 のオンラインドキュメントを参照してください。
- 特定の機能やコンポーネントが必要な場合、アップグレードしようとしているエディションに機能やコンポーネントが入っているか、確認します。

アップグレードについては以下の点に注意してください。

- SQL Server 2008 Express のローカライズ版は、SQL Server 2008 の同じ言語のローカライズ版または英語版にアップグレードすることができます。
- 常に最新のサービスパックをインストールすることをお勧めします。アップグレード後には必ず最新のアップデートがないか確認し、あればインストールしてください。

- SQL Server Management Studio の別のエディションは *side-by-side* にインストールできないため、SQL Server Management Studio (Basic) がインストールされている場合は、アンインストールしてから新しいエディションにあわせて再インストールする必要があります。

アップグレード前にしておくこと

- ▶ インストール済みインスタンスのデータベースをバックアップします。
- ▶ 該当の SQL Server 2008 Express インスタンスにアクセスするすべてのアプリケーションを終了します。
- ▶ 「ServerView Services」と「ServerView Download Service」を停止します。

アップグレードの実行

アップグレードは SQL Server 2008 Setup をインストール DVD から実行して行います。

- ▶ アップグレードするエディションの **Setup** を起動します。
- ▶ 左側のウィンドウで「メンテナンス」を選択し、「エディションのアップグレード」を選択します。
エディションをアップグレードするためのインストールウィザードが開きます。
- ▶ 「インスタンスの選択」画面で、アップグレードしたいインスタンスを選択します。Operations Manager が名前付き SQL Server Express 2008 インスタンスに使用するインスタンス名は「SQLSERVIEWVIEW」です。
- ▶ プログラムがエディションのアップグレードが可能かどうか確認し、「エディションのアップグレードの準備完了」画面で再確認のメッセージが表示された後、アップグレードが実行されます。

アップグレードが成功すると、「完了」画面が表示されます。

アップグレード後の操作

- ▶ 新しいエディションに対する未処理のサービスパック、サービスパックのアップデートやホットフィックスアップデートをインストールします。
- ▶ 「SQL Server (<インスタンス名>)」サービスが起動したかどうか確認します。
- ▶ 「SQL Agent (<インスタンス名>)」サービスが起動したかどうか確認します。

ServerView サービスと **Operations Manager** を再起動する前に、**ServerView** データベースの内部バックアップとメンテナンスジョブを再作成してください。手順は以下のとおりです。

- ▶ コマンドプロンプトを開きます。
 - ▶ ディレクトリ <インストールパス>\\$ServerView\ServerView\Services\\$scripts\\$ServerView\\$Tools に切り替えます。
 - ▶ このディレクトリにあるファイル *SVCreateJobs_Upgrade2008* を実行します。実行中、「Renamed SQL Server Instance [Y/N] ?」のメッセージに「N」を入力します。
- すべての必要なアップグレード手順はこのバッチファイルから実行され、ログファイル <DbApplicationFolder>\\$*SVCreateJobs_Upgrade2008.log* に記録されます。

- <DbApplicationFolder> のパスは設定ファイル *ServerViewDB.ini* で確認してください。
- ▶ ファイルの実行が成功したら、サービスの「**ServerView Services**」と「**ServerView Download Service**」を開始します。
 - ▶ 次に、必ず、**ServerView** データベースのバックアップジョブがシステムにセットアップされ、実行できるかどうか確認します。これらのジョブは、「**SQL Server Agent**」サービスを使用してセットアップされます。

ジョブは **SQL Server Management Studio** から確認できます。

- ▶ **SQL Server Management Studio** を起動します。
- ▶ **SQL Server** インスタンスをクリックし、「**SQL Server エージェント**」を選択します。
- ▶ 「ジョブ」の下にセットアップ済みのジョブが表示されます。各ジョブの最新スケジュールは、右クリックメニューの「**スケジュールの管理**」で確認できます。

3.10.3 SQL Server 2005 Express から SQL Server 2005 へのアップグレード

SQL Server 2005 Express インスタンスを SQL Server 2005 のフルバージョンにアップグレードすることができます。MSDE 2000 とは違って、SQL Server 2005 Express には並列読み込みが増加した場合の一般的なワーカーロードの制限はありません。

例えば ServerView データベースが最大サイズ (SQL Server 2005 Express で 4 GB) に達した場合や、SQL Server 2005 の機能やコンポーネントで SQL Server 2005 Express には含まれていないものを追加して使用したい場合はアップグレードが必要になります。

インストールの準備

アップグレードインストールを行う前に以下の準備をしてください。

- SQL Server 2005 のアップグレードインストール中、ハードウェアとソフトウェアの要件が確認されます。詳細は Microsoft の Web サイトを参照してください。
- Microsoft がサポートしているアップグレードの SQL Server 2005 エディションについて、SQL Server 2005 のオンラインドキュメントで確認します。
- 特定の機能やコンポーネントが必要な場合、アップグレード対象エディションに機能やコンポーネントが入っているかを確認します。

アップグレードについては以下の点に注意してください。

- SQL Server 2005 Express のローカライズ版は、SQL Server 2005 の同じ言語のローカライズ版または英語版にアップグレードすることができます。
- アップグレード中、アップグレードするエディションのバージョン状態と、新しくインストールされるエディションのバージョン状態が確認されます。

最新のサービスパック付き SQL Server 2005 Express がインストールされている場合、すでにアップグレード対象の SQL Server 2005 エディションの基本インストールよりも最新のバージョンになっています。

上記のような原因により、セットアップ中に警告が発生したりアップグレードが中断したりしないように、新しい SQL Server 2005 のエディションのインストールは、追加の呼び出しパラメータを用いてコマンドプロンプトから行ってください。[82 ページの "アップグレードの実行"](#)を参照してください。

- 常に最新のサービスパックを使用することをお勧めします。アップグレード後は、すべての最新サービスパック、サービスパックのアップデートやホットフィックスアップデートを、アップグレード済みのエディションに再度インストールしてください。
- SQL Server Management Studio Express がすでにシステムにインストールされている場合で、今回 SQL Server 2005 の上位エディションとともに SQL Server Management Studio のフルバージョンをインストールしたい場合、SQL Server Management Studio Express をアンインストールしてからインストールしてください。SQL Server Management Studio Express と SQL Server Management Studio の side-by-side インストールはできません。

アップグレード前にしておくこと

- インストール済みインスタンスのデータベースをバックアップします。
- 該当の SQL Server 2005 Express インスタンスにアクセスするすべてのアプリケーションを終了します。
- 「ServerView Services」と「ServerView Download Service」を停止します。

アップグレードの実行

SQL Server 2005 Express のインスタンスのアップグレードは、すべてのデータベースを伴うインスタンス全体の「インプレース」アップグレードとして直接行うことができます。

このアップグレードは、インストール DVD から SQL Server 2005 Setup を実行して行います。手順は新規のインストールとほぼ同じですが、以下の点が異なります。

- コマンドプロンプトを開き、インストールメディア内で、インストールされるエディション用の *setup.exe* ファイルのあるフォルダまで進みます。
コマンドプロンプトでパラメータ 「SKUUPGRADE=1」 を用いてインストールを開始します。

例

```
< ドライブ >:\< フォルダ >\setup.exe SKUUPGRADE=1
```

- 「インストールするコンポーネント」画面で、少なくともコンポーネントの「SQL Server データベースサービス」を選択します。SQL Server 2005 Express に含まれていない追加のコンポーネントを選択することができます。

- ▶ 「インスタンス名」画面で、アップグレードする SQL Server 2005 Express インスタンスを選択します。名前を直接入力することも、「インストール済みのインスタンス」をクリックして表示されたリストから選択することもできます。
- ▶ インストール済みのコンポーネントが「既存のコンポーネント」画面に表示されます。コンポーネント名のチェックボックスが選択可能であれば、そのアップグレードが可能です。チェックボックスを選択してアップグレードを続行します。
チェックボックスが選択できない場合は、「詳細表示」をクリックするとエラーメッセージが表示され、アップグレードが不可能な理由を確認できます。

アップグレード後の操作

- ▶ 新しいエディションに対する未処理のサービスパック、サービスパックのアップデートやホットフィックスアップデートをインストールします。
- ▶ 「**MSSQL\$SQLSERVIEW**」サービスが開始されたかどうか確認します。
- ▶ 「**SQLAgent\$SQLSERVIEW**」サービスが開始されたかどうか確認します。

Operations Manager を再起動する前に、Operations Manager の内部パックアップとメンテナンスジョブを再作成してください。手順は以下のとおりです。

- ▶ コマンドプロンプトを開きます。
- ▶ ディレクトリ <インストールパス>\ServerView
Services\scripts\ServerView\Tools に切り替えます。
- ▶ このディレクトリにあるファイル *SVCreatJobs_Upgrade2005* を実行します。

Operations Manager のすべての必要なアップグレード手順はこのバッチファイルから実行され、ログファイル
<DbApplicationFolder>\SVCreatJobs_Upgrade2005.log に記録されます。

DbApplicationFolder のパスは、設定ファイル *ServerViewDB.ini* で確認してください。

- ▶ ファイルの実行が成功したら、サービスの「**ServerView Download Service**」と「**ServerView Services**」を開始します。
- ▶ 次に、必ず、**ServerView** データベースのバックアップジョブがセットアップされ、実行できるかどうか確認します。

ジョブは **SQL Server Management Studio** から確認できます。

- ▶ **SQL Server Management Studio** を起動します。
- ▶ **SQL Server** インスタンスをクリックし、「**SQL Server エージェント**」を選択します。
- ▶ 「**ジョブ**」の下にセットアップ済みのジョブが表示されます。各ジョブの最新スケジュールは、右クリックメニューの「**スケジュールの管理**」で確認できます。

3.10.4 MSDE 2000 から SQL Server 2000 へのアップグレード

MSDE 2000 Service Pack 4 (バージョン 8.00.2039) から SQL Server 2000 Standard Edition Service Pack 4 にアップグレードインストールすることができます。例えば、ServerView データベースが 2 GB に達した場合や、「推奨される構成の監視対象サーバは 200 以上」に達した場合にはアップグレードが必要になります。SQL Server 2000 Enterprise Edition が必要な場合は、SQL Server 2000 Standard Edition Service Pack 4 から SQL Server 2000 Enterprise Edition Service Pack 4 へのアップグレードインストールが行えます。

MSDE データベースの容量に関する問題については、[143 ページの「MSDE/SQL Server Express - データベースの制限」](#) の項の項も参照してください。サーバの使用状況に関して以下の問題に気付いた場合は、負荷分散を変更することもできます。[149 ページの「負荷分散の変更」](#) の項の項を参照してください。サーバの使用状況は、次の 2 つの方法で確認できます。

1. イベントビューアを使用

- ▶ イベントビューアを「スタート」→「管理ツール」→「イベントビューア」の順に選択して開きます。
- ▶ イベントビューアでアプリケーションログを選択します。
- ▶ 「イベント」欄の見出しをクリックし、リストをソートして 3629 番のログが output されているかどうかを確認します。このイベントが頻発する場合は、負荷設定を変更してください。

2. ログファイルを使用

- ▶ Enterprise Manager または DbaMgr2K を起動します。
- ▶ SQL Server インスタンスをクリックします。
- ▶ 「メンテナンス」→「SQL Server ログ」の順に選択します。
- ▶ 表示されたログファイルで以下のメッセージが出力されているかどうか確認します。

This SQL Server has been optimized for 8 concurrent queries. This limit has been exceeded by <x> queries and performance may be adversely affected.

このメッセージが頻発する場合は、負荷設定を変更してください。



ログファイルは、「LOG」ディレクトリの下のインストールディレクトリにもあります。

アップグレードの実行

アップグレードインストールの前に製品のバージョンを確認してください。

i バージョン 8.00.2039 からのアップグレードインストールのみ可能です。

インストール済みの **MSDE 2000** のバージョンと言語は、コマンドプロンプトから以下のコマンドで確認することができます。

```
osql -S <SQL Server instance> -E  
xp_msver  
GO
```

情報は「2 ProductVersion」と「3 Language」の下に表示されます。製品のバージョンは 8.00.2039 でなければなりません。また、**MSDE 2000** と同じ言語版の **SQL Server 2000** をインストールしてください。

アップグレードインストールの手順は以下のとおりです。

- ▶ サービスの「**MSSQL\$SQLSERVERVIEW**」、「**MSSQLSERVER**」、「**SQLAgent\$SQLSERVERVIEW**」、「**SQLSERVERAGENT**」、「**ServerView Services**」、または「**ServerView Download Service**」を停止します。
 - ▶ 「スタート」→「管理ツール」→「サービス」の順に選択します。
 - ▶ 該当サービスを選択し、さらに右クリックメニューから「停止」を選択します。
- ▶ サービスのスタートタイプを「手動」に変更します。
 - ▶ 該当サービスを選択し、さらに右クリックメニューから「プロパティ」を選択します。
 - ▶ 「スタートアップの種類」の下のリストで「手動」を選択します。
- ▶ **SQL Server 2000** の基本インストール
 - インストールでは以下を指定します。
 - インストール種別の選択：
アップグレード、削除、または **SQL Server** の既存インスタンスへのコンポーネントの追加を行います。
 - インスタンス名：
インスタンス名「**SQLSERVERVIEW**」がすでに入力されています。

- 既存のインストール：
既存のインストールをアップグレードします。
- セットアップ：
以下のメッセージで「yes」を入力します。
Do you want to install additional components ?
- コンポーネントの選択：
「サーバーコンポーネント」、「管理ツール」、および「クライアント接続」を選択します。

▶ **SQL Server 2000 Service Pack 4 のインストール**

SQL Server 2000 の基本インストール後、適切な言語の SQL Server 2000 Service Pack 4 をインストールしてください。

Operations Manager バージョン 4.80 以降を使用する場合のアップグレード
後にすること

- ▶ 「MSSQL\$SQLSERVIEW」サービスが開始されたかどうか確認します。
- ▶ 「SQLAgent\$SQLSERVIEW」サービスが開始されたかどうか確認します。

Operations Manager を再起動する前に、Operations Manager の内部バックアップジョブを再作成してください。手順は以下のとおりです。

- ▶ コマンドプロンプトを開きます。
- ▶ ディレクトリ <インストールパス>\\$ServerView
Services\scripts\\$ServerView\\$Tools に切り替えます。
- ▶ このディレクトリにある *SVCreateJobs_Upgrade2000* を実行します。

Operations Manager のすべての必要なアップグレード手順はこのバッチファイルから実行されます。個々のステップはログファイル <DbApplicationFolder>\\$VCreateJobs_Upgrade2000.log にも記録されます。

DbApplicationFolder のパスは、設定ファイル *ServerViewDB.ini* で確認してください。

- ▶ ファイルの実行が成功したら、サービスの「**ServerView Download Service**」と「**ServerView Services**」を開始します。
- ▶ 次に、必ず、**ServerView** データベースのバックアップジョブがセットアップされ、実行できるかどうか確認します。

ジョブは SQL Server Enterprise Manager から確認できます。

- ▶ SQL Server Enterprise Manager を起動します。
- ▶ 「SQL Server グループ」 → 「インスタンス名」 → 「管理」 → 「SQL Server エージェント」を選択します。
- ▶ 「ジョブ」の下にセットアップ済みのジョブが表示されます。

3.11 Operations Manager の Windows ターミナルサーバへのインストール

ターミナルサービス（Windows ターミナルサーバとも呼ぶ）がインストールされている場合、Operations Manager をインストールするには特別なインストール手順が必要です。

Windows ターミナルサーバへのインストール

1. Windows 2008 では、「スタート」→「管理ツール」→「サーバマネージャ」→「役割」の順にクリックします。ターミナルサービスが表示された場合は「ターミナルサーバ」がインストールされています。

Windows 2003 では、「スタート」→「プログラム」→「コントロールパネル」→「サーバの役割管理」の順にクリックします。「ターミナルサーバ」が「このサーバーには次の役割が構成されています」の下に表示されていればターミナルサーバがインストールされています。

2. Operations Manager インストールプログラムのパスを確認します。

- ▶ ServerView Suite DVD 1 をセットします。
- ▶ *serverview.EXE* を検索します。
- ▶ *serverview.EXE* のパスを記録します。

3. Operations Manager をコマンドプロンプトウィンドウからインストールします。

- ▶ コマンドプロンプトウィンドウを開き、以下のように入力します。

```
Change user /install
```

- ▶ 同じコマンドプロンプトウィンドウで *serverview.EXE* へのパスを入力し、Operations Manager をインストールします。
- ▶ インストール後、コマンドプロンプトウィンドウで以下のように入力します。

```
Change user /execute
```

Operations Manager とターミナルサーバの全般的な手順

Operations Manager をインストールする前にターミナルサーバをインストールすることをお勧めします。その後 Operations Manager を前記のようにインストールします。

ターミナルサーバが Operations Manager よりも後でインストールされた場合、Operations Manager が正常に稼動しているかどうか確認してください。Operations Manager に関する何らかのエラーメッセージが表示された場合は、Operations Manager をアンインストールし、前記の手順を実行します。

リモートの SQL Server を伴うターミナルサーバへの Operations Manager のインストールはサポートしていません。

リモートの SQL Server が使用されている場合は、前記のインストールモードは適用されません。

3.12 Operations Manager ソフトウェアの GUI ダイアログ形式インストール

Operations Manager ソフトウェア (Operations Manager とイベントマネージャ) は、Windows (Windows Server 2003 または Windows Server 2008) のメニューントロールに従ってインストールすることができます。

ServerView Suite DVD 1 には、「SVSLocalTools」→「Japanese」→「Svmanage」→「WinSVOM」の下に *serverview.EXE* ファイルがあり、これによりインストールを開始します。Microsoft のインストーラがコンピュータにインストールされていない場合はここでインストールされます。

日本語 OS 上の Operations Manager のインストールおよびアプリケーション言語は、デフォルトでは日本語です。 その他のすべての OS 言語の場合、インストールおよびアプリケーション言語は英語です。 コマンドラインによるインストールでは、ユーザが言語を決定できます。 [159 ページの「コマンドラインによる Operations Manager のインストール」](#) の項を参照してください。

インストール手順

- ▶ 管理者権限のあるユーザとしてログオンするか、または、リモートの SQL サーバのインスタンスを使用している場合には、管理者権限のあるドメインユーザとしてログオンします。
- ▶ ServerView Suite DVD 1 を DVD-ROM ドライブにセットします。CD が自動的にスタートしない場合、DVD のルートディレクトリの *start.html* ファイルをクリックします。
- ▶ オプションの「ServerView Software Products」にチェックを入れます。
- ▶ 「開始」をクリックします。
- ▶ 表示されたウィンドウで、言語を選択します。
- ▶ 「Japan Local Tools」→「ServerView Operations Manager」の順に選択します。
- ▶ 「ServerView Operations Manager Application」の配下で、ServerView Operations Manager をクリックします。インストーラが格納されているフォルダにリンクしています。
- ▶ *serverview.exe* プログラムを開始します。

インストールは対話なし（サイレント）で行うこともできます。サイレントインストールについての詳細は [159 ページの「コマンドラインによる Operations Manager のインストール」](#) の項を参照してください。

- ▶ プログラムが起動すると以下のウィンドウが表示されます。



図 2: Operations Manager インストールウィザード - SQL Server の選択

MSDE 2000 (Service Pack 4 付き) または SQL Server 2005 Express がそれぞれ SQL Server インスタンス「SQLSERVERVIEW」として、あるいは、任意のインスタンスの SQL Server 2000 (Service Pack 4 付き) または SQL Server 2005 がご使用のシステムにインストール済みかどうか確認します。

- 一致する SQL Server インスタンスがない場合、オプションの「新規に SQL Server をインストールする」を選択して MSDE 2000 または SQL Server 2005 Express (Windows Server 2008 の場合) をインストールできます。

次に「次へ」をクリックします。

自動的にインストールされた MSDE または SQL Server 2005 Express のインスタンスにおいては、ServerView データベースはローカルの管理用サーバにインストールされます。Windows Server 2003 では、システムを再起動するように要求されます。再起動すると Operations Manager インストールウィザードが自動的に起動します。

- 一致する SQL Server インスタンスがローカルの管理用サーバにある場合、ローカルの SQL Server インスタンスを使用できます。オプションの「インストール済の SQL Server を使う」を選択し、「次へ」をクリックします。Operations Manager のスタートページに戻ります。
- リモートにインストールされた SQL Server インスタンスを使用することもできます。オプションの「別サーバの SQL Server にリモート接続する ...」を選択し、「次へ」をクリックします。「リモート DB」ウィンドウが開きます。



図 3: Operations Manager インストール ウィザード - リモート DB

SQL Server 名

SQL Server のインスタンス名 (SQL Server のデフォルトのインスタンスではシステム名となります)

ユーザ名

SQL Server のドメインアカウントに設定したユーザ名 ([46 ページの「SQL サーバ管理者権限を持つユーザアカウントの追加」の項](#)参照)

ドメイン名

ドメインの名前

パスワード

ユーザ名にアクセスするパスワード

それぞれ入力し、「次へ」をクリックします。

詳細は [35 ページの「別のシステムへのリモートのインストール」](#) の項を参照してください。

- ▶ Operations Manager インストールウィザードが開きます。
- ▶ 「次へ」をクリックすると、使用許諾やインストールについての情報などに関するウィンドウが開きます。
- ▶ インストールディレクトリの指定



図 4: Operations Manager インストールウィザード - インストールディレクトリの選択

デフォルトでは、ソフトウェアはディレクトリ

`C:\Program Files(x86)\Fujitsu\ServerView Suite` にインストールされます。

- ▶ ServerView データベースに接続する SQL Server のインスタンス名（34 ページ参照）を選択します。

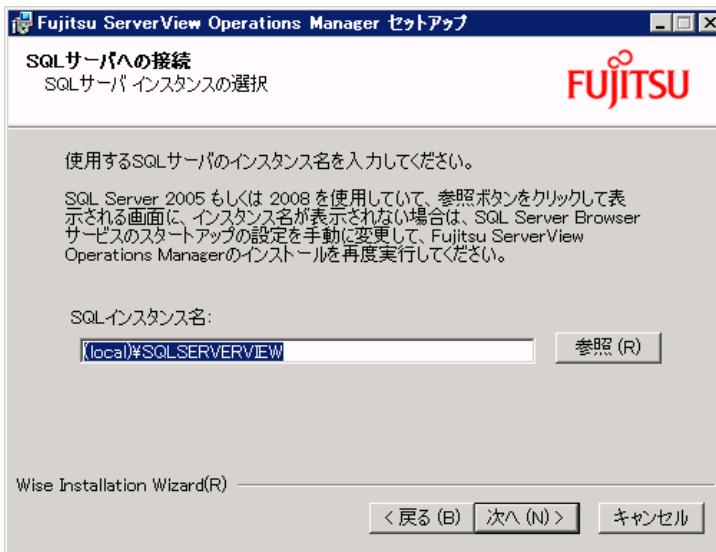


図 5: Operations Manager インストール ウィザード - SQL Server インスタンスの選択

3 管理端末へのインストール

- ▶ SQL サーバーデータベースバックアップの設定を選択します。[118 ページ](#) の「[ServerView データベースのバックアップ](#)」の項も参考にご覧ください。



図 6: Operations Manager インストールウィザード - SQL Server バックアップのパス

標準

管理用サーバが動作しない時がある場合は、バックアップモードを「標準」のままにしておきます。

「標準」は SQL Server リカバリモデルの「シンプル」に相当します。

完全

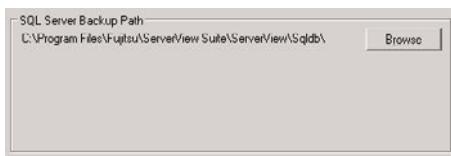
Operations Manager を使用して多数の重要な監視機能を実行し、管理用サーバがほぼ常に動作している場合は、「完全」を選択します。

「完全」は、SQL Server リカバリモデルの「フル」に相当します。

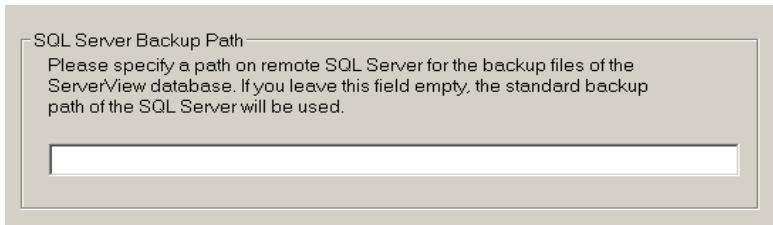
「参照 (B)」ボタン

新規インストール時に、SQL Server のバックアップファイルが作成されるパスを「SQL サーババックアップパス」で追加指定できます。[131 ページ](#) の「[ServerView データベースのリストア](#)」の項に記載されているように、ServerView データベースをリストアする必要がある場合はバックアップファイルを使用できます。

ローカルにインストールされた SQL Server インスタンスを使用している場合は、以下が表示されます。



リモートにインストールされた SQL Server インスタンスを使用している場合は、以下が表示されます。



- ▶ JBoss サービスのユーザアカウントを入力します。

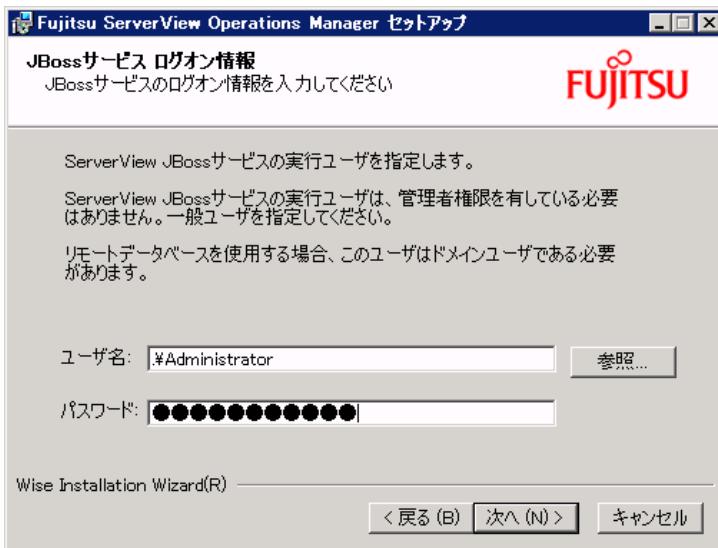


図 7: Operations Manager インストールウィザード - JBoss サービス ログオン情報

ユーザ名

このユーザ名には、特別な権限を持たない標準のユーザアカウントを設定する必要があります。このユーザ名を入力します。

リモート SQL サーバインスタンスを使用する場合は、このフィールドは、「リモート DB」ウィンドウの「ドメイン名」で指定したドメイン名で事前定義されます。特別な権限を持たないドメインユーザアカウントを使用することができます。

パスワード

ユーザ名にアクセスするためのパスワード。

- ▶ ディレクトリサーバを選択します。



図 8: Operations Manager インストールウィザード - ディレクトリサーバの選択

OpenDS をインストールする (O)

ディレクトリサーバ OpenDS を使用する場合は、このオプションを有効にします。OpenDS は、ServerView Operations Manager をインストールすると自動的にインストールされます。

既存のディレクトリサービスを使用する (E)

既存のディレクトリサーバを使用する場合は、このオプションを有効にします。 次に、ディレクトリサービスの設定をいくつか行う必要があります。

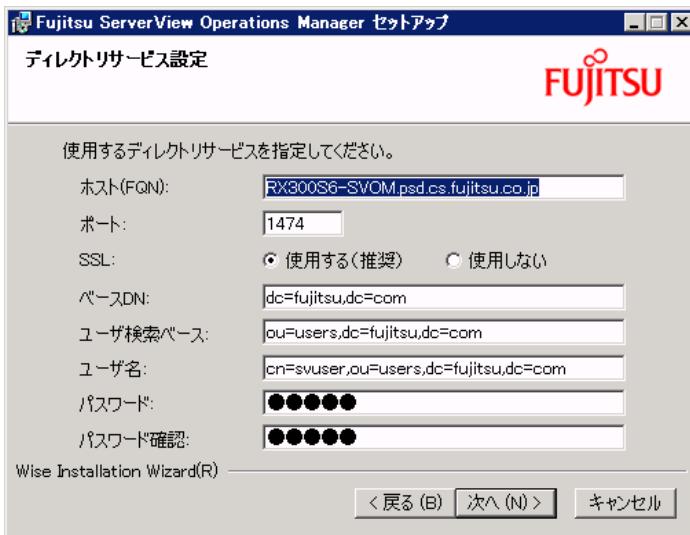


図 9: Operations Manager インストール ウィザード - ディレクトリ サービスの設定

ホスト (FQN)

ディレクトリサービスが動作しているサーバの完全修飾名。完全修飾名とは、ネットワークにおいてシステムを指定する明確な名前です。この名前を常に適切に解決することが重要です。これは、DNS または NIS サーバを使用するか、管理端末のホストファイルに適切な入力を行うことにより行うことができます。適切な名前の解決を提供できるかどうか分からぬ場合は、ここでシステムの IP アドレスを発行できます。

ポート

ディレクトリサービスにアクセスするために使用されるポート番号。デフォルトでは、ポート 636 が使用されます。

SSL

データ転送を保護するために、デフォルトでは「はい」が有効です。

パスワードは SSL を使用して交換されるので、SSL を使用せずにディレクトリサービスを使用することは適切ではありません。

ベース DN

ベースドメイン名 (*DC=fujitsu*、*DC=com* など)。

検索ベース

ディレクトリサーバ内のユーザ検索の開始点。

ユーザ (読み取り専用アカウント)

データへの読み取りアクセスのユーザ ID。このユーザ ID は、
基本的な読み取り権のみを持っている必要があります。

このパスワードはテキストファイルに保存されるので、簡単
な読み取りアクセス権を持つユーザのみ選択してください。

パスワード / パスワード確認

読み取りアクセスのパスワード。

- ▶ インストールタイプを指定します。



図 10: Operations Manager インストールウィザード - インストールタイプの選択

「カスタム (U)」を選択すると、Operations Manager インストールウィ
ザードに従ってインストールする個々の Operations Manager 製品を選択
することができます。

3 管理端末へのインストール

- インストールタイプ「カスタム」を選択すると下記の「インストール機能」ウィンドウが表示されます。インストールしたい管理製品を選択します。「完全(C)」ではすべてを選択します。どの ServerView コンポーネントがインストールされているかについては、22 ページの「ServerView Operations Manager のコンポーネント」の項を参照してください。

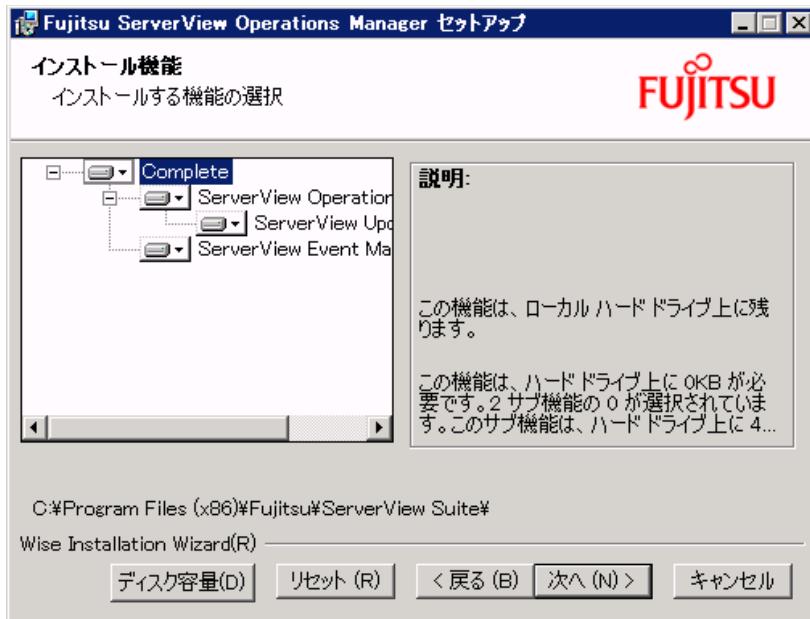


図 11: Operations Manager インストール ウィザード - 機能の選択

- ▶ ダウンロードサービスを利用するユーザのパスワードを入力します。



図 12: Operations Manager インストールウィザード - ダウンロードマネージャのログイン情報

- 「コンピュータの詳細」 ウィンドウは、コンピュータについての情報（コンピュータの名前、IP アドレス、SNMP コミュニティ）を表示します。



図 13: Operations Manager インストールウィザード - コンピュータの詳細

コンピュータ

中央管理用サーバの名前。

DNS サフィックス

JBoss の設定に使用される DNS サフィックス。

IP アドレス

管理用サーバの IP アドレス。この管理用サーバが複数の IP アドレスを持っていている場合は、WWW サーバが使用する IP アドレスを入力します。

SNMP コミュニティ

管理用サーバのコミュニティ。これは、トラップを受信するために重要です。

オプションの「Server View サービスを開始する際に、自動的に IP アドレスの変更をチェックする」を選択すると、「ServerView サービス」がスタートアップ時にコンピュータの IP アドレスを確認します。IP アドレスが変更されている場合、自動的に変更された内容を取得します（例：Web ユーザインターフェイスの URL）。

- ▶ 連携を行う統合管理システムを選択します。

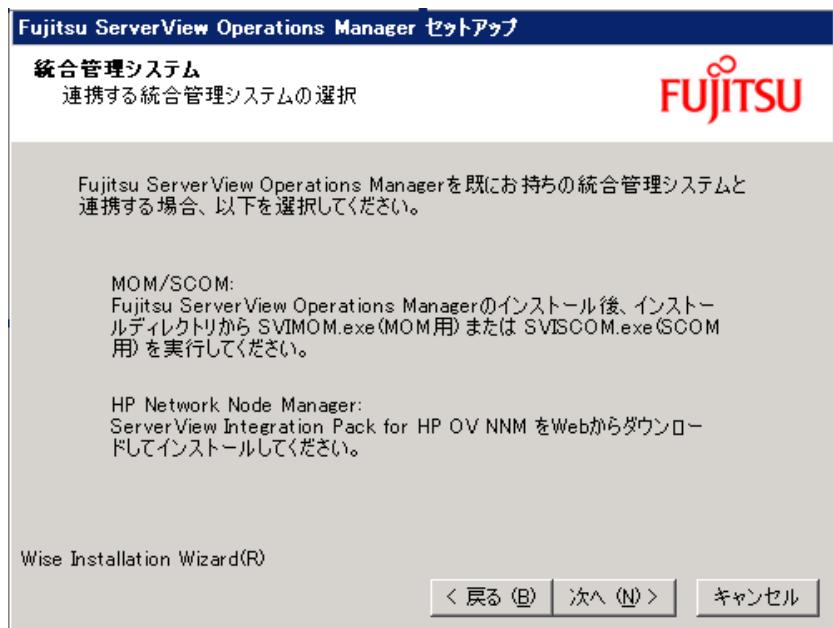


図 14: Operations Manager インストールウィザード - 統合

このウィンドウは、管理用サーバに統合管理ソフトウェアが見つかった場合のみ表示されます。



統合管理システムが選択可能な状態になるためには、対応する管理システムが管理用サーバにインストールされている必要があります。

統合についての詳細は、対応する **ServerView Integration** ガイドに記載されています。

3 管理端末へのインストール

- ▶ インストールを開始します。



図 15: Operations Manager インストールウィザード - アプリケーションのインストール準備をする

「インストール (I)>」をクリックするとインストールを開始します。必要であれば、「戻る」をクリックするとインストール内容を訂正することができます。「キャンセル」をクリックすると、何も変更せずに Operations Manager インストールウィザードが終了します。

Operations Manager インストールウィザードの最後のウィンドウには終了の情報が表示されます。「終了」をクリックしてインストールを完了します。

i ServerView 関連のファイルを編集 / 追加 / 削除すると、動作に影響を及ぼす可能性があります。このマニュアルに記載されている操作以外のいかなる操作も絶対に行わないでください。

3.13 他の Operations Manager ソフトウェアのインストール

インストールされていない Operations Manager ソフトウェアは、あとからインストールすることができます。インストールが始まると、以下のウィンドウが表示されます。



図 16: Operations Manager インストールウィザード - インストール

- ▶ 「変更 (M)」を選択します。
- ▶ 「インストール機能」ウィンドウで、インストールしたい Operations Manager 製品を選択します。

3.14 Operations Manager ソフトウェアのアンインストール

Web コンポーネントをアンインストールして同じコンポーネントの旧バージョンをインストールしたい場合、最初にすべてのキャッシュをクリアする必要があります。



- Operations Manager をアンインストールする前に、設定ファイル *ServerViewDB.ini* で SQL Server のインスタンス名と SQL Server のエディションを確認して記録しておきます。インスタンス名は「**Server_Instance**」、エディションは「**DbServerEdition**」に定義されています。
- Deployment Manager または Installation Manager がまだインストールされている場合は、まずこれらをアンインストールするよう要求されます。
- SVOM をアンインストールする場合、すべての SVOM プログラムを終了させてから行ってください。SVOM をアンインストールした後、ディレクトリ、サブディレクトリ、ファイルが削除されないことがあります。
- アンインストールを行うときに、途中で処理を中断したり、次の手順以外の操作を行ったりすると、正しくアンインストールされません。アンインストールは最後まで確実に行ってください。
- アンインストールを行うため、サーバリストやアラーム設定などの設定は削除されます。自動的に設定を引き継ぐ機能はありませんので、アンインストール前に設定内容を控えておいてください。アップデートインストール後、再度設定してください。
- 同じバージョンの SVOM を再インストールするために SVOM をアンインストールする場合には、SQL Server のアンインストールは必要はありません。
データベースごと再インストールしたい場合など、状況に応じてアンインストールしてください。
- アンインストール画面において文字化けが生じることがあります
が、動作には影響はありません。
- アンインストール終了後、SVOM のショートカット、またはプログラムグループに SVOM が残っている場合があります。手動で削除してください。

- アンインストール後、タスクスケジューラに「At** (**: タスクID)」というタスクが残っている場合があります。この場合は、タスクのプロパティを開いて「実行するファイル名」が次と同じ場合は、タスクを削除してください。

SVOM のタスクスケジューラで実行されるファイル：

[システム ドライブ] :¥Program Files¥Fujitsu¥ServerView Suite¥ServerView¥ServerView Services¥WebServer¥ClearMyLogs.exe

- SVOM 関連のサービスがまとめて削除されます。削除する対象は、個別に選択できません。

Windows のスタートメニューから Operations Manager とイベントマネージャをアンインストールします。

- Windows Server 2003 では、「スタート」→「設定」→「コントロールパネル」→「プログラムの追加と削除」の順に選択します。
- Windows Server 2008 では、「スタート」→「コントロールパネル」→「プログラムと機能」を選択します。製品のバージョンを表示するには、「表示」メニューで「詳細」を選択します。「バージョン」オプションを選択して「OK」をクリックします。

「Fujitsu ServerView Operations Manager」から、「削除」を選択します。これにより、パッケージは完全にアンインストールされます。「変更」を選択すると、個々のコンポーネントを削除できる別のウィンドウが開きます。



図 17: アンインストール

「変更 (M)」を選択すると、アンインストールしたい個々のコンポーネントを選択できる別のウィンドウが開きます。

「削除 (E)」を選択するとパッケージを完全に削除します。

SQL Server インスタンスのアンインストール

SQL Server インスタンスの「SQLSERVERVIEW」を使用している場合、このインスタンスをアンインストールできます。

設定ファイル *ServerViewDB.ini* で、エディション（「DBServerEdition」）が「Express Edition」だった場合、以下の手順に従います。

- ▶ 「Microsoft SQL Server 2005」および「SQL Server 2008」を選択します。
- ▶ 「削除」をクリックします。
- ▶ インスタンスの「SQLSERVERVIEW: Database Engine」を選択します。
- ▶ ソフトウェアをアンインストールします。

設定ファイル *ServerViewDB.ini* で、エディション（「DBServerEdition」）が「Desktop Engine」だった場合、以下の手順に従います。

- ▶ 「Microsoft SQL Server Desktop Engine (SQLSERVERVIEW)」を選択します。
- ▶ 「削除」をクリックします。
- ▶ ソフトウェアをアンインストールします。

「SQLSERVERVIEW」が唯一の SQL Server 2005 および SQL Server 2008 インスタンスである場合、「Workstation Components/Shared Components」をアンインストールすることもできます。SQL Server Management Studio Express をインストールしている場合、このソフトウェアをアンインストールすることができます。

Enterprise/Standard/Workgroup Edition の SQL Server インスタンスの場合、その SQL Server インスタンスが他のアプリケーションで使用されていないことを確認する必要があります。他のアプリケーションで使用されていなければ、「SQLSERVERVIEW」インスタンスと同じ方法でアンインストールすることができます。

SQL Server 2005 および SQL Server 2008 を使用している場合、Microsoft SQL Server Native Client をアンインストールすることができます。

4 ServerView データベース

Operations Manager には次の SQL データベースが必要です。

- Windows Server 2008 では、SQL Server 2008 または SQL Server 2005 を使用できます。最新のサービスパックを適用することをお勧めします。SQL Server 2005 Express は Operations Manager に添付されています。
 - Windows Server 2003 では、SQL Server 2000、MSDE 2000、SQL Server 2005、SQL Server 2005 Express、SQL Server 2008、または SQL Server 2008 Express を使用できます。MSDE 2000 は Operations Manager に添付されています。

4.1 構成ファイル ServerViewDB.ini

構成ファイル *ServerViewDB.ini* は、SQL Server インスタンスに関する情報、インストールパス、およびログファイルのパス名が含まれています。構成ファイルは <WinDir> ディレクトリに格納されています。

- ▶ 「スタート」→「ファイル名を指定して実行」の順に選択します。
 - ▶ 「名前」に「%windir%」を入力します。
 - ▶ 「OK」をクリックします。
 - ▶ 表示されたウィンドウで、「ServerViewDB.ini」ファイルを選択して開きます。

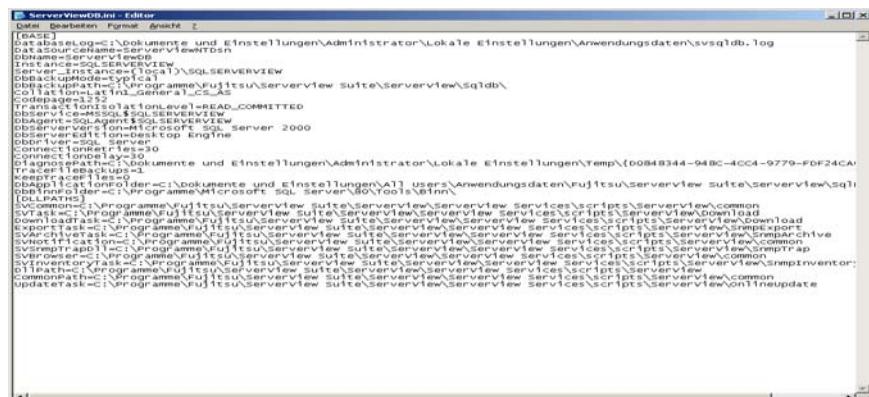


図 18: *ini ファイルの一例

ServerViewDB.ini 構成ファイルにおける重要なエントリ

ServerViewDB.ini 構成ファイルで以下が重要なエントリです。

- データベースサーバのインスタンス名: エントリ「**Server_Instance**」
このエントリは *<SQL Server_Instance>* で指定する必要があります。
- データベースバックアップファイルのパス: エントリ「**DbBackupPath**」
- データベースのバックアップモード: エントリ「**DbBackupMode**」
- SQL サーババージョン: エントリ「**DbServerVersion**」
- SQL サーバエディション: エントリ「**DbServerEdition**」
SQL サーバ 2000 と SQL サーバエディションの Desktop Engine は、本マニュアルでは MSDE 2000 と表記します。

4.2 データベースへの接続中断

LAN の問題など、ServerView データベースへの接続が中断される場合、以下が発生しています。

- 「ServerView Services」サービスおよび「ServerView Download Service」(あれば) が停止します。
- メッセージ(下図を参照)が Windows のイベントログに書き込まれます。
- Operations Manager の動作中には、次の画面が表示されます。



図 19: エラーメッセージ

ServerView データベースへの接続がいったん切断されると、サービス、「ServerView Services」および「ServerView Download Service」は手動で再起動する必要があります。

- 「スタート」→「設定」→「コントロールパネル」→「管理ツール」→「サービス」を選択します。
- 関連するサービスを選択します。
- コンテキストメニューの「開始」を選択します。

4.3 ServerView データベースの管理

4.3.1 SQL Server 2008/2005

次のプログラムは SQL Server 2008/2005 での ServerView データベースの管理に使用できます。

- SQL Server Management Studio (Basic) for SQL Server 2008
SQL Server Management Studio (Express) for SQL Server 2005
グラフィカルプログラムです。Enterprise/Standard/Workgroup エディションでは、SQL Server 2008/2005 のコンポーネントとして、Microsoft SQL Server 2008/2005 インストール DVD に収録されています。

SQL Server 2008 Express および SQL Server 2005 Express の場合、SQL Server Management Studio の基本バージョンを含むさまざまなエディションがあります (SQL Server 2008 Express with Tools、SQL Server 2008/2005 Express with Advanced Services)。Management Studio の基本バージョンはインターネットから別々にインストールパッケージとしてダウンロードして、追加または後でインストールすることもできます。インストール後、最新のサービスパックが使用されているかどうかを確認してください。

- osql
コマンドラインプログラム osql は、SQL Server 2008/2005 のインストール後に使用できます。
- sqlcmd
コマンドラインプログラム sqlcmd は、SQL Server 2008/2005 のインストール後に使用できます。

ServerView データベースを管理する場合、SQL Server インスタンスはプログラム内で制限する必要があります。構成ファイル *ServerViewDB.ini* で、*Server_Instance=<SQL Server instance>* 下の SQL Server インスタンスでエントリを検出します。

SQL Server Management Studio (Basic/Express)

SQL Server のインスタンスを入力するには、以下を実行します。

- ▶ 「スタート」 → 「すべてのプログラム」 → 「Microsoft SQLServer 2008/2005」 → 「SQL Server Management Studio (Express)」を開始します。
- ▶ 「サーバへの接続」ダイアログで、サーバの種類、データベースエンジンのサーバ名を選択します。サーバ名で、SQL Server のインスタンス名を選択します。
- ▶ 「接続」をクリックします。

osql

SQL Server インスタンスに接続するには、入力プロンプトを開始し、次のコマンドを入力します。

```
osql -S <SQL Server instance> -E
```

sqlcmd

SQL Server インスタンスに接続するには、以下を実行します。

- ▶ 入力プロンプトを開始します。
- ▶ 次のコマンドを入力します。

```
sqlcmd -S <SQL Server instance> -E
```

4.3.2 SQL Server 2000 および MSDE

次のプログラムは SQL Server 2000 および MSDE 2000 での ServerView データベースの管理に使用できます。

- **Enterprise Manager**
SQL Server 2000 のグラフィカルプログラムコンポーネントです。
- **DbaMgr2k**
無料のグラフィカルプログラムです。
- **osql**
osql は SQL Server 2000 または MSDE 2000 のインストール後に使用できます。

ServerView データベースを管理する場合、SQL Server インスタンスは *ServerViewDB.ini* 構成ファイルで特定する必要があります。SQL Server インスタンス名は、*Server_Instance=<SQL Server instance>* エントリより検出します。

Enterprise Manager

SQL Server のインスタンスを入力するには、以下を実行します。

- ▶ スタートメニューから Enterprise Manager を開始します。
- ▶ 「SQL Server Group」 → 「Action」 → 「New SQL Server registration」を選択して、ウィザードの指示に従います。
- ▶ 使用可能なサーバのリストから SQL Server インスタンスを選択します。

DbaMgr2k

Operations Manager のインストールに従い、DbaMgr2k の設定は *<WebServer>/scripts/ServerView/Tools/* ディレクトリに格納されます。

DbaMgr2k は *SetupDbaMgr2k.exe* ファイルを実行することによりインストールされます。

ただし、ServerView Suite DVD 1 から DbaMgr2k をインストールすることもできます。

- ▶ ServerView Suite DVD 1 で、「SVSSoftware」 → 「Software」 → 「ServerView」 → 「Windows」 → 「ServerView_S2」 → 「DbaMgr2k」ディレクトリに切り替えます。
- ▶ *Setup_DbaMgr2k.exe* ファイルを実行します。

SQL Server のインスタンスを入力するには、以下を実行します。

- ▶ **DbaMgr2k** (デスクトップアイコン、クリック起動アイコン、またはスタートメニューを使用) を開始します。
- ▶ エントリ「SQL Server」をダブルクリックします。
- ▶ 「SQL Server connection properties」 ウィンドウで次の設定を行います。
 - ▶ アイコンをクリックして (「Show available SQL Server/MSDE on local network」) ローカルネットワークにあるすべての SQL サーバまたは MSDE サーバを表示します。
 - ▶ SQL Server インスタンス <SQL Server instance> を選択し、「OK」でエントリを確定します。
 - ▶ 「Public name」で、同じエントリを行うか、選択したエントリの説明を入力します。
 - ▶ 「Trusted NT Connection box」をダブルクリックします。
 - ▶ 「Connect」ボタンをクリックします。

構成後に、システムを再起動してください。

次の SQL Server インスタンスを使用できます。

<Computer name>\<Instance> or
(local)

osql

SQL Server インスタンスに接続するには、入力プロンプトを開始し、次のコマンドを入力する必要があります。

osql -S <SQL Server instance> -E

4.4 ServerView データベースのバックアップ

ServerView データベースおよび SQL Server システムデータベース *msdb* は、インストール時に入力されるバックアップジョブにより、自動的に一定の時間間隔でバックアップされます。



以下を注意してください。

システム稼働時、ServerView データベースの自動バックアップ時間を調整してください。自動バックアップは、システム稼働時のみ実行されます。自動バックアップジョブ「*JobServerViewLongInterval*」は、バックアップ処理を実行するだけでなく、データベースのサイズが大きくなりすぎていないことも確認します。このメンテナンスは定期的に実行する必要があります。

バックアップはオンラインで実行されます。データベースサービス「*MSSQL\$SQLSERVIEW*」または「*MSSQLSERVER*」(SQL Server 2008/2005 の場合:「*SQL Server (SQLSERVIEW*」または「*SQL Server (MSSQLSERVER*」)) は引き続き実行されるので、ServerView データベースにはバックアップ中もアクセスできます。

4.4.1 ServerView データベースのバックアップジョブ

Operations Manager のインストール中、標準または完全どちらかの SQL Server バックアップモードを選択できます。*ServerViewDB.ini* コンフィグレーションファイルでは、*DbBackupMode* 項目の下に選択したバックアップモードが表示されます。

インストール中、標準を選択した場合、*JobServerViewDaily* バックアップジョブが実行されます。このジョブは、ServerView データベースを毎日バックアップし、前日のバックアップを上書きします。

完全を選択した場合、次のバックアップジョブを利用できます。

- **JobServerViewDaily**
データベースを毎日バックアップし、前日のバックアップへ追加します。
- **JobServerViewHourly**
毎時トランザクションログをバックアップします。
- **JobServerViewLongInterval**
週 1 回データベースをバックアップし、以前のバックアップをすべて上書きします。

バックアップモードの違いの概要

	標準バックアップモード	完全バックアップモード
SQL Server recovery model:	simple	full
最大データ損失量	1日入力されたデータ	1時間入力されたデータ
バックアップの頻度	1日1回	毎時
バックアップジョブ監視のオーバーヘッド (121 ページの「バックアップジョブの進行確認と編集」の項 参照)	低	高
ディスク使用量	低	高

システムが正常に稼動している際、バックアップを実行するための適切な時間を定義します。

完全バックアップモードを選択した場合は、バックアップジョブ *JobServerViewHourly* および *JobServerViewLongInterval* が実行されているかを定期的に確認し、ログファイル *ServerViewDB_log.LDF* が大きくなりすぎないようにします。急速にファイルが肥大している場合は、ファイルサイズを縮小します。 [154 ページの「ServerViewDB_log.LDF ファイルの肥大化」の項](#) と次の段落で説明する手順に従います (4.4.2 から 4.4.5)。

ログファイル *ServerViewDB_log.LDF* は標準バックアップモードでも生成されます。サイズは自動的に縮小されますが、バックアップはされません。

`osql` でスケジュールを設定することもできます。[162 ページの「osql によるデータベース管理 \(Windows\)」の項](#)をご覧ください。

ServerView データベースをハードディスクへバックアップするのと同様に、定期的に外部メディアへも保存してください。Windows では、「スタート」→「すべてのプログラム」→「アクセサリ」→「システムツール」→「バックアップ」の順に選択しバックアッププログラムを使用します。

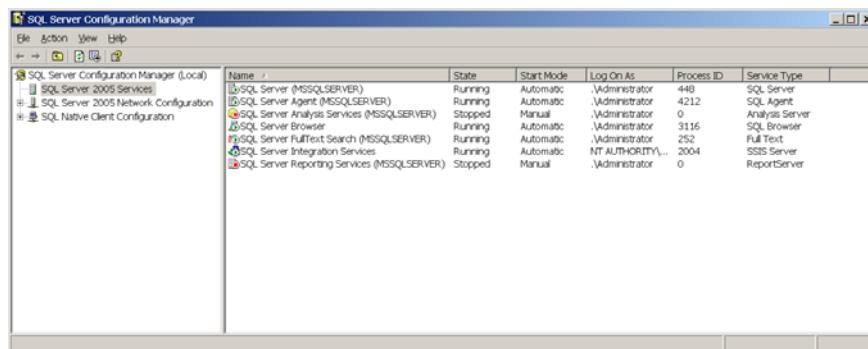
4.4.2 ジョブの実行要件

ジョブを実行する場合、以下を実行して、開始タイプを「自動」に設定してください。

- SQL Server 2008 Express/2005 Express および MSDE 2000 の場合、Windows Task Scheduler
- SQL Server 2008/2005 Enterprise/Standard/Workgroup Edition の場合、SQL Server エージェント *SQL Server-Agent (MSSQLSERVER)*
- SQL Server 2000 の場合、SQL Server エージェント *SQLSERVERAGENT*

「管理ツール」→「サービス」を使用して、これらの設定をチェックすることができます。

SQL Server 2008 および SQL Server 2005 の場合、「スタート」→「すべてのプログラム」→「Microsoft SQL Server 2008/2005」→「構成ツール」→「SQL Server 構成マネージャ」を選択することにより、SQL Server に影響を与えるサービスのリストを表示できます。



ServerViewDB.ini 構成ファイルのエントリ 「DbAgent」 で SQL Server エージェントの名前を検索します。

SQL Server 2008 Express/2005 Express の場合、SQL Server エージェントは存在しません。MSDE 2000 の場合、Operations Manager version 4.8 として使用されることはありません。ジョブ管理については、[123 ページの "SQL Server 2008 Express/2005 Express および MSDE 2000 上で Windows Explorer またはタスクスケジューラを使用して編集および追跡する"](#) に記載されています。

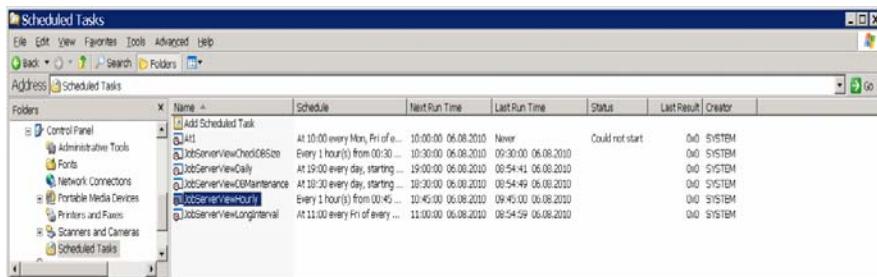
4.4.3 バックアップジョブの進行確認と編集

データベース管理ツールでの進行確認と編集 (SQL Server 2008 Express/2005 Express および MSDE 2000 以外)

バックアップジョブのスケジュールを表示するには、以下を実行します。

- ▶ Enterprise Manager、DbaMgr2k、または SQL Server Management Studio を起動します。
- ▶ SQL Server インスタンスをクリックして、([Management] の Enterprise Manager または DbaMgr2k の) エントリ「SQL Server Agent」を選択します。
- ▶ 次に「Jobs」をクリックします。

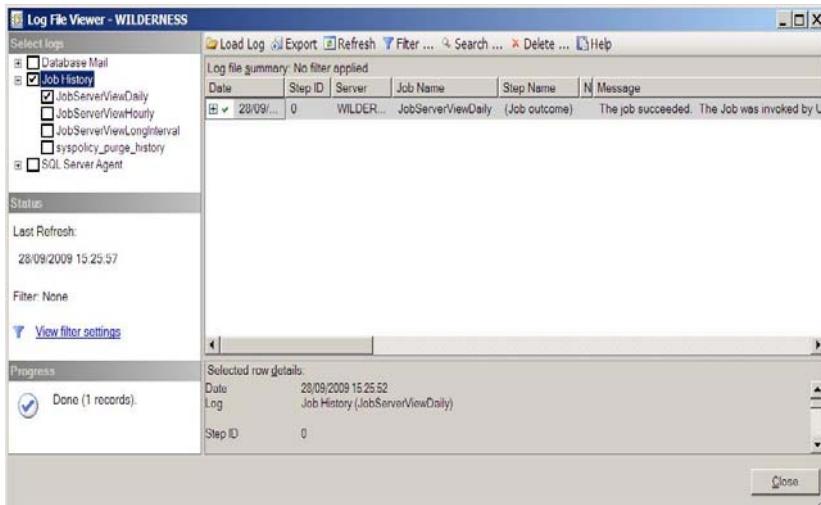
Enterprise Manager または DbaMgr2k で、バックアップジョブが「Last Run Status」列で成功したかどうかをチェックできます。



- ▶ 適切なバックアップジョブを選択し、コンテキストメニューの「Properties」を選択します。

SQL Server Management Studio で、各ジョブの進行状況の詳細を表示します。

- ▶ 「SQL Agent」で、すべてのジョブまたは特定のジョブを選択します。
- ▶ コンテキストメニューの「View History」を選択します。



- ▶ コンテキストメニューの「Properties」を選択します。
- ▶ プロパティウィンドウで、「Schedules」のリンクを選択し、必要に応じてジョブのスケジュールを調整します。
- ▶ 「Edit」をクリックし、スケジュールを調整します。システムが通常に動作しているときのジョブの実行時間を選択します。

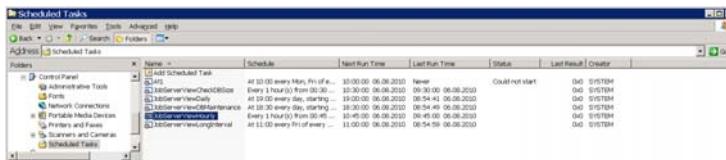
SQL Server 2008 Express/2005 Express および MSDE 2000 上で Windows Explorer またはタスクスケジューラを使用して編集および追跡する

SQL Server 2008 Express/2005 Express および MSDE 2000 を使用して、バックアップおよびメンテナンスのジョブを SQL Server エージェントで管理することはできません。SQL Server 2005 Express の場合、このコンポーネントは存在しません。ジョブは Windows タスク シケジューラ で設定されるため、このコンポーネントで監視できます。

Windows Server 2003

使用できるスケジュールされたタスクを確認するには、Windows Explorer を次のように設定する必要があります。

- ▶ **Windows Explorer** を開き、メニューバーで「ツール」→「フォルダオプション」→「表示」の順に選択します。
 - ▶ 「詳細設定」スクロールペインで、「マイコンピュータにコントロールパネルを表示する」オプションを選択します。
 - ▶ 「OK」をクリックします。
 - ▶ コントロールパネルを開きます。
 - ▶ 「タスク」をダブルクリックします。



ServerView バックアップジョブおよびスケジュール表を確認します。

- ▶ Windows エクスプローラメニューで、「詳細設定」→「ログを表示」を選択します。表示されたウィンドウに、出力メッセージが表示されます。最近のエントリは次の行の上にあります。

「*****一番最近のエントリはこの行より上にあります*****」

タスクの実行に成功すると、次のテキストが表示されます。

"結果: タスクは次の終了コードで完了しました: (0)."

JobServerView が先頭にあるジョブの値が 0 かどうかを確認します。

タスクの実行に失敗すると、次のテキストが表示されます。

"結果: タスクは次の終了コードで完了しました:(1)."

その上にエラーの説明が表示されます。

- ▶ ウィンドウを閉じます。
- ▶ 関連するバックアップジョブを選択し、コンテキストメニューの「プロパティ」を選択します。
- ▶ プロパティウィンドウで、「スケジュール」タブを選択します。表示されたウィンドウでスケジュールを変更します。

Windows Server 2008

- ▶ 「管理ツール」で、「タスク スケジューラ」を選択します。
- ▶ 「タスクスケジューラ ライブラリ」を選択し、「エントリ タスクステータス」までスクロールします。
- ▶ 「JobServerView」ジョブのいずれかをダブルクリックします。すべての ServerView ジョブは中央のウィンドウに表示されます。
- ▶ 「履歴」タブをクリックして、ジョブの進行状況を表示します。
- ▶ ウィンドウの上部で、「JobServerView」ジョブを選択します。
- ▶ コンテキストメニューで、「プロパティ」を選択し、「Trigger」タブを選択します。
- ▶ 「Edit」をクリックし、スケジュールを調整します。システムが通常に動作しているときのジョブの実行時間を選択します

SQL Server のエディションすべてのイベントビューアで追跡する

予定されているデータベースバックアップジョブの実行を確認するには、Windows イベントビューアを次のとおり利用します。

- 「スタート」→「管理ツール」→「イベントビューア」の順に選択します。
- Windows 2008 では、「Windows ログ」を選択します。
- 「アプリケーション」を選択します。

次の一覧表は、使用する SQL Server に応じてバックアップジョブ実行中に Windows アプリケーションイベントログへ書き込まれる項目を示します。

2008 Express/2005 Express/MSDE 2000 の場合 :

カラム ソース	カラム イベント ID	説明
MSSQL\$SQLSERVERVIEW	18264 18265	データベースがバックアップされました。データベース : ServerViewDB、ダンプされたページ : ...、 MEDIANAME='ServerViewDB' : {'ServerViewDBData'}。このメッセージは情報です。ユーザの操作は不要です。
MSSQL\$SQLSERVERVIEW	17060	Windows のタスクスケジューラジョブ「JobServerView...」が起動されました。

2008/2005/2000 Enterprise/Standard/Workgroup エディションの場合（リモートの SQL Server マシンにあるリモート SQL Server の追跡の場合）：

カラム ソース	カラム イベント ID	説明
SQLSERVERAGENT oder SQLAgent\$Instanzname	208	スケジュールされた SQL Server ジョブ「JobServerView...」... - 状態 : Succeeded - ...。
MSSQLSERVER oder MSSQL\$Instanzname	18264 18265	データベースがバックアップされました。データベース : ServerViewDB、...、ダンプされたページ ...、 MEDIANAME='ServerViewDB' : {'ServerViewDBData'}。このメッセージは情報です。ユーザの操作は不要です。

選択した追跡に対してフィルタを作成できます。

4.4.4 バックアップファイルがあるかどうかをチェックする

ServerView データベースは定期的にバックアップされます。これにより、*.bak* の拡張子の 2 つのファイルが作成されます。

- *ServerViewDBData.bak*
ServerView データベースのバックアップファイル。
- *ServerViewDBLog.bak*
ServerView データベースのトランザクションログのバックアップファイル。完全バックアップモードで作成する場合のみ有効です。

ServerViewDB.ini コンフィグレーションファイルでは、インストール時のファイルのパスが *DbBackupPath* の下に表示されます。また、バックアップモードの設定が *DbBackupMode* の下に表示されます。

 以下は、リモートで SQL Server インスタンスをインストールしたインストールの場合のみ適用されます。

Operations Manager ソフトウェアのインストール中に、「SQL Server Backup Path」 ウィンドウでリモートの SQL Server にあるバックアップファイルのパスを指定することができます。パスを指定しない場合、SQL Server のデフォルトのパスにバックアップファイルが作成されます。この場合の構成ファイル *ServerViewDB.ini* には「*DbBackupPath*」のデフォルトのエントリが含まれています。

SQL Server 2000 のデフォルトのパス：

\Program Files\Microsoft SQL Server\MySQL<\$InstanceName>\BACKUP

SQL Server 2000 のデフォルトのパス（名前のないインスタンス）：

\Program Files\Microsoft SQL Server\MySQL\BACKUP

SQL Server 2005 のデフォルトのパス：

\Program Files\Microsoft SQL Server\MySQL.<n>\MySQL\Backup

n: インスタンス番号

SQL Server 2005 のデフォルトのパス：（名前のないインスタンス）

\Program Files\Microsoft SQL Server\MySQL.1\MySQL\Backup

SQL Server 2005 のデフォルトのパス（名前のないインスタンス）：

\Program Files\Microsoft SQL Server\MySQL.1\MySQL\Backup

SQL Server 2008 のデフォルトのパス（名前付きインスタンス）：
 \Program Files\Microsoft SQL
 Server\MSSQL10.<Instancename>\MSSQL\Backup

SQL Server 2008 のデフォルトのパス（名前のないインスタンス）：
 \Program Files\Microsoft SQL
 Server\MSSQL10.MSSQLSERVER\MSSQL\Backup\

パス名は、SQL Server Management Studio、DbaMgr2k および Enterprise Manager にも表示されます。

SQL Server Management Studio

- ▶ SQL Server Management Studio を起動します。
- ▶ 「サーバへの接続」ダイアログで、「サーバの種類」、「サーバ名」および「データベースエンジン<インスタンス名>」を選択します。
- ▶ 「接続」をクリックします。
- ▶ 次に、「オブジェクトエクスプローラ」で、エントリ「サーバオブジェクト」を選択します。
- ▶ 「バックアップデバイス」をクリックします。
- ▶ 「ServerViewDBData」を選択してから、コンテキストメニューの「プロパティ」を選択します。
- ▶ ServerView データベースのバックアップファイルのパス名は「Destination」フィールドの下に表示されます。
- ▶ 完全バックアップモードを使用する場合、「バックアップデバイス」→「ServerViewDBLog」→「プロパティ」で、トランザクションログのパス名を見つけることができます。トランザクションログのバックアップファイルのパス名は「バックアップ先」の下に表示されます。

リモートの SQL Server インスタンスの使用中で、インストール時に「SQL Server Backup Path」用に何も指定していない場合、以下を設定することができます。

- 「バックアップデバイス」をクリックします。
- コンテキストメニューから「新しいバックアップデバイス...」を選択します。
- デバイス名に「ServerViewDBData」と入力します。
- 「OK」をクリックします。

完全バックアップモードを使用する場合、バックアップファイル「ServerViewDBLog」についてこれらの手順を繰り返します。

DbaMgr2k

- ▶ DbaMgr2k（デスクトップアイコン、クイック起動アイコン、またはスタートメニューを使用）を開始します。
- ▶ 「<SQL Server_Instance>」で接続します。
- ▶ エントリ「Backup devices」を選択します。
- ▶ バックアップファイルのパス名は「Physical Location」列に表示されます。

Enterprise Manager

- ▶ Enterprise Managerを起動します。
- ▶ 「<SQL Server_Instance>」→「Management」→「Backup」を選択します。
- ▶ バックアップファイルのパス名は「Physical Location」列に表示されます。

リモートの SQL Server インスタンスの使用中で、インストール時に「SQL Server Backup Path」用に何も指定していない場合、以下を設定することができます。

- 「Backup」をクリックします。
- コンテキストメニューから「New Backup Device...」を選択します。
- 「Name」の下に「ServerViewDBData」と入力します。
- 「OK」をクリックします。

完全バックアップモードを使用する場合は、バックアップファイル「ServerViewDBLog」についてこれらの手順を繰り返します。

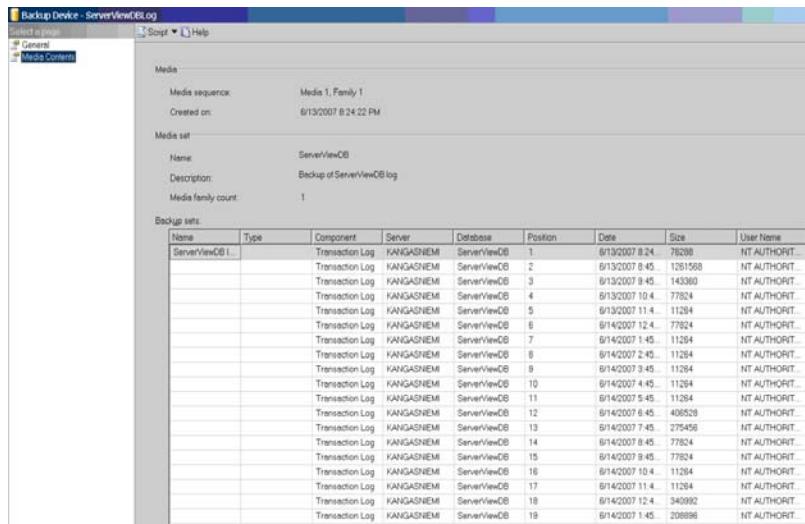
4.4.5 バックアップファイルの内容をチェックする

バックアップファイルに書かれているバックアップジョブの内容をチェックできます。また、バックアップファイルのデータレコードなどの番号を表示することもできます。

リモートの SQL Server インスタンスの使用中に、Management Studio または Enterprise Manager にバックアップメディア 「ServerViewDBData」 および 「ServerViewDBLog」 が表示されている場合は、このチェックを実行できます。そうでなければ、上記のように設定して、コンテンツチェックで処理することができます。

チェックには次のオプションがあります。

- SQL Server 2000 用に Enterprise Manager または DbaMgr2k を開始します。
 - ▶ SQL Server インスタンスをクリックします。
 - ▶ 「Backup (devices)」 をクリックします。
 - ▶ バックアップデバイスを選択します。
 - ▶ コンテキストメニューの 「Properties」 を選択します。
 - ▶ 「(View) Contents」 ボタンをクリックします。
- SQL Server Management Studio (Express) を起動します。
 - ▶ SQL Server インスタンスをクリックします。
 - ▶ 「サーバオブジェクト」 をクリックします。
 - ▶ 「バックアップデバイス」 をクリックします。
 - ▶ バックアップデバイスを選択します。
 - ▶ コンテキストメニューで、「プロパティ」 を選択します。
 - ▶ 「メディアの内容」 タブを選択します。



The screenshot shows the 'Backup Device - ServerViewDBLog' window. It displays the following details:

Media

- Media sequence: Media 1, Family 1
- Created on: 8/13/2007 8:24:22 PM

Media set

- Name: ServerViewDB
- Description: Backup of ServerViewDB log
- Media family count: 1

Backup sets:

Name	Type	Component	Server	Database	Position	Date	Size	User Name
ServerViewDB...	Transaction Log	KANGASNEMI	ServerViewDB	1		8/13/2007 8:24...	76288	NT AUTHORITY...
	Transaction Log	KANGASNEMI	ServerViewDB	2		8/13/2007 8:45...	126168	NT AUTHORITY...
	Transaction Log	KANGASNEMI	ServerViewDB	3		8/13/2007 8:45...	143380	NT AUTHORITY...
	Transaction Log	KANGASNEMI	ServerViewDB	4		8/13/2007 10:4...	77824	NT AUTHORITY...
	Transaction Log	KANGASNEMI	ServerViewDB	5		8/13/2007 11:4...	11284	NT AUTHORITY...
	Transaction Log	KANGASNEMI	ServerViewDB	6		8/14/2007 12:4...	77824	NT AUTHORITY...
	Transaction Log	KANGASNEMI	ServerViewDB	7		8/14/2007 1:45...	11284	NT AUTHORITY...
	Transaction Log	KANGASNEMI	ServerViewDB	8		8/14/2007 2:45...	11284	NT AUTHORITY...
	Transaction Log	KANGASNEMI	ServerViewDB	9		8/14/2007 3:45...	11284	NT AUTHORITY...
	Transaction Log	KANGASNEMI	ServerViewDB	10		8/14/2007 4:45...	11284	NT AUTHORITY...
	Transaction Log	KANGASNEMI	ServerViewDB	11		8/14/2007 5:45...	11284	NT AUTHORITY...
	Transaction Log	KANGASNEMI	ServerViewDB	12		8/14/2007 6:45...	40852	NT AUTHORITY...
	Transaction Log	KANGASNEMI	ServerViewDB	13		8/14/2007 7:45...	275456	NT AUTHORITY...
	Transaction Log	KANGASNEMI	ServerViewDB	14		8/14/2007 8:45...	77824	NT AUTHORITY...
	Transaction Log	KANGASNEMI	ServerViewDB	15		8/14/2007 9:45...	77824	NT AUTHORITY...
	Transaction Log	KANGASNEMI	ServerViewDB	16		8/14/2007 10:4...	11284	NT AUTHORITY...
	Transaction Log	KANGASNEMI	ServerViewDB	17		8/14/2007 11:4...	11284	NT AUTHORITY...
	Transaction Log	KANGASNEMI	ServerViewDB	18		8/14/2007 12:4...	340992	NT AUTHORITY...
	Transaction Log	KANGASNEMI	ServerViewDB	19		8/14/2007 1:45...	208896	NT AUTHORITY...



完全バックアップモードで、バックアップデバイス「ServerViewDBLog」に1週間分の記録があるか定期的に確認してください。1週間を超えると「ServerViewDBLog」は上書きされます。

これが行われないと、バックアップジョブ「JobServerViewLongInterval」は実行されません。上書きされない場合、バックアップジョブ「JobServerViewLongInterval」は実行されません。この場合、*.bak ファイルを減らしてください。

ログファイル *ServerViewDB_log.LDF* が大きくなりすぎた場合、154 ページの「[ServerViewDB_log.LDF ファイルの肥大化](#)」の項の説明に従って、サイズを小さくします。

自動バックアップとファイルサイズ縮小を常時実行するには、120 ページの「[ジョブの実行要件](#)」の項 およびその後の項で説明している手順に従います。

4.5 ServerView データベース のリストア

エラーのイベントで、バックアップから ServerView データベースをリストアすることができます。現在の ServerView データベースまたはエラーが発生している ServerView データベースは削除しないでください。リストア時にエラーを検出すると、最初からリストアを再開する必要があります。

リストアでは、データベースバックアップで最初に読み込みが行われ、1つ以上のトランザクションログが利用可能な場合はバックアップされます。

ServerViewDB.ini ファイルの「DbBackupMode」エントリが完全に設定されている場合、トランザクションログのバックアップを利用できます。

データバックアップのディレクトリに関する情報は、[126 ページの「バックアップファイルがあるかどうかをチェックする」](#)の項をご覧ください。

4.5.1 SQL Server Management Studio によるリストア

ServerView データベースおよびトランザクションログをリストアするには、以下を実行します。

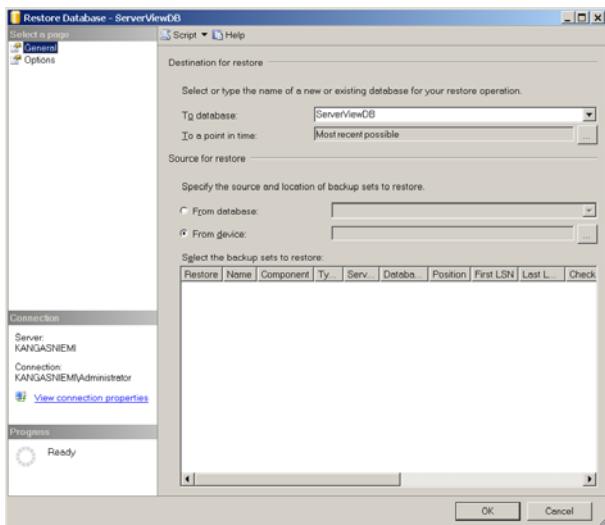
1. ServerView データベースへのアクセスを制限します。

- ▶ SQL Server Management Studio を起動します。
- ▶ SQL Server インスタンスと接続し、「データベース」→「ServerViewDB.」を選択します。
- ▶ コンテキストメニューの「プロパティ」を選択します。
- ▶ 「オプション」ページを選択し、「アクセス権限」でエントリ「RESTRICTED_USER」を選択します。「OK」をクリックしてから、「YES」をクリックします。

2. データベースのバックアップからリストアします。

- ▶ 「データベース」をクリックしてから、コンテキストメニューの「ファイルおよびファイル グループの復元 …」を選択します。

- ▶ 「ファイルおよびファイルグループの復元」 ウィンドウが開きます。



- ▶ 「全般」 ページで、「復元先データベース」 フィールドに名前「ServerViewDB」 または「msdb」 を入力するか、リストから名前を選択します。
- ▶ 「復元元デバイス」 を選択します。
- ▶ 「...」 ボタンをクリックします。
- ▶ 適切な格納場所からデータベースバックアップ「ServerViewDBData.bak」 を追加し、「OK」 をクリックします。
- ▶ 格納するデータベースバックアップを選択します。
「復元するバックアップセットの選択」 で、「復元」 列のボックスをクリックします。
- ▶ 「オプション」 ページに切り替えます。
- ▶ 復元オプション：「既存のデータベースを上書きする」 をチェックします。

- ▶ トランザクションログバックアップ *ServerViewDBLog.bak* を利用できない場合は、「OK」をクリックします。利用できる場合は、復元状態：「データベースは操作不可能状態のままで、コミットされていないトランザクションはロールバックしない。別のトランザクションログは復元できます。」を選択します。
- ▶ 「OK」をクリックし、再度「OK」をクリックします。

データベースのリストアが開始されます。「オブジェクト エクスプローラ」に、「ServerViewDB (リストア中 ...)」と表示されます。

3. 利用可能な場合は、トランザクションログをリストアします。

- ▶ 「データベース」をクリックしてから、コンテキストメニューの「ファイルおよびファイル グループの復元 …」を選択します。
- ▶ 「ファイルおよびファイル グループの復元」ウインドウが開きます。
- ▶ 「全般」ページの「復元先データベース」フィールドで、リストから名前「ServerViewDB」を選択します。
- ▶ 「復元元デバイス」を選択します。
- ▶ 「...」ボタンをクリックします。
- ▶ 適切な格納場所からトランザクションログファイル「*ServerViewDBLog.bak*」を追加し、「OK」をクリックします。
- ▶ 格納するデータベースバックアップを選択します。
「復元するバックアップセットの選択」で、「復元」列のボックスをクリックします。
- ▶ 「オプション」ページに切り替えます。
- ▶ 復元オプション：「既存のデータベースを上書きする」をチェックします。
さらにトランザクションログをリストアする場合、オプション：「データベースは操作不可能状態のままで、コミットされていないトランザクションはロールバックしない。」を選択します。
最後のトランザクションログをリストアする場合、オプション：「コミットされていないトランザクションをロールバックして、データベースをしよう可能な状態にする。別のトランザクションは復元できません。」を選択します。

- ▶ 「OK」をクリックしてから、もう一度「OK」をクリックします。

最後のトランザクションログをリストア後、データベースのステータスを通常に戻してください。「オブジェクトエクスプローラ」では、アドオン「(リストア中 ...)」は表示されません。

サービス「ServerView Services」および「ServerView Download Service」を再起動します。

- ▶ 「スタート」→「設定」→「コントロールパネル」→「管理ツール」→「サービス」を選択します。
- ▶ 適切なサービスを選択し、コンテキストメニューの「再起動」を選択します。

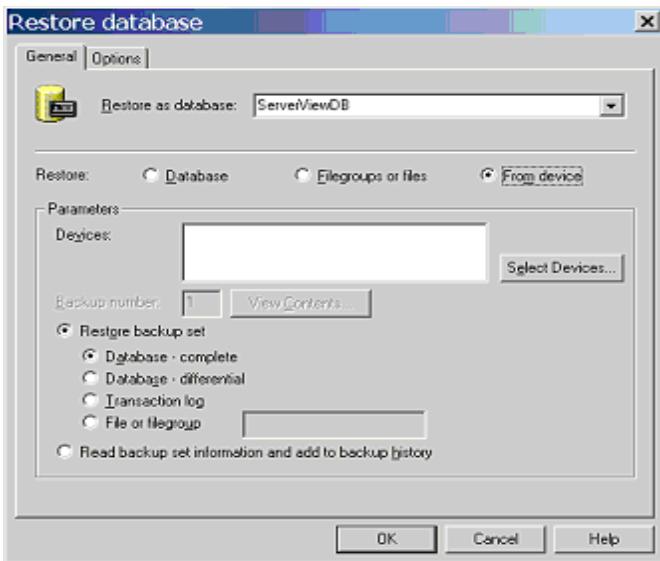
これで、Operations Manager を使用して、再び ServerView データベースにアクセスできるようになります。

4.5.2 Enterprise Manager によるリストア

ServerView データベースおよびトランザクションログをリストアするには、以下を実行します。

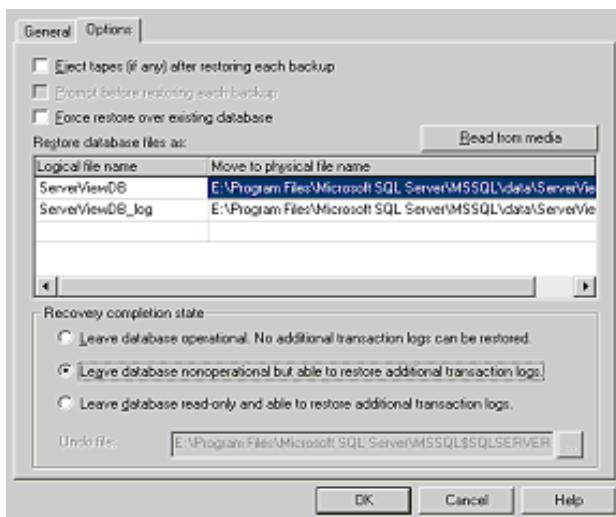
1. ServerView データベースへのアクセスを制限します。
 - ▶ Enterprise Manager を起動します。
 - ▶ SQL Server インスタンスをクリックし、「データベース - ServerViewDB」を選択します。
 - ▶ コンテキストメニューを表示し、「プロパティ」を選択します。
 - ▶ 「オプション」タブを選択し、「アクセス制限」を選択してから、「db_owner」、「dbcreator」または「sysadmin」のメンバを選択します。
2. 以下のようにデータベースのバックアップからリストアします。
 - ▶ SQL Server インスタンスをクリックします。
 - ▶ 「データベース」をクリックし、コンテキストメニューの「全てのタスク」の「データベースの復元」を選択します。

「データベースの復元」 ウィンドウが開きます。



- ▶ 「全般」 タブで、「データベースとして復元」 フィールドに名前「ServerViewDB」 または「msdb」 を入力するか、リストから名前を選択します。
- ▶ オプション「デバイスから」 を選択します。
- ▶ オプション「データベース全体」 を選択します。
- ▶ 「デバイス選択 ...」 をクリックします。
- ▶ 表示されたウィンドウで、「追加 ...」 をクリックします。
- ▶ 表示されたウィンドウで、ファイル *ServerViewDBData.bak* または *msdb.Data.bak* か、バックアップデバイス「ServerViewDBData」 または「msdbData」 を選択し、「OK」 → 「OK」 をクリックします。

- ▶ 「オプション」タブに切り替えます。



- ▶ トランザクションログバックアップ *ServerViewDBLog.bak* を利用できない場合、オプション「データベースは操作可能状態 ...」を選択します。

利用できる場合は、オプション「データベースを操作不可状態。別のトランザクションログの復元は可能」を選択します。

- ▶ 「復元先」列のパス名をチェックします。 **ServerView** データベースで以下のエントリを確認します。

```
<Server_Installation_Pathname>\Data\ServerViewDB.mdf  
<Server_Installation_Pathname>\Data\ServerViewDB_log.LDF
```

- ▶ 「全般」タブに切り替えます。
- ▶ 「内容表示」ボタンをクリックします。
- ▶ リストアするデータベースバックアップを選択します。
- ▶ 「OK」 → 「OK」をクリックします。

データベースのリストアが開始されます。Enterprise Manager にメッセージ 「**ServerViewDB (ローディング)**」 が表示されます。

3. 利用できる場合は、トランザクションログをリストアします。

- ▶ 「全般」タブで、「データベースとして復元」フィールドに名前「ServerViewDB」を入力するか、リストから名前を選択します。
- ▶ オプション「デバイスから」を選択します。
- ▶ オプション「トランザクションログ」を選択します。
- ▶ オプション「デバイス選択 ...」をクリックします。
- ▶ 表示されたウィンドウで、「追加 ...」ボタンをクリックします。
- ▶ 表示されたウィンドウで、ファイル *ServerViewDBLog.bak* またはバックアップデバイス「ServerViewDBLog」を選択してから、「OK」→「OK」をクリックします。
- ▶ 「内容表示」をクリックします。
- ▶ 関連する（データベースに適合する）列を選択します。
- ▶ 「OK」をクリックします。
- ▶ 「オプション」タブに切り替えます。
- ▶ 複数のトランザクションログをリストアする場合、オプション：「データベースを操作不可能状態。別のトランザクションログの復元は可能」を選択します。または、最後のトランザクションログのみをリストアする場合、オプション：「データベースは操作可能状態。別のトランザクションログの復元は不可」を選択します。
- ▶ 「全般」タブを選択してから、「OK」をクリックします。
- ▶ オプション：「データベースを操作不可能状態。別のトランザクションログの復元は可能」を選択した場合、トランザクションログをリストアするたびに手順 3 を繰り返します。

最後のトランザクションログをリストア後、データベースのステータスを通常に戻してください。Enterprise Manager のロードに関するメッセージが表示されなくなります。

リストア後に、ServerView データベースへのアクセスは自動的に再度有効になります。

4.5.3 DbaMgr2k によるリストア

ServerView データベースおよびトランザクションログをリストアするには、以下を実行します。

1. ServerView データベースへのアクセスを制限します。

- ▶ DbaMgr2K を起動します。
- ▶ SQL Server インスタンスをクリックし、「Databases」 → 「ServerViewDB」を選択します。
- ▶ コンテキストメニューを表示し、「プロパティ」を選択します。
- ▶ ウィンドウで、「Options」アイコンを選択します。
- ▶ プロパティウィンドウで、ボタンセクションの「Access granted to」の下にあるエントリ「Members of db_owner」を選択します。
- ▶ 「Status」フィールド（最上部のセクション）の値を「dboUseOnly」に変更します。
- ▶ 「Save」をクリックして、エントリを保存します。

2. データベースバックアップを表示します。

- ▶ SQL Server インスタンスをクリックし、エントリ「Backup devices」を選択します。
- ▶ 右側のフィールドで、「ServerViewDBData」をクリックしてから、コンテキストメニューから「Properties」 → 「Contents」を選択します。

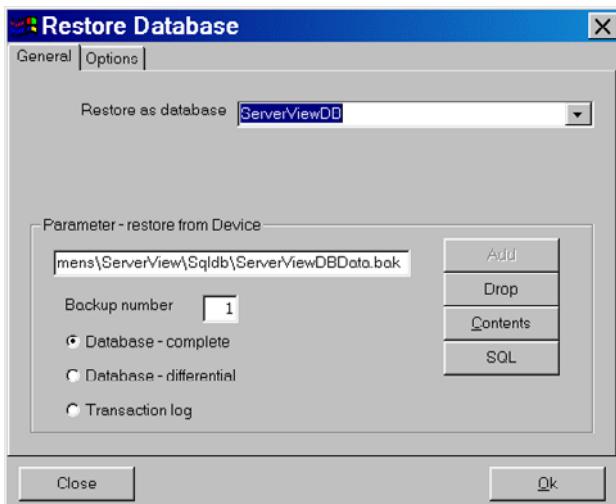
データベースバックアップが表示されます。バックアップを作成すると、「BackupFinishDate」列が表示されます。

利用できる場合は、トランザクションログ「ServerViewDBLog*」の場合、同じにします。

3. 以下のようにデータベースのバックアップからリストアします。

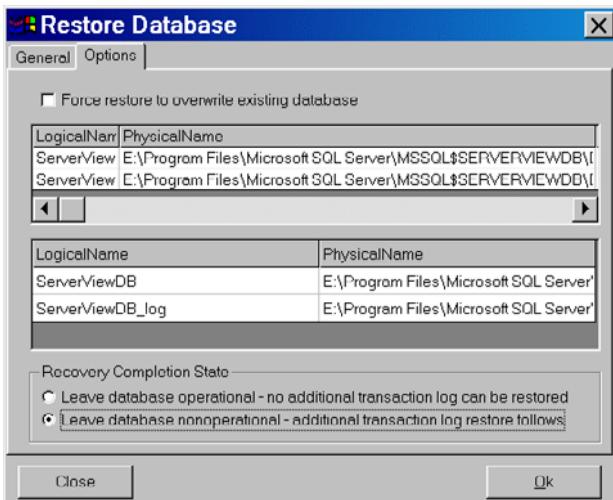
- ▶ SQL Server インスタンスをクリックします。
- ▶ 「Databases」をクリックしてから、コンテキストメニューの「Restore Database」を選択します。

「Restore Database」 ウィンドウが開きます。



- ▶ 「General」 タブで、「Restore as database」 フィールドに名前「ServerViewDB」 または「msdb」 を入力するか、リストから名前を選択します。
- ▶ オプション「Database - complete」 を選択します。
- ▶ 「Parameter - restore from Device」 でバックアップ場所を選択します。
 - ▶ 「Drop」 をクリックしてから、「Add」 をクリックします。
 - ▶ 表示されたウィンドウで、*ServerViewDBData.bak* または *msdbData.bak* ファイルか、バックアップデバイス「ServerViewDBData」 または「msdbData」 を選択します。
- ▶ 「OK」 をクリックします。

- ▶ 「Options」 タブに切り替えます。



- ▶ トランザクションログバックアップ *ServerViewDBLog.bak* を利用できない場合はオプション「データベースは操作可能状態 ...」を選択します。利用できる場合は、オプション「データベースは操作不可能状態。別のトランザクション ログの復元は可能」を選択します。
 - ▶ 2 番目のテーブルのパス名をチェックします。「PhysicalName」で *ServerView* データベースの次のエントリを表示可能にしてください。
`<Server_Installation_Pathname>\Data\ServerViewDB.mdf`
`<Server_Installation_Pathname>\Data\ServerViewDB_log.LDF`
 - ▶ 「General」 タブに切り替えます。
 - ▶ 「Contents」 をクリックします。
 - ▶ リストアするデータベースバックアップを選択します。
 - ▶ 「Apply」 をクリックします。
- データベースバックアップがリストアされます。
4. 利用できる場合は、トランザクションログをリストアします。
- ▶ 「General」 タブで、「Restore as database」 フィールドに名前「*ServerViewDB*」を入力するか、リストから名前を選択します。
 - ▶ オプション「Transaction log」を選択します。

- ▶ 「Parameter - restore from Device」 でバックアップ場所を選択します。
- ▶ 「Drop」 をクリックしてから、「Add」 をクリックします。
- ▶ 表示されたウィンドウで、*ServerViewDBLog.bak* ファイルまたはバックアップデバイス「**ServerViewDBLog**」を選択します。
- ▶ 「OK」 をクリックします。
- ▶ 「Contents」 をクリックします。
- ▶ 「BackUp Media Content」 ウィンドウで、関連する（データベースに適合する）列を選択します。
- ▶ 「Apply」 をクリックします。
- ▶ 「General」 タブの「Backup number」 の値は、「BackUp Media Content」 ウィンドウの「Position」 の値が反映されます。
- ▶ 「Options」 タブを選択します。
- ▶ 複数のトランザクションログをリストアする場合、オプション「Leave database nonoperational - additional transaction log restore follows」 を選択します。最後のトランザクションログのみをリストアする場合、オプション「Leave database operational - no additional transaction logs can be restored」 を選択します。
- ▶ 2 番目のテーブルのパス名をチェックします。「PhysicalName」 で **ServerView** データベースの次のエントリを表示可能にする必要があります。
`<Server_Installation_Pathname>\Data\ServerViewDB.mdf`
`<Server_Installation_Pathname>\Data\ServerViewDB_log.LDF`
- ▶ 「General」 タブを選択してから、「OK」 をクリックします。
- ▶ オプション「Leave database nonoperational - additional transaction log restore follows」 を選択した場合、トランザクションログをリストアするたびに手順 4 を繰り返します。
- ▶ 最後に、「Close」 をクリックします。

リストア後に、**ServerView** データベースへのアクセスは自動で有効になります。

4.5.4 データベースバックアップのチェック

定期的に、Enterprise Manager、DbaMgr2k、SQL Server Management Studio でバックアップをチェックすることができます。Windows でリストアのセクション（[134 ページ](#)、[138 ページ](#)、[131 ページ](#)）の指示に従いますが、以下の変更があります。

- ▶ 「全般」タブで、データベースとして「復元」フィールドに「RECOVERYTEST」などの名前を入力します。
- ▶ 「オプション」タブで、以下のように復元先列のパス名を変更します。

ServerViewDB.mdf を *RecoveryServerViewDB.mdf*

ServerViewDB_log.LDF を *RecoveryServerView_log.LDF*

関連するセクションで説明したように他のすべて入力を行います。名前「RECOVERYTEST」を付けてデータベースを保存する必要があります。これは次のようにチェックできます。

- ▶ SQL Server インスタンスをクリックし、「データベース」を選択します。
- ▶ コンテキストメニューの「最新情報に更新」を選択します。

データベース「RECOVERYTEST」をリストに表示する必要があります。

さらに、以下のようにデータベース「RECOVERYTEST」を削除できます。

- ▶ データベースを選択してから、コンテキストメニューの「削除」を選択します。

4.6 MSDE/SQL Server Express - データベースの制限

Operations Manager ソフトウェアのインストール時に、MSDE 2000 または SQL Server 2005 Express をデータベースサーバとしてインストールできます。これらのデータベースサーバは無料ですが、使用可能なデータベースの最大容量など、制限がいくつかあります。最大容量は以下のとおりです。

- MSDE 2000 : 2 GB
- SQL Server 2005 Express : 4 GB

推奨される台数を超えるサーバを ServerView Operations Manager で監視している場合、例えば、大量の Threshold または Inventory Management データが作成され、ServerView データベースが最大容量に達してしまう場合があります。

このようになった場合は、一定の対策を講じない限り、ServerView Operations Manager を使用し続けることはできません。[143 ページの「Operations Manager での監視方法」](#) の項、[144 ページの「問題の解決方法」](#) の項の項を参照してください。

4.6.1 Operations Manager での監視方法

Operations Manager バージョン 5.0 では、監視ジョブ (JobServerViewCheckDBSize) は、MSDE および SQL Server Express エディションがインストールされている Operations Manager のデータベースに対して設定されます。

このジョブは、データベースの容量を一定間隔でチェックし、該当するエラーメッセージを SQL Server のエラーファイルに書き込みます。また、データベースの容量が限界に近づくと、メッセージが Operations Manager インターフェースに表示されます。このジョブは、デフォルトでは 1 時間に一度アクティビ化されます。

セットアップは、Windows タスクスケジューラを使用して行われます。

つまり、このジョブとランタイムスケジュールは、Windows タスクスケジューラのユーザインターフェースで管理できます。

4.6.2 問題の解決方法

問題を解決するために、以下のことを行うことができます。

- **SQL Server** を、容量制限のないエディション、たとえば **SQL Server Standard** または **SQL Server Enterprise** エディションにアップグレードする。
- **ServerView** サーバリストからサーバを削除して、ストレージスペースを増やす。

i **SQL Server** をフルバージョンにアップグレードすることをお勧めします。フルバージョンにアップグレードすれば、この問題は二度と起らなくなり、**Operations Manager** でサーバを台数でも監視できるようになります。ただし、**SQL Server** のフルバージョンにはライセンスが必要です。つまり、フルバージョンのソフトウェアは有償で、該当ライセンスを **Microsoft** から購入する必要があります。

代わりに、**SQL Server MSDE** を **SQL Server 2005 Express** エディションにアップデートすることもできます。**SQL Server Express** にもデータベースの容量制限がありますが、制限値は 2 倍も高く（2 GB ではなく 4 GB）、無償で入手できます。

4.7 ローカルからリモート SQL Server への ServerView データベースの移動

4.70 以上の ServerView Operations Manager では、リモート SQL サーバを ServerView データベースとしてインストールできます。

この機能は新規インストール、または 4.20 からのアップデートインストールでのみ実行できます。ローカルの SQL サーバを ServerView データベースとしてインストールされている ServerView Operations Manager からのアップデートインストールはサポートされていません。しかし、ユーザは以下に記載の構成を実行できます。

データベースの移動を行う場合は、既存の ServerView Operations Manager を少なくとも 4.71 以降にする必要があります。

i この説明は、ServerView Operations Manager のインストールのみに対応しています。インストールされている他のコンポーネント (ServerView アップデートマネージャ、ServerView Deployment Manager) は移動後に必ず再インストールする必要があります。

ローカル管理用サーバとリモートサーバは両方とも同じドメインに所属する必要があります。また、「Domain Users group」には少なくとも 1 つのユーザアカウントが必要です。

4.7.1 リモートサーバの要件

SQL Server のバージョンは、使用する両システムで同じであるか、ローカルサーバよりもリモートサーバの方が上である必要があります。

リモートサーバでは、35 ページの "要件" で記載されているように処理します。

4.7.2 構成手順

ServerView データベースをローカル管理用サーバからリモートでインストールした SQL Server に移動するには、以下を実行します。

1. ローカル ServerView Operations Manager をアップグレードさせてください。
ローカル管理者として、管理用権限のあるアカウントでログオンし、ローカル ServerView Operations Manager を最新版にアップグレードします。リモートでのインストールは、同じバージョンを使用する必要があります。そうでなければ、データベースのスキーマが適合しません。
2. ServerView データベースにアクセスする、すべてのアプリケーションおよびサービスを停止します。
 - 「ServerView Services」
 - 「ServerView Download Service」
3. 現在のローカルインストールを、以下のフォルダに保存します。アンインストールと再インストールを後で行う必要があるので、このデータのコピーが必要です。
 - ServerView Suite\svom\data\ServerView\SnmpExport\Logs
 - ServerView Suite\svom\data\ServerView\SnmpExport\ExportedData
 - ServerView Suite\svom\data\ServerView\SnmpExport\Tasks
 - ServerView Suite\svom\data\ServerView\SnmpInventory\InventoryTasks
 - ServerView Suite\svom\data\ServerView\InventoryArchives
 - ServerView Suite\svom\data\ServerView\Download\svtmpdir
 - ServerView Suite\svom\data\ServerView\Download\Tasks
 - ServerView Suite\svom\data\ServerView\OnlineUpdate\Logs
 - ServerView Suite\svom\data\ServerView\OnlineUpdate\Tasks
 - ServerView Suite\svom\data\ServerView\SnmpArchive\ArchiveTasks
 - ServerView Suite\svom\data\ServerView\SnmpArchive\Logs
 - ServerView Suite\svom\data\ServerView\Archive
 - ServerView Suite /svom/data/ServerView/CSVFiles
 - ServerView Suite/ServerView/ServerViewServices/scripts/ServerView/common/mibs
4. ローカル SQL Server インスタンスから ServerView データベースの接続を解除してコピーします。
現在の SQL データベースはローカルサーバからコピーする必要があります。以下を実行します。

- ▶ ServerView データベースファイルのパスを指定します。データベースのコンテキストメニューで「データベース」→「ServerViewDB」→「プロパティ」→「データファイル」または「ファイル」を選択すると、SQL Server Enterprise Manager または SQL Server Management Studio にパスが表示されます。
 - ▶ 次の機能を備えた対応する SQL Server 管理ツールを使用してデータベースの接続を解除します。
 - 「全てのタスク」→「データベースのデタッチ (SQL Server Enterprise Manager)」
 - 「タスク」→「デタッチ (SQL Server Management Studio)」
 - ▶ データベースファイル *ServerViewDB.mdf* および *ServerViewDB_log.LDF* はインスタンスから削除され、コピーの準備ができます。
 - ▶ データベースファイルを別のフォルダにコピーします。後で、リモート SQL Server インスタンスで ServerView データベースを置換する際に、これらのファイルが必要になります。
5. ローカル ServerView Operations Manager をアンインストールします。
- ローカルでインストールされた ServerView Operations Manager は管理用サーバでアンインストールする必要があります。エラーメッセージがない場合に正常に動作させるため、ServerView データベースを一時的に元のパスのインスタンスに再接続する必要があります。データベースのコンテキストメニューの対応する SQL Server 管理ツールを使用してデータベースを接続します。データベースファイル (*ServerViewDB.mdf*) への現在のパスを、以下のダイアログで指定する必要があります。
- 「全てのタスク」→「データベースのアタッチ」(SQL Server Enterprise Manager) または、
 - 「アタッチ」(SQL Server Management Studio)
- アンインストールを実行して、108 ページの「Operations Manager ソフトウェアのアンインストール」の項を参照してください。
6. リモート SQL Server による新規インストール
- 管理用サーバで ServerView Operations Manager の新規インストールを開始し、オプション「別サーバの SQL Server にリモート接続する」を選択します。63 ページの「管理端末でのその他の手順」に記載されているように実行します。
7. リモート SQL Server で ServerView データベースを置換します。
- インストール後に、リモートサーバの ServerView データベースはローカルインストールで前にコピーしたデータベースと置換する必要があります。以下を実行します。

- ▶ ServerView データベース、特にサービス「**ServerView Services**」と「**ServerView Download Service**」にアクセスできる管理用サーバおよびサービスすべてのアプリケーションを停止します。
 - ▶ リモート SQL Server で SQL Server Management Studio または SQL Server Enterprise Manager を開き、リモートインスタンスに接続します。
 - ▶ ServerView データベースの現在のパスを取得します。
 - ▶ ローカルデータベースでの上記の説明のとおりに、リモート SQL Server にある既存のデータベースの接続を解除します。
 - ▶ データベースファイルをローカルサーバからコピーした該当ファイルと置換します。
 - ▶ データベースに再接続します。
8. 移行時にデータベースが SQL Server 2000 から SQL Server 2005 にアップグレードされた場合、アップグレードされたデータベースで以下のコマンドを実行することをお勧めします (Query Analyzer または Management Studio)。
- DBCC UPDATEUSAGE ('ServerViewDB')*
9. 「JBoss サービス ログオン情報」ダイアログでの初回のローカルインストールの場合は、"リモート"インストールとは別のドメインユーザーアカウントが使用されます。移行されたデータベースの **JBoss** ユーザアカウントを再度入力する必要があります。
- ▶ ディレクトリ *<Installation_path>\ServerView Services\scripts\ServerViewTools* に切り替えます。
 - ▶ このディレクトリにある以下のバッチファイルを実行します。
「*GrantLoginJBoss.bat*」
 - ▶ このダイアログで、"リモート"インストールに指定したユーザアカウントを入力します。
10. リモート SQL Server インスタンスでデータベースをバックアップします。
11. 前のインストール (手順 3 で指定) で保存されたフォルダをローカル管理用サーバの該当するフォルダにコピーします。
12. 最後にローカル管理用サーバのサービス「**ServerView Services**」および「**ServerView Download Service**」を再起動します。

4.8 負荷分散の変更

ServerView を使用して受けるシステム負荷、または、同時実行のジョブ数を変更することができます。

以下のサービスは、同時実行の数を *ini* ファイルで定義されてた数だけジョブを開始します。

```
ArchiveService    <scripts>\ServerView\SnmpArchive\SVArchiveServer.ini
DownloadService  <scripts>\ServerView\Download\DownloadServer.ini
ExportService    <scripts>\ServerView\SnmpExport\ExportServer.ini
InventoryService <scripts>\ServerView\SnmpInventory\SVInventoryServer.ini
```

これらの構成ファイルはすべてセクション「**GLOBALS**」で変数「**ConcurrentJobsAllowed**」を保持します。その場所で得られた数は、開始される同時実行ジョブの数を示しています。

例

すべてのサーバのアーカイブが有効で、サーバリストには 100 の管理可能なサーバがあります。 **ConcurrentJobsAllowed** が *SVArchiveServer.ini* で 30 に設定されている場合、同時に有効化するサーバは 30 あります。

30 の開始されたジョブの 1 つのサーバについてアーカイブが完了すると、別のサーバのアーカイブが開始されます。これは、100 のサーバがアーカイブされるまで、繰り返されます。

「**ConcurrentJobsAllowed**」の現在のデフォルト値は以下のとおりです。

SVArchiveServer.ini	30
DownloadServer.ini	30
ExportServer.ini	100
SVInventoryServer.ini	30



1. ConcurrentJobsAllowed の数を変更する前に

ConcurrentJobsAllowed の数を変更する前に、各サービスのジョブが実行されていないことを確認してください。「ArchiveService」、「DownloadService」、「ExportService」の場合、タブ設定の各 GUI で簡単に確認することができます。タスクのステータスを示す青色の矢印がある場合、そのサーバのジョブは実行中です。

「InventoryService」の場合、「SnmplInventory」のプロセスが実行されているかどうかを、プロセスリストで確認してください。

Windows の場合、タスクマネージャでプロセスリストを表示できます。

2. MSDE 2000 および同時実行のジョブ

データベースサーバとして MSDE 2000 が使用されると、ServerView Operations Manager セットアップは、*.ini ファイル内の「ConcurrentJobsAllowed」のデフォルト値を 5 に設定して、パフォーマンスの問題を回避します。

Windows でのデータベースサーバとして MSDE 2000 を使用していて、SQL Server ログファイルの同時実行違反のメッセージが依然として頻繁に表示される場合は、「ConcurrentJobsAllowed」の数を減らすことにより、同時実行違反を解決できます。

以下の方法をお勧めします。

- Inventory Service の「ConcurrentJobsAllowed」の数を減らします。
- 「ArchiveService」、「DownloadService」、「ExportService」、「InventoryService」のタスクを同時に開始しないようにします。
- 他のサービスの場合、「ConcurrentJobsAllowed」の数を減らします。

3. 同時実行ジョブの数を減らすことによる影響

同時実行ジョブの数を減らすことによる影響として、一方ではシステムの負荷が減り、他方ではサーバのグループでタスクを完了するのに時間が掛かります。

4.9 エラー診断

ServerView データベースでエラーが発生する場合、エラー診断のため、各種ファイルおよび情報を、富士通のカスタマヘルプディスクに送信することができます。

4.9.1 ログファイル

ServerView データベースのインストール時にエラーが発生する場合、以下のログファイルを採取してください。

- %TEMP%\serverview.log
- <DatabaseLog>\svsqldb.log
- %windir%\ServerViewDB.ini

インストールエラーが **Wise SQL Scripts** または **bcp** によるファイルのインポート中に発生する場合、<DiagnosePath> ディレクトリを圧縮してください。**ServerView** を **ServerView** データベースに接続処理中にエラーが発生する場合、<SVCommon> ディレクトリにあるログファイル *.log を採取してください。

関連する環境変数 (%TEMP% および %windir%) をその値で置換します。すべての **Windows OS** では、変数の値は **set** コマンドによるコマンドプロンプトに表示されます。

コマンドプロンプトに以下のコマンドを入力して、角括弧にワイルドカードを取得します。

```
type %windir%\ServerViewDB.ini | findstr /B DatabaseLog
type %windir%\ServerViewDB.ini | findstr /B DiagnosePath
type %windir%\ServerViewDB.ini | findstr /B SVCommon
```

ログファイルのフォルダを表示するには、Windows Explorer を次のように設定する必要があります。

- ▶ メニューバーで、「ツール」 → 「フォルダオプション」 → 「View Tools」の順に選択します。
- ▶ 「詳細設定」で、次のように設定します。
 - ▶ 「隠しファイルとフォルダを表示する」オプションを有効にします。
 - ▶ 「既知のファイルの種類のファイル拡張子を表示しない」オプションを無効にします。
 - ▶ 「保護されたオペーレーティングシステム ファイルを表示しない(推奨)」オプションを無効にします。

4.9.2 エラーイベントの重要な情報

エラーイベントでは、以下の情報が重要です。

- **Operations Manager のバージョン**

「ソフトウェア」のエントリ「Fujitsu ServerView Operations Manager」をクリックしてから、サポート情報をクリックします。

- **OS のバージョン**

Windows エクスプローラを開いて、ヘルプメニューから「バージョン情報」を選択します。

- **OS の言語**

- インストールされているデータベース (SQL Server 2008/2005/2000 または MSDE 2000)

入力プロンプトで以下のコマンドを入力します。

```
osql -S <SQL Server instance> -E  
select @@version  
GO
```

以下のような詳細が表示されます。

```
Microsoft SQL Server 2005 - 9.00.3042.00 (Intel X86)  
Feb 9 2007 22:47:07  
Copyright • 1988-2005 Microsoft Corporation  
Express Edition on Windows NT 5.2 (Build 3790: Service Pack  
1)
```

- インストールされている言語

入力プロンプトで以下のコマンドを入力します。

```
osql -S <SQL Server instance> -E  
xp_msver language  
GO
```

4.9.3 ServerViewDB_log.LDF ファイルの肥大化

118 ページの「[ServerView データベースのバックアップ](#)」の項に記載されているように、完全バックアップモードのバックアップジョブを定期的に実行しなかつたり一定期間実行しなかつたりすると、トランザクションログファイル *ServerViewDB_log.LDF* のサイズが非常に大きくなることがあります。このような場合は、手動でサイズを小さくする必要があります。

i バックアップモードのバックアップジョブがないことは *ServerViewDB_log.LDF* のサイズがこれ以上大きくならないことを意味します。

以下を実行します。

1. *ServerViewDB_log.LDF* ファイルのサイズをチェックします。

ファイルは以下のディレクトリにあります。

- SQL Server 2000 エディションの場合
%ProgramFiles%\Microsoft SQL Server\MSSQL\$<Instance_name>\Data\
- SQL Server 2008/2005 エディションの場合
%ProgramFiles%\Microsoft SQL Server\MSSQL.<n>\MSSQL\Data\

ServerViewDB_log.LDF ファイルが *ServerViewDB.mdf* ファイルより大きい場合、圧縮する必要があります。

2. ファイル *ServerViewDB_log.LDF* を圧縮します。

- サービス「**ServerView Services**」と「**ServerView Download Service**」を停止します。
- 該当する場合、データベース管理プログラムを閉じます。
- 「**dbcc_shrink.sql**」スクリプトを呼び出します。

Operations Manager バージョン 4.91 では、圧縮用に「**dbcc_shrink.sql**」スクリプトが用意されています。スクリプトは <DllPath>\Tools ディレクトリにあります。このディレクトリには、ドキュメント *Shrink_ServerViewDB_log.LDF.doc* も格納されており、この問題に関して必要に応じて更新された詳細な説明があります。

スクリプトを実行するには、入力プロンプトに以下のコマンドを入力します。

```
type %windir%\ServerViewDB.ini | findstr Server_instance
type %windir%\ServerViewDB.ini | findstr -i DllPath=
cd /d <DllPath>\Tools
osql -S <Server_instance> -E -i dbcc_shrink.sql -n
```

- ファイルのサイズを再度チェック（1を参照）して、*ServerViewDB_log.LDF* ファイルが *ServerViewDB.mdf* ファイルよりも小さいことを確認します。
- サービスを起動します。
 - ▶ SQL Server エージェント「SQLSERVERAGENT」（SQL Server 2008 Express/2005 Express および MSDE 2000 以外）を起動します。
 - ▶ 開始タイプを「自動」に設定します（SQL Server 2008 Express/2005 Express および MSDE 2000 以外）。
 - ▶ サービス「ServerView Services」と「ServerView Download Service」を開始します。
 - ▶ そして、バックアップジョブ *JobServerViewLongInterval* を開始します。

バックアップジョブ *JobServerViewLongInterval* はデータベースとトランザクションログのバックアップを作成し、バックアップファイル *ServerViewDBData.bak* および *ServerViewDBLog.bak* のサイズを小さくします。

SQL Server 2008 Express/2005 Express と MSDE 2000 の場合、対応する SQL Server エージェントと他のすべての SQL Server のエディションについて、バックアップジョブは Windows タスクスケジューラで実行されます。

3. 推奨事項

完全 バックアップモードでは、**ServerView** バックアップジョブが正常に実行されていることをチェックします。詳細情報については、[118 ページ](#) の「**ServerView** データベースのバックアップ」の項を参照してください。

定期的に実行されるバックアップジョブ *JobServerViewHourly* により、*ServerViewDB_log.LDF* のサイズが大きくなりすぎないようにします。このジョブはファイル内にある毎時実行する際に不要な部分を削除します。

4. 追加のトラブルシューティング

バックアップジョブのエラーメッセージは *ERRORLOG** と呼ばれるログファイルに記載されています。これらのファイルは、使用する SQL Server の LOG ディレクトリにあります。For MSDEMSDE 2000 の場合、ファイルは以下のディレクトリに格納されています。

%ProgramFiles%\Microsoft SQL Server\MSSQL\$SQLSERVERVIEW\LOG.

ログファイルに以下のメッセージが表示される場合、適切な対策を行う必要があります。

"The backup data in 'ServerViewDBLog' is incorrectly formatted. Backups cannot be appended, but existing backup sets may still be usable."

バックアップを新規作成する場合、既存のバックアップデバイスのフォーマットを整える必要があります。以下の場合、再フォーマットする必要があります。

1. バックアップが中断された。
2. ディスクエラーが発生した。
3. 使用可能なディスク領域が十分ない。
4. バックアップパスを検出できなかった。
5. バックアップ作成時に書き込みエラーが発生した。

バックアップの再フォーマット：

- ▶ 原因を検出し、対処します。
すべての可能性をチェックします（上記を参照）。1. および 2. の場合：追加情報について、イベント表示でアプリケーションとシステムログをチェックします。
- ▶ 入力プロンプトに以下のコマンドを入力して、**ServerView** バックアップファイルのバックアップパス <DBBackupPath> を検出します。

```
type %windir%\ServerViewDB.ini | findstr DBBackupPath
type %windir%\ServerViewDB.ini | findstr Server_Instance
osql | sqlcmd -S <Server_Instance> -E
```

SQL Server 2008/2005 で *sqlcmd* を使用している場合。

- ▶ バックアップファイルをフォーマットします。

```
BACKUP DATABASE ServerViewDB TO DISK =
'<DBBackupPath>ServerViewDBData.bak' WITH FORMAT,
MEDIANAME='ServerViewDB'
GO
BACKUP LOG ServerViewDB TO DISK =
'<DBBackupPath>ServerViewDBLog.bak' WITH FORMAT,
MEDIANAME='ServerViewDB'
GO
quit
```

- ▶ ServerView バックアップジョブを正常に実行していることを確認し、118 ページの「[ServerView データベースのバックアップ](#)」の項を参照してください。

4.9.4 ServerView データベースのエクスポート

エラー診断の場合、ServerView データベースのコピーおよびトランザクションログをサービスセンターに送信する必要がある場合があります。

このまれなイベントでは、サービス「MSSQL\$SQLSERVIEWIEW」または「MSSQLSERVER」を停止して、データベースをオフラインに切り替えることをお勧めします（SQL Server 2008/2005 の場合、サービス名は「SQL Server (SQLSERVIEWIEW)」または「SQL Server (MSSQLSERVER)」）。これらのサービスの停止後、誰もデータベースにアクセスできなくなります。したがって、このセクションで説明された手順は、毎日繰り返し使用されることに適していません。しかし、エラー解析のために、ServerView データベースファイルやトランザクションログファイル（拡張子 *.mdf*）をインポートすることは、データベースのバックアップファイル（拡張子 *.bak*）から復元するよりも管理しやすいです。

これには、以下の手順が必要です。

- エラーに関する重要な情報を見つけ出し、153 ページの「[エラーイベントの重要な情報](#)」の項を参照してください。
- ServerView データベースおよびトランザクションログのディレクトリを検出します。

Enterprise Manager、DbaMgr2k、SQL Server Management Studio の場合

- ▶ Enterprise Manager または DbaMgr2k を起動します。
- ▶ SQL Server インスタンスを選択します。
- ▶ 「データベース」 → 「ServerViewDB」を選択してから、コンテキストメニューの「プロパティ」を選択します。
- ▶ 「データファイル」タブをクリックします。

「場所」列にファイル *ServerViewDB.mdf* のパス名が含まれています。SQL Server Management Studio の「パス」列には、パス名が含まれています。

- ▶ Enterprise Manager または DbaMgr2k で、「トランザクション ログ」タブに切り替えます。

「場所」列にファイル *ServerViewDB_log.LDF* のパス名が含まれています。

osql の場合

- ▶ *osql* を起動して、以下のコマンドを入力します。

```
use ServerViewDB
exec sp_helpfile
GO
```

「filename」列にはパス名が表示されます。

- サービス「SQL Server <DbService>」を停止します。「DbService」の下にある構成ファイル *ServerViewDB.ini* でサービス名が検出できます。
- Service Center にファイル *ServerViewDB.mdf* および *ServerViewDB_log.LDF* をトランザクションログと一緒に送信します。
- サービス「SQL Server <DbService>」を開始します。

5 コマンドラインインターフェイス

5.1 コマンドラインによる **Operations Manager** のインストール

メニューによるインストールだけでなく、Windows のコマンドラインによつても、**Operations Manager** および **ServerView** イベントマネージャをインストールできます。**ServerView Suite DVD 1** をセットし、**Operations Manager** のインストールパッケージを解凍するように指定してください。なお、ファイルを出力するディレクトリを指定することもできます。

言語

コマンドラインオプション */ja* または */en* を使用して、目的のインストールおよびアプリケーションの言語を指定できます。

これによって、標準インストールの言語とは異なる言語を使用できます。次の 2 つの別の方法が役に立ちます。

- 英語 OS へのインストールを開始します。

```
start /wait serverview.exe /ja
```

Operations Manager のインストールおよびアプリケーションの言語が日本語で表示されます。

- 日本語 OS へのインストールを開始します。

```
start /wait serverview.exe /en
```

Operations Manager のインストールおよびアプリケーションの言語が英語で表示されます。

自動インストール

自動インストールの場合、以下の各オプションのデフォルト値について定義する構成ファイル (*silent_install.ini*) があります。

- インストールパス
- Web サーバ
- ポート番号
- ホスト名
- IP アドレス

このファイルを編集して要件に合わせて調整することができます。この構成ファイルによって、インストールダイアログが表示されないサイレントインストールを行うことができます。

インストール中に、以下の条件を満たすインスタンスがシステムにインストールされているかどうか、チェックを行います。

- MSDE 2000 (Service Pack 4)、または SQL Server 2005 Express が SQL Server のインスタンス名 「SQLSERVIEWERVIEW」 で存在する。
- 別のインスタンス名で SQL Server 2008/2005/2000 Standard/Enterprise/Workgroup Edition が存在する。

条件を満たすインスタンスが見つからない場合、Windows 2003 の場合は MSDE 2000 が、Windows 2008 の場合は SQL Server 2005 (Express) がインストールされます。

サイレントインストール

サイレントインストールを実行するには、コマンドラインに切り替えます。以下の呼び出しで自動インストールを開始します。

```
start /wait serverview.exe /s
```

インストール完了後、アプリケーションイベントログの Windows イベント表示でインストールが正常に完了したかどうかを確認します。インストールログは %TEMP%\MSIsvinst.log ファイルで確認できます。



Operations Manager は ODBC V3.51 (Service Pack 1) のダイナミックリンクライブラリと一緒にインストールされます。これらに含まれる DLL より最新のバージョンがシステムにインストールされている場合、異なるバージョンに伴うエラーメッセージが表示される可能性があります。この問題が発生した場合には、Microsoft のサポート情報を調べ、記事 ID Q170769、PRB: "ODBC Resource DLL is a Different Version Than..." というエラーを確認してください。この記事は、問題についての概要を説明し、その解決方法を示しています。記事は以下の Web で検索できます。

<http://support.microsoft.com/support/kb/articles/Q170/7/69.asp>.

5.2 osql によるデータベース管理 (Windows)

SQL Server 2000 または MSDE 2000 は、エンタープライズマネージャまたは DbaMgr2K だけでなく、osql でも管理できます。SQL Server 2000 または MSDE 2000 がインストールされている場合、同様に osql がインストールされます。osql を使用して、以下の機能を実行することができます。

- MSDE 2000 の製品バージョンおよび言語をチェックする
- バックアップのタイミングをチェックおよび指定する
- ジョブの属性を変更してスケジュール設定を変更する
- ServerView データベースをリストアする

MSDE 2000 の製品バージョンおよび言語をチェックする

以下のようにして MSDE 2000 の製品バージョンおよび言語をチェックすることができます。

- ▶ 入力プロンプトに切り替えます。
- ▶ 以下のコマンドで osql を起動します。

```
osql -S <SQL Server instance> -E  
xp_msver  
GO
```

必要な情報は 2 *ProductVersion* および 3 *Language* というエントリです。

quit コマンドを使用して osql を終了します。

バックアップジョブの設定のタイミングをチェックおよび指定する

以下のようにして自動的に実行されるバックアップジョブの設定のタイミングをチェックできます。

- ▶ コマンドプロンプトを起動します。
- ▶ 以下のコマンドで osql を起動します。

```
osql -S <SQL Server instance> -E -Q "use ServerViewDB exec  
SVGet_JobInfo" -w 300 -s "TAB" -o <output_filename>
```

Excel で出力ファイルを開くことができます。*frq_type* と *frq_interval* で時間間隔の値を探します。*freq_type* の値が 4 (daily) である場合、*freq_interval* の値が日数です。*freq_type* の値が 8 (weekly) である場合、*freq_interval is* の値は以下のとおりです。

1 = 日曜日
2 = 月曜日
4 = 火曜日
8 = 水曜日
16 = 木曜日
32 = 金曜日
64 = 土曜日

ジョブの属性およびスケジュール設定の変更

ジョブの属性およびスケジュール設定を変更するときには、保存したプロシージャ「*sp_update_jobschedule*」および「*sp_update_job*」を使用することができます。

プロシージャは Microsoft MSDN オンラインページで説明されています。

- ▶ Microsoft Web サイト (www.microsoft.jp) を開きます。
- ▶ MSDN オンラインを選択します。
- ▶ これらのプロシージャを探します。

バックアップジョブが正常に実行されると、*<DbBackupPath>* ディレクトリに *Control*.txt* ファイルが見つかります。*DbBackupPath* の下にある構成ファイル *ServerViewDB.ini* でパス名を検索します。

ServerView データベースをリストアする (Windows)

ServerView データベースをリストアする前に、最初にデータベースへのアクセスを制限する必要があります。その後、データベースとトランザクションログをリストアできます。

- ▶ コマンドプロンプトを起動します。
- ▶ 以下のコマンドで osql を起動します。

```
osql -S <SQL Server instance> -E
```

データベースへのアクセスの制限

以下のコマンドを使用してデータベースへのアクセスを制限します。

```
exec sp_dboption 'ServerViewDB', 'dbo use', 'true'  
GO
```

データベースのバックアップをリストアする

以下のコマンド、オプション *NORECOVERY* を使用して、選択したデータベースのバックアップをリストアします。

```
RESTORE DATABASE [ServerViewDB] FROM DISK =  
'<Path>\ServerViewDBData.bak' WITH FILE = <Position>,  
NORECOVERY,  
MOVE 'ServerViewDB' TO '<Drive>:\Program Files\Microsoft SQL  
Server\MSSQL$SQLSERVERVIEW\Data\ServerViewDB.mdf'  
GO
```

トランザクションログをリストアする

以下のコマンド、オプション *NORECOVERY* を使用して、選択したトランザクションログのバックアップをリストアします。

```
RESTORE LOG [ServerViewDB] FROM DISK =  
'<Path>\ServerViewDBLog.bak' WITH FILE = <Position>,  
NORECOVERY,  
MOVE 'ServerViewDB_log' TO '<Drive>:\Program Files\Microsoft SQL  
Server\MSSQL$SQLSERVERVIEW\Data\ServerViewDB_log.LDF'  
GO
```

最新（最後）のトランザクションログをリストアする

以下のコマンドを使用して、最新（最後）のトランザクションログをリストアします。

```
RESTORE LOG [ServerViewDB] FROM DISK =  
'<Path>\ServerViewDBLog.bak' WITH FILE = <Position>,  
RECOVERY,  
MOVE 'ServerViewDB_log' TO '<Drive>:\Program Files\Microsoft SQL  
Server\MSSQL$SQLSERVERVIEW\Data\ServerViewDB_log.LDF'  
GO
```

6 富士通テクノロジー・ソリューションズ エンドユーザー ソフトウェア 使用 許諾契約書

1. 本契約書の主題

1.1 本契約書においては “本ソフトウェア” は、富士通テクノロジー・ソリューションズのソフトウェア製品データシートにオブジェクトコード、バージョン、仕様が記載されているソフトウェアを意味します。

本ソフトウェアは、機械可読命令、印刷された文書類、使用を許諾された関連マテリアルからなります。

1.2 本ソフトウェアを御使用になる前にこの契約書を注意してお読みください。本契約書のライセンス条件に同意されない場合、ユーザーは本ソフトウェアの使用を許可されませんので、必ず本ソフトウェアのすべてのコピーとすべての付属品目を購入証明書とともに直ちにライセンサー/サプライセンサー(富士通テクノロジー・ソリューションズかまたはユーザーに本ソフトウェアを提供した再販業者)に返送してください。代金を全額返却いたします。

1.3 本ソフトウェアの使用には、該当するライセンス料の適正な支払いを必要とします。本ソフトウェアを使用することで、ユーザーは本契約書の条件に拘束されることに同意したことになります。

1.4 富士通テクノロジー・ソリューションズは、ソフトウェア海賊行為への対策として、将来いつでも、追加のソフトウェアライセンスキーやライセンス証明書を付加する権利を保有します。

1.5 サードパーティーソフトウェアサプライヤーからのソフトウェアコンポーネントで納品品目に含まれているものは、別個のライセンス契約の対象となります。そのライセンス契約書は本ソフトウェアに付属しているか、お求めがあれば富士通テクノロジー・ソリューションズが伝送します。

2. エンドユーザー ライセンス

2.1 富士通テクノロジー・ソリューションズは、ユーザーに対し、購入されたライセンス口数に相当するワークステーションで本ソフトウェアを使用する非独占的かつ譲渡不能のライセンスを付与します。追加のライセンスを購入

されない限り、最大ライセンス口数を超えるワークステーションで、または指定のタイプを超えるハードウェアで、本ソフトウェアを操作することを許されません。

アーカイビング目的で本ソフトウェアのバックアップコピーを作成することは許されます。ただし、本ソフトウェアのコピーまたは部分コピーに著作権表示その他の所有権情報を正しく表示することが必要です。

2.2 本ソフトウェアをコピー、修正、または頒布してはいけません。さらに、本ソフトウェアのリコンパイル、リエンジニアリング、変換、改訂、コンパイル、修正を行ってはいけません。ユーザーは本ソフトウェアを対応するハードウェアを売ることなくサブライセンスしてはならず、また本ソフトウェアを譲渡、賃貸、リース、あるいは移転してはなりません。ただし本契約書により明示的に許可されている場合、または強制的法規による場合を除きます。

2.3 本ソフトウェアをプログラム・アップグレードとして取得された場合は、旧ソフトウェアバージョン使用のライセンスは、本ソフトウェアのアップグレードバージョンのインストールとともに自動的に終了します。旧ソフトウェアバージョンの一部分をアップグレードバージョンに置き換えた場合は、旧ソフトウェアバージョンの残余部分も置き換えられるかまたは他の形で非活動化、またはシャットダウンされるまで、旧ソフトウェアバージョンのライセンスは引き続き有効です。

2.4 富士通テクノロジー・ソリューションズの対応するソフトウェアデータシートで特に指定されている場合を除き、あるソフトウェアバージョンまたはリリースに対するライセンスは、本ソフトウェアの新たなリリース(アップデート)、新たなバージョン(アップグレード)またはテクニカルサポートサービスに対する権利を付与しません。補足サポート契約およびメンテナンスサービスは、新たなリリース、新たなバージョン、追加のテクニカルサポートサービスを含めるかまたは含めずに、直接に富士通テクノロジー・ソリューションズから、または認可ソフトウェア再販業者から、別途購入することができます。

3. ダウンロード

富士通テクノロジー・ソリューションズよりネットワークまたは類似の頒布経路を通じて提供されたソフトウェアについては、次の追加条件が適用されます。

富士通テクノロジー・ソリューションズよりダウンロードのために提供された製品はすべて選定され、利用可能にされ、また一サードパーティより供給された場合は一修正なしに提供されています。ただし最新バージョンを確認することと、ダウンロードするマテリアルのユーザー自身の目的に対する

使用性と御使用のシステム上での使用性を確認することは、ユーザーの全面的責任です。本ソフトウェアはユーザー自身のリスクでダウンロードしてください。富士通テクノロジー・ソリューションズは責任を負わず、特に伝送エラーやダウンロードプロセスの間に発生する問題（回線故障、接続遮断、サーバ故障、データ破損など）については一切責任を負いません。

富士通テクノロジー・ソリューションズのウェブサイトは、富士通テクノロジー・ソリューションズが1か所以上のオフィスを置いている国のためにのみ運用、管理されています。本ソフトウェアや文書類が上記の国々以外の場所でも富士通テクノロジー・ソリューションズのウェブサイトからダウンロードできること、またはその可能性があることについて、富士通テクノロジー・ソリューションズは責任を負いません。ユーザーが国外から富士通テクノロジー・ソリューションズのウェブサイトにアクセスされる場合は、ユーザーには現地の法規を順守する全面的責任があります。富士通テクノロジー・ソリューションズは、本ソフトウェアや文書類を富士通テクノロジー・ソリューションズのウェブサイトからダウンロードすることが違法と見なされている国において、そのようなダウンロードを行うことを明示的に禁じます。

4. 著作権

本ソフトウェア（本ソフトウェアの一部分を含む）にかかるすべての権利とライセンス（本使用許諾契約において明示的にユーザーに譲与されたものを除く）、ならびにすべての所有権と使用権は、全面的に富士通テクノロジー・ソリューションズかサードパーティライセンサー、またはその両者の所有にとどまります。

本使用許諾契約はユーザーに対し、富士通テクノロジー・ソリューションズまたはサードパーティライセンサーのブランド、ロゴ、または商標を使用する許可を与えるものではなく、ユーザーは富士通テクノロジー・ソリューションズのブランド、ロゴ、または商標に紛らわしく類似した他のブランドを使用することも許されません。本ソフトウェアまたは富士通テクノロジー・ソリューションズに関してブランド、ロゴ、または商標を使用するには、そのつど富士通テクノロジー・ソリューションズの明示的同意を必要とします。

5. 本ソフトウェアが再販業者により販売・納入された場合の、ライセンサーの保証および責任の否認

ユーザーが本ソフトウェアを直接、認定再販業者（以下“再販業者”という）から購入された場合は、本ソフトウェアをインストールし使用する権利は、ライセンシーとしてのユーザーとそれぞれの再販業者との間で合意する追加のソフトウェアライセンス条件に従うことがあります。

認定ソフトウェア再販売の場合はすべて、ソフトウェアは再販業者より直接ライセンシーにサブライセンスされ、利用可能にされます。その場合、富士通テクノロジー・ソリューションズは、ソフトウェアライセンスの取得に関する限り、ライセンシーであるユーザーと再販業者との間のソフトウェアライセンス契約の契約当事者ではありません。したがって、ソフトウェアライセンスをめぐる法的請求は、再販業者との契約を基礎としてのみ主張することができます。ただしいかなる場合も、ライセンシーに認められる使用許諾の範囲は、本契約書の第1、2、3、および4条に明記された使用許諾契約の範囲を超えないものとします。

強制的法規、特に賠償責任と保証を律する強制的法規で、エンドユーザー使用許諾契約に関する規則に関連して、またライセンシーの再販業者に対する請求権に関して免責され得ない法規に従うことを条件として、富士通テクノロジー・ソリューションズは本契約書において本ソフトウェアに関する一切の保証を否認します。同じ理由により、富士通テクノロジー・ソリューションズは、サードパーティの権利の侵害についての一切の賠償責任/請求、またソフトウェアの市販性や特定目的への適合性に関する黙示的保証も否認します。この責任の否認は富士通テクノロジー・ソリューションズの故意または悪意ある行動に対しては適用されません。

本エンドユーザー使用許諾契約において、富士通テクノロジー・ソリューションズは明示的・黙示的を問わずいかなる種類の保証も一切与えていません。

6. シェアウェア、フリーウェア、オープンソースソフトウェア・コンポーネントに関する責任の否認

6.1 本ソフトウェアは、富士通テクノロジー・ソリューションズがサードパーティから受け取ったフリーウェアまたはシェアウェアを含むことがあります。富士通テクノロジー・ソリューションズはそうしたフリーウェアまたはシェアウェアの使用に対しライセンス料を支払っていません。したがって、ライセンシーは当該フリーウェアまたはシェアウェアの使用に対しライセンス料を請求されません。ユーザーは、富士通テクノロジー・ソリューションズがそれゆえこうしたフリーウェアまたはシェアウェア・コンポーネントに関して保証を与えず、またそれぞのフリーウェアまたはシェアウェアの所有、頒布、使用に関連するいかなる賠償責任も引き受けないことを認め、受け入れます。

6.2 本ソフトウェアは、「オープンソースモデル」にしたがい開発され、多くの場合 GPL (General Public License: <http://www.gnu.org/copyleft/gpl.html>) 条件、または配布時にそれぞれのオープンソースコンポーネントに適用される他の標準オープンソース使用許諾条件に基づき頒布されるオープンソースソフトウェアコンポーネントを含むことがあります。ユーザーは、こうしたオープンソースソフトウェアコンポーネントの使用許諾が多くの場合上記の

GPL 条件かまたは他の形でオープンソースソフトウェアコンポーネントに付属している条件に準拠することを認め、受け入れます。富士通テクノロジー・ソリューションズは、提供したオープンソースソフトウェアコンポーネントについてライセンス料もその他の報酬も受け取っていません。富士通テクノロジー・ソリューションズまたはサードパーティーがオープンソースソフトウェアコンポーネントに関連して何らかの報酬を受け取ると限るとき、それは多くの場合追加のデリバリーアイテムやサービスの対価として受け取るものです。

オープンソースソフトウェアコンポーネントの開発及び頒布の特殊性にかんがみ、富士通テクノロジー・ソリューションズはその種のコンポーネントについて明示的・黙示的を問わず一切責任を負わず、またそのようなオープンソースソフトウェアコンポーネントについて、特に仕様不足、機能の欠如、プログラミングエラー、その他の誤作動に関して、いかなる保証も免責されるものとします。

7. 賠償責任の一般的限定

7.1 富士通テクノロジー・ソリューションズも同社のサプライヤーも、業務中断、利益や売上の逸失、データ損失、または資本コストに由来または関連する損害を含め、いかなる派生的・間接的損害についても賠償責任を負いかねます。富士通テクノロジー・ソリューションズと同社のサプライヤーは、本ソフトウェアの保持、販売、使用または使用不能に由来する追加の付随的・派生的費用、または他のいかなる種類の損失、費用、経費についても、賠償責任を負いかねます。この場合、当該請求が保証を受ける権利、契約、不法行為責任、または他の法的理論により主張されているかどうかはかかわりありません。

7.2 富士通テクノロジー・ソリューションズ側の、免責されていないか、強制的法律のために完全には免責され得ない契約違反やその他の行為、または失効の結果直接的損害が生じた場合、当該損害に対する富士通テクノロジー・ソリューションズの賠償責任は **“250,000.00** に限定されます。直接的損害に対する他の一切の賠償責任は免責されるものとします。富士通テクノロジー・ソリューションズの軽微な過失の結果生じた損害は、適用法規の許容する範囲まで免責されるものとします。

7.3 本契約書による賠償責任の限定および免責は、富士通テクノロジー・ソリューションズが適用法規にしたがい義務的賠償責任を負い、かつ当該賠償責任が最大額まで制限できない損害（例えば、身体的損害、製造物責任や悪意ある虚偽報告による損害）には適用されません。

8. 輸出管理

そのコンポーネント、あるいはコンポーネントの性質または目的のために、本ソフトウェアや付属する文書類の輸出は監督官庁による承認が必要となる場合があります。本ソフトウェアの輸出を意図している場合は、ユーザーは関連する輸出管理法規を順守するために必要なすべての承認および許可を取得しなければなりません。

本ソフトウェアが核、化学、または生物兵器に関連して、またはミサイル技術のために用いられると推定される理由がある場合には、本ソフトウェアを輸出してはなりません。さらにユーザーは、米国の適用輸出規制（特に、Table of Denial Orders/U.S. 輸出否認命令表、Denied Persons Lists 輸出否認者リスト (DPL)）、E.U. の輸出規制（特に EU Terrorist List テロリストリスト）、またはドイツの輸出当局や他のいざれかの国の管轄当局より公布される該当する警告に記載されている企業または人物に対し、本ソフトウェアを引き渡してはならず、間接的に引き渡させてなりません。

ドイツ連邦共和国、欧州連合、アメリカ合衆国、または他の国々の適用輸出規制への違反となる場合は、いかなる情況でも富士通テクノロジー・ソリューションズはソフトウェア、パッチ、アップデート、またはアップグレードを提供する義務も、ダウンロードその他の契約上の約定を遂行するためのソフトウェアを提供する義務も負いません。

本ソフトウェアまたはそのコピーを輸出または再輸出する場合、それは適用輸出法規への違反、かつ本契約書の条件への重大な違反となる可能性があります。

9. その他

9.1 本契約書のいざれかの条件または本契約書の条件に従う他の契約のいざれかの条件が（一部または全部）無効もしくは強行不能と判明した場合、それ以外のすべての条件の有効性は影響を受けません。ただし、法律の隙間を埋めるべく適用可能な法律規則を適用しても、残余の契約条件を順守することがいざれかの契約当事者にとって不当な困難となるであろう場合は、その限りでありません。

9.2 ユーザー / ライセンサーが支払期限の来たライセンス料を支払わないか、ライセンサーが本使用許諾契約の必須条件を順守しない場合は、富士通テクノロジー・ソリューションズは、本使用許諾契約を解除する権利を有します。かかる契約解除の場合には、保有する本ソフトウェアのあらゆるコピーを直ちに返却し、[ソフトウェアコピーの] 完全な返却または当該コピーの破棄を文書で確認しなければなりません。

9.3 いずれかの当事者に義務の不順守があつても、その不順守がその当事者の統御を超えた不可抗力による場合は、ユーザーも富士通テクノロジー・ソリューションズも当該不順守について責任または賠償責任を問われないものとします。

9.4 これらの使用許諾条件のあらゆる変更や修正は、文書に作成される場合にのみ有効とします。

10. 準拠法

10.1 これらの使用許諾条件はドイツ連邦共和国の法律に準拠します。

10.2 万一第 10.1 条の規定が強行不能とされた場合には、これらの使用許諾条件はユーザーが本ソフトウェアを取得した国の法律に準拠するものとします。ただし次の国々は別とします。1) オーストリアでは、本使用許諾契約の条件は、事業契約が締結されている州または主権領土の法律に準拠します。2) アルバニア、アルメニア、ボスニア・ヘルツェゴビナ、ブルガリア、クロアチア、チェコ共和国、グルジア、ハンガリー、カザフスタン、キルギス、マケドニア旧ユーゴスラビア共和国 (FYROM)、モルダビア、ポーランド、ルーマニア、ロシア、スロバキア、スロベニア、ウクライナ、およびユーゴスラビア連邦共和国では、本使用許諾契約の条件はドイツ連邦共和国の法律に準拠します。3) 英国では、これらの使用許諾条件に関するすべての紛争は英国法に準拠し、英国の裁判所が専属管轄権を有します。4) カナダでは、本使用許諾契約の条件はオンタリオ州法に準拠します。5) アメリカ合衆国とペルトリコ、ならびに中華人民共和国では、本使用許諾契約の条件は米国、ニューヨーク州の法律に準拠します。

索引

D

DbaMgr2k 116

E

Enterprise Manager 116

M

MSDE 2000 55

O

Operations Manager のバージョ

ン 153

osql 114, 116, 162

OS のバージョン 153

S

ServerView Database の管理 114

ServerView アーキテクチャ 17

ServerView データベース

管理ステーションへのローカルの
インストール 33

別のシステムへのリモートのイン
ストール 35

管理 162

ServerView データベース
(Windows) 111

ServerView データベースのバック
アップ 118

ServerView データベース のリスト
ア 131

ServerView データベース
エクスポート 157

service

MSSQL\$SQLSERVERRVIEW 11

8

MSSQLSERVER 118

SQL Server 2000 57

基本インストール 58

SQL Server 2000 (MSDE 2000) 55

SQL Server 2005 47

SQL Server Management Studio

(Basic) 114

SQL Server Management Studio
(Express) 114

SQL Server インスタンス
認識 34

SQL Server インスタンスの認識 34

SQL Server インスタンス名 32

sqlcmd 114

W

Web サーバ Web さーば] 24

Web ブラウザ 26

設定 26

あ

アップグレード

MSDE 2000 から SQL Server
2000 85

SQL Server 2005 Express から
SQL Server 2005 81

SQL Server 2008 Express から
SQL Server 2008 78

アンインストール

SQL Server インスタンス 110

い

インストール

Operations Manager ソフトウェ
アのメニュー駆動 91

SQL Server 2000 58

SQL Server 2005

Enterprise/Standard/Workgrou
p Edition 53

SQL Server 2005 Express
Edition 49

インストールオプション

SQL Server 31

インストール済みのデータベ
ース 153

え

エディション

 SQL Server 2000 57
 SQL Server 2005 48

エラー診断 151

こ

構成ファイル ServerViewDB.ini 111

せ

設定

 Web ブラウザ 26

て

データベースバックアップ

 チェック 142

データベースへの接続の中断 113

は

バックアップジョブの進行状況 123

バックアップファイル

 存在チェック 126

ほ

本書の表記 16

ろ

ログファイル 151